
ぬらりひよんの孫 氷炎

則長

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ぬらりひよんの孫 氷炎

【Nコード】

N1191N

【作者名】

則長

【あらすじ】

かつて名を轟かせた魑魅魍魎の主、ぬらりひよん。

その孫、リクオの傍らで共に戦う妖怪がいた。

それは時に炎をつかい他を蹂躪し、時に氷をつかい他を凍てつかせた。

ぬらりひよんの孫のオリ主ものです。

主人公などオリジナル妖怪が出ますので注意してください。

たまにオリジナル話が入りますが基本原作に沿っていきます。

妖怪となる（前書き）

思いつきで始めちゃいました。

あいかわらず更新不定期ですが読んでくれたら嬉しいです。

妖怪となる

関東平野のとある町、浮世絵町。

そこには、人々に今も畏れられる『極道一家』があるという

「リクオー。早く行かないとバス乗り遅れるぞ。」

「うん。今、行くよー」

先に準備ができた俺は双子の兄のリクオを待っているところだ。
まあ、双子って言っても俺は養子だけどね。

「お待たせー」

「よし、行くか」

間に合ったか。

バス停には俺たちの幼馴染の家長カナが待っていた。

「おっそいよ、二人とも！」

「すまん、カナ。リクオが遅くてよぉ」

「だってさぁーあいつらが」

っとそれは言ったらだめだろ

「ちょ、リクオ！それは言っちゃまずいだろ」

そんなこんなで学校に着き授業を受ける。
つてかりクオ。

4分の1だけなのによくその年で50メートルをそんな速さではし
れるな。

そして今日最後の授業は自由研究発表

最後はクラスメイトの清継の郷土の伝説についてだった。

だが、しかし妖怪を悪者扱いされそれにリクオが反論してしまった。

「妖怪はすごくいいやつだよ！」

「おめー何だよ！清継くんの作った自由研究にケチつけよーっての
か！ー！」

清継の取り巻きの島だ。

するとカナが後ろで見ている俺に話しかけてくる。

「ね、ねえサイキ。リクオ君あんなこといつてるけど言いの？」

え、えーつと。そうだなあ

「まあ妖怪は人間から見たらいいやつじゃないかもしれないけどぬ
らりひょんは昔はすごかったらしいよ」

「えー！？妖怪って本当はいないんじゃないの？」

いや、目の前にいるんだけどね。

その日の夕方。

学校の件で落ち込んでいるリクオに首なしが話しかける

「どーしたんですか、リクオ様。元気がないですよ」

「うん。ちょっとね」

「うん。首なし、今はほつといてやってよ。」

「え、はい。ですが今日は親分集の寄り合いがあるんですから元気出してくださいね。総大将も呼んでいますよ」

寄り合いってことは木魚達磨とかガコゼたちが来るんだろう。

俺、木魚達磨は別にいいんだけどさ、ガコゼは嫌いだなあ
そしてじいちゃんとリクオと部屋に入る

「総大将。今回はどういう用件ですかな？」

「うむ……そろそろ……三代目を決めねばと思ってなあ」

三代目はリクオ以外ないだろ。

「おお……それはよいですなあ。二代目が死んでもう数年……
いつまでも隠居された初代が代理ではおつらいでしょう」

「総大将！悪事ではガコゼ殿の右に出るものはおりませんまい！」

「なんせ今年に起こった子供の神隠しはすべてガコゼ会の所属ですからな！」

でできた、ガコゼ

コイツは確実に三代目を狙ってやがる

「俺は反対だぜ、じいちゃん。あんなの子供をこそこそ殺してるだけじゃん。」

「こらこら、サイキ。まあ、じゃが三代目はワシの孫のリクオをすえようと思っておる」

そうだ。奴良組はリクオが継ぐ……

「い、いやだ！！こんなやつらと一緒にいたら皆にもっと嫌われちゃうよ！」

そういつてリクオが庭に飛び出した。

「おい！リクオ！」

「カカカ。若にも困ったものですなあ。総大将……我々にとって・・・つらい御時世。今一度・・・代紋に立てた誓いを確認すべきではあるまいか」

「リクオが継がないなら俺がつごつかなあ」

「ほお、ですがサイキ殿は氷虎殿と不知火炎殿の血をひいてながらいまだ人間の姿のままですぞ」

ぬ・・・確かにそれは事実だから反論できない。
でもこんあガコゼには奴良組は渡せない。

父さんと母さんが言ってた奴良組はもつとすごいものだったんだ。

次の日の帰り

俺はリクオより先にバスの一番後ろに乗り込んだ。

「それにしても遅いなあ」

普通ならそろそろ乗り込んでくるはずなんだが。
これに乗らないと次のバスは30分後だったのに。

「あつ、サイキ」

とカナが俺の隣にやってくる。
バスはしばらくして走り出した。

「リクオはどうしたんだ？」

「昨日のことでまだ拗ねてるみたい。ねえ、リクオ君とは双子で同じ境遇なのにサイキはなんとも思ってたないの？」

「いや、俺はちょっと違うからなあ」

「違っつて双子なの？・・・キヤアアア！！！」

ドゴオオオオオオ！！！！

突然バスに物凄い衝撃が走る。

トンネルが崩れバスは横転。

俺たちは閉じ込められたようだ。

「大丈夫か、カナ？」

「うん、私は大丈夫だよ・・・キャツ！」

カナが悲鳴を上げた方向を見る。

そこには・・・

「妖怪！・・・しかも、お前は！！！」

そこには多数の妖怪をつれたガコゼがいた。

「カカカ、まだ生きてらしたんですか。まあ、いいでしょう。若も
ろとも皆殺しだ。」

そういつた瞬間一体の妖怪が俺のほうに瓦礫の岩を投げつけてきた。
こいつらマジで俺を殺る気だ。

「ガコゼ！！！」

岩は俺のすぐ前に落ち砂煙が舞う。

「他の子供たちも皆殺しだ！！！」

は？他の子供だと・・・・・・・・ん？何だ、この血があつくなるようなかんじは・・・・これは

「俺の友に手出すんじゃない！？」

いつもと違うこの感じ。

どんどん力がわいてくる。

砂煙から抜け出し左手に冷気の塊をつくりカナに襲い掛かるうとしている妖怪に投げつける。

冷気を食らった妖怪たちは一瞬にして凍りついた。

「な、何だと！？やれ、やれい！」

さらにこちらに向け妖怪が押し寄せてきた。

「炎投！」

次は右手に炎の塊を作りやつらに投げつける。
当たった妖怪はすべて燃え尽きた。
残るはガコゼだけとなった。

「こんなところで何している、ガコゼ」

「誰だ、お前は！？」

瓦礫を避け入ってきたのは長い髪を持ち百鬼を従える男、いやまだ少年のような背丈だ。

「遅かったじゃねえか、リクオ」

姿は変わっているがあいつは正真正銘リクオだ。

「お前は……もしかしてサイキか？」

見た目でわかりにくいってことは俺も姿が変わってるんだなあ。
髪を少し引っ張って見ると赤色になっていた。

「若だというのか……しかし……こいつらを殺すぞ！！若の友人を殺されたくなければ……」

しまった。

すこし目を放した隙に！

「ヒイイイイイイイ」

リクオがドスでガコゼの顔面を切り裂く

「ガコゼ、お前なんかには奴良組は継がせねえ。俺が三代目をついでやらあ！！人にあだなすようなやつは俺が絶対にゆるさねえ」

そうだ。そうだぜ、リクオ

「世の妖怪どもに告げる！俺が魑魅魍魎の主となる！！すべての妖怪は俺の後ろで百鬼夜行の群れとなれ！！！！」

空には朝日が昇り始めている。

ガコゼを真っ二つに斬り捨てる。

が、しかしその直後リクオは倒れて人間に姿が戻ってしまった。

「大丈夫ですか、若!？」

雪女や青田坊など、みんなが駆けつける。

「ねえ、もしかして妖怪の血を4分の1しか引いてないから一日の4分の1だけ。夜しか妖怪になれなかったりして・・・」

「「「「「「「「えー!!!!!」」」」」」」」

それから数年後

俺とリクオは中学校に進学した。

俺もリクオもあの時以来妖怪になっていない。
多分あの時は感情が高ぶっていたからだ。

「サイキ、学校いこー」

「おう。いつてきマース」

設定（前書き）

設定ですね

設定

奴良 サイキ

妖怪 氷虎ひょうこと不知火炎しらぬいえんの子供

両親の能力の炎と氷をどちらとも受け継いでいる。

両親は共に江戸時代からぬらりひよんの百鬼に加わっており、なかでも父の氷虎はほぼ対等の関係だった。

氷虎と不知火炎は400年という大恋愛の末結ばれサイキを生んだがリクオの父と共に羽衣狐に殺される。

幼く残されたサイキはぬらりひよんの配慮によって養子として迎えられリクオと共に育つ（同年）

表ではリクオの双子の弟として扱われている。

親が両方妖怪だがまったく違う種族からか理由は不明だが通常は人間の姿である。

ガコゼの事件のときに初めて妖怪になる。

身長162？ 体重51キロ

髪の色は通常は黒色で短髪

妖怪になると髪が赤くなり目の色は青色になる
服がリクオのような着物になる

畏

主に炎で燃やしたり凍らせたりできる

鬼發はっ

炎投・・・炎の塊を投げる

氷投・・・冷気の塊を投げる。あたれば凍る

設定（後書き）

おかしな点や疑問があったら感想のところでおっしゃってください

夜の学校で再び目覚める（前書き）

2話更新です。

よろしく願います

夜の学校で再び目覚める

「もう絶対に学校で妖怪の話なんてしない！立派な・・・人間になるんだ」

と、リクオが中学校に登校しながら言う。

「そんなこというなよ・・・お前は三代目になるんだから」

「僕は立派な人間になるんだよ。3代目ならサイキが継げばいいじゃん」

まったく。

リクオはぬらりひよんの孫なんだから・・・

「ねえ、三代目ってなんのこと？」

「えっ！？い、いや。なんでもないぞ。な、リクオ？」

「あ、うん。そうだよ。なんでもないよ！..」

いきなりカナが後ろから話しかけてたからびびったぜ。

教室に行くとなにやら騒がしかった。

クラスメートに話を聞くと清継が妖怪が実在すると言っているらしい。

俺も話にくわわろつと。

「ねえ、清継。昔、妖怪は実在しないって言ってなかったっけ？」

「そう。昔はそういつていたがボクは出会ってしまったんだ。」

「だ、誰に？」

リクオが聞く

「闇の世界の住民にして、若き支配者。そして共に戦う赤髪の妖怪」

（「ね、ねえサイキ。清継君が言ってるのって……」）

（「うん。俺たちのことだろうな」）

「ほれたんだよ！！彼の悪の魅力に取り付かれたのさ！！もう一度会いたい……だから彼につながりそうな場所を探しているのさ！！」

さて……目の前にいるんだが

俺たちがまた妖怪化しないと一生お目にかかれないぞ。

「そこでだ！！今夜、うわさの旧校舎に行きたいと思っている」

「旧校舎？」

「知らないのか、リクオ？東央自動車道をはさんだ向こう側にあつてよ、黒が言うにはザコ妖怪や若い妖怪が住み着いてるらしいぜ」

黒というのは奴良組本家の黒田坊のことだ。

というわけで来てしまった。

まあ、本当に妖怪がいて、清継たちが襲われたらやばいしね
しかも俺とリクオはなぜか名誉隊員にされてるし・・・

「よし、そろつたね。メンバーは7人が・・・」

メンバーは7人。

清継に俺とリクオ。島に・・・カナ!?

あれ? 怖いのが苦手じゃなかったっけ?

それと・・・後の二人は・・・

「及川氷麗です! こーいうの超すきのな」

「俺も好きなんだ! 倉田だ!」

見たことないよなあ・・・うん・・・
ん!?

「ちょ、二人来て!!」

氷麗と倉田という名の二人を脇に連れ込む。

「雪女と青田坊。何でここに!？」

二人は本当は妖怪で今は人間に化けているのだろう。
雪女と青田坊は奴良組本家で俺とリクオの側近だ。

「もちろん御供です、サイキ様。」

「そうですよ。四年前からずっと学校も通ってたんですよ。」

マジか……気付かんかった。

「と、とにかく。妖怪だつてことはばれないようにしてよ。」

「わかってますってば、サイキ様♪」

そして旧校舎に侵入
各部屋を回ることに

カナはやはり怖いようでリクオの後ろにつきっぱなしである。

「とにかく、こと細かく調査だ。ここに妖怪がいるならばあのお二
方につながるかもしれない」

だから、ここにいろつて。

最初に入ったのはどうやら美術室だったところらしい。

リクオの横を歩いて隅っこのほうまで歩いていくと……

いた……いや無視しよう。

リクオもカナに見せないようにしてそのまま戻る。

「あ、今私のこと……」

近づいてこようとしてきたのでドアを勢いよく閉めときました。

あれが黒の言ってたザコ妖怪だな……

「む、ここは給湯室か……」

「うわー水まわりだし、危なそー」

と、島があげようとしたとき

「だ、ダメエー！ー！！」

リクオが勢いよく戸を閉めた。
今のはナイス判断だ。

「な、なあ雪女。今確実にいたよな」

「はい。人間の血肉に餓えたやつらがいましたよ……って、それよりここで雪女なんて言ったらだめです。氷麗ってよんでください」

「及川……じゃ、だめなの？」

「……つ、氷麗がいいです……」

「別にどっちでもいいと思うが……じゃあ氷麗で……」

「はい、サイキ様」

「そこは、まだ『様』なんだ……」

「はい、もちろんです!」

なんか慣れるまで大変そう

「青も倉田って呼べばいいの?」

「はい!お友達の前では倉田でお願いします」

うう……やはり面倒だなあ……

「「「あああああああああああああ!……!……!……!」」」
」

いきなりの奇声

それに続き

「ぎゃああ!!でたあ!!」

ついに妖怪に見つかってしまったようだ。

しかも……リクオたちが……おそ……われ……て……

「「若!」」

雪女と青がリクオを守るために飛び出そうとする

「待て、雪女。青田坊」

久しぶりのこの感覚。

体中を血がかけまわるこのかんじ
すばやくリクオのすぐそばまで翔る！

「炎鞭^{えんべん}！！」

右手から炎を流し長く鞭^{むち}のような形にして妖怪めがけて振るう！
鞭は妖怪を切り裂き、切れた口からは炎が噴出した。
そして体が燃え尽きると自然と炎も消えていった。

「大丈夫か？」

「え・・・えっと、サイキ？」

俺が妖怪になってるのを見て驚いているようだ。

まあ仕方ない。

リクオはあのときの記憶がないんだから。

でも、俺はあるよ。

だから、あれからまた妖怪化できないのがすっげえ悔しいんだよ。

「サイキ様ー、妖怪化できるなら最初から言ってくださいよ。」

「いや、さっき突然できるようになったんだ。だから、また戻って
次、なれるかわかんないよ」

雪女と青がこちらに駆けつけてくる。
もちろん今は妖怪の姿だ。

「え！？何！？？どういうこと！？？だって君ら・・・学生で・・・」
「護衛ですよ。」

「四年前のあの日からお供してたんです！」

「き、聞いてないぞあゝ！？サイキはしってたの？」

今、人間に戻る。

やっぱり、いちいち戻るしだいぶ目線も変わるなあ

「えーっと、俺もさっき知った。まあ、とにかくお前は妖怪の主になるんだからもっとしっかりしろ」

「ボクは3代目なんかにならないよ！！ボクは平和に暮らしたいんだあゝ」

はあゝどうなるんだろう、これから……

「ねえ、まだ目あけちゃだめ？怖い？」

あ、そいえばカナがいたんだ。

まあこの様子だと話は聞かれなかったな
よしよし。

夜の学校で再び目覚める（後書き）

炎鞭^{えんべん}・・・炎を体から流し鞭のように振るう
使った技です。

とりあえずサイキが妖怪になったときはリクオの夜の姿と同じぐらいの身長です。

サイキのほうがちょっと大きめで

特訓す

「ただいまー・・・いつてきまーす」

最近は・・・まああんまり旧校舎に行った日から経ってないけど、学校から帰ってきて着替えるとすぐに出かける。

どこにかつて言うとき少し山のほうなんだが人目につかず少し広い空き地があるのだ。

俺はそこで特訓をしている。

「サイキ様ー、待ってください」

と雪女が追ってくる。

旧校舎にいつて妖怪になって以来いつでもまた妖怪になることができるようになったのだ。

だから、はやく力をつけたいので毎日特訓しているのだ。

雪女がついてきているのは側近であるからと同じ能力が使えるからである。

「こうかな？」

旧校舎でやった炎の鞭、『炎鞭』を出してみる。

こないだは急なことだったしほとんど無意識にやったしな。

体から右手へ炎を集中させ垂れ流す。

それを鞭のように細長くまとめる。

「わあ、すごいですね。」

高さが30メートルも超える木だった。全体が一気に凍った。

「よし、じゃあ次は炎のほうで……炎投」

氷投と同じ要領で右手に炎を集中させ、ボールのようにした。

「氷麗、いくぞ！」

と氷麗めがけて炎投を投げようとする。

「キヤアアアアアーーーーー」

だから怖がりすぎだつて。
やろうとしたふりだよ。

そして、しばらくしてから休憩をする。

「はい、サイキ様。お茶ですよ」

「おう、ありがとう氷麗。かなり冷えてて美味しいな」

うん。冷えすぎだよ。

まあお茶だからいいけど。

「氷麗って可愛いんだね」

「ありがとうございます……つて、ええええええ！！そんな、サイキ様……可愛いだなんて……／／／／／」

「なんか、島が言つてたぞ。それに今年の一年生の可愛い娘の五本指に入ってるらしいぞ」

「ムフフ……可愛いだなんて……フフフ……サイキ様つたら……」

「おい、氷麗」

だめだな。
違う世界にいつてるよ。

氷麗が戻ってきてから話を再開する。

「なあ、さつき家に誰か来てなかったか？」

「はい。ゼン様に来ていましたよ。」

たぶんじいちゃんがよんだんだろうな。

リクオがいつまでたっても3代目になろうとしないから説得とかを頼んだんだろう。

「そうだ。今からゼンの屋敷に行こう。夕飯でもご馳走になろうぜ。」

「え、今からですか!？」

「そうだ。いくぞ、氷麗！」

と、ここまで乗ってきたおぼろ車に乗り込む。

そろそろつくころだな。

「サイキ様！あれは！」

前方を見るとゼンの屋敷が燃えている。
くそ、何があっただよ。

「氷麗、消化だ。凍らせるぞ」

おぼろ車から飛び降り、技を繰り出す。

「呪いの吹雪・雪化粧」

氷麗は燃えている建物を凍らせ破壊する。
どうせ燃えてんだから壊してもいいだろう。

「じゃあ俺も新技といこうか」

炎鞭の逆バージョン。

冷気の鞭を作り対象を凍らせ、きざむ。

「氷鞭」
ひょうべん

こちらも燃えている建物を凍らせる。
凍ったあとには切りきざまれ建物は崩壊していった。

・
・
・
・

「だいぶ、収まったな。ゼンを探そう」

「はい」

燃えている建物をほとんど凍り、壊してからゼンを探し始める。
すると・・・・・・

「ゼン！・・・・それにリクオ！」

ゼンとリクオを発見
現在、盃を交わしているようだ。

「おう、サイキ。この姿で会うのは久しぶりだなあ」

「そうだな、我が大将。それより、ゼン。何があつたんだ？」

ゼンに話を聞くと家臣の蛇太夫が裏切り、襲われそうになったところ

ろを謝りにきたというリクオに助けられたという

らしい。

「おいしいですねえ」

いきなり後ろから声が聞こえた

「うお！カラス天狗いたのか」

「はい。朝になると元の人間の姿に戻ってしまう。最高幹部に見せれば認められるものを」

この話を聞いていたかのようにリクオが口を開く

「俺は三代目を継ぐぜ。あと何人。最高幹部に認められればいいんだ？」

本当だよな

俺みたいに記憶が残ってくればいいんだけど・・・

陰陽師と対峙す

「おはよーございます、若あー!!」

朝からうるさい

まあそれかもしれない。

4年ぶりにリクオが妖怪の姿になったのだ。

「これは……」

朝から大広間には豪華な料理が並んでいる

「良かったじゃないか、リクオ。皆から祝ってもらえて」

「良くないよあー！ボクは昨日の記憶なんてないんだからー！」

と逃げながら学校に向かうリクオであった。

リクオの愚痴を聞きながら登校

なんか最近はなれてきたなあ

カラス天狗がいつも、3代目、3代目ってうるさいとかいろいろ

「カナちゃん！おはよう」

「おはよ」

「リクオ君、サイキ君。おはよう」

なんかリクオいきなり明るくなったなあ。

こいつカナのことすきなのか？

「……いや、リクオは恋愛ことには疎いからそれはないかな

廊下を歩いていると清継に絡まれる。

そっぴや旧校舎に行つたとき以来だなあ。

「君たち、見たよね！見たよね！！」

「な、何が？」

リクオが恐る恐る聞く。

「だ・か・ら！……確かにいたんだよ……あの旧校舎に……妖怪が！！」

それか……ってか気絶してなかったっけ？

「いや、気のせいじゃない、清継？」

とり合えず誤魔化しておこう

「不良と見間違えたんじゃないかしら？たむろしてた不良が驚かしてきてたじゃない！？」

「そ、そうだったかなあ……」

ナイスだ、氷麗！

「やあ、氷麗。おはよう。それにしても記憶が無いってことは気絶でもしてたんじゃない？まったく情けないなあ」

ほんとに気絶してたし

「そ、そんなわけないじゃないか！！気絶なんてしてない！！覚えてるよ！！不良ね、不良！！」

「そーよ！そう簡単に学校に妖怪なんて出ないわよ」
なんども言うが俺たちが妖怪なんだけどね…

無理矢理納得させられた清継は自分の教室へと走っていった。

「あ、サイキ様！若！母様のお手製弁当です。」

氷麗が俺とリクオに弁当を渡すと同時にリクオが俺たちを隅の壁の陰に連れていった。

「なにするんですか？」

「なんで学校にきてんだよ！？ボクは学校では平和に暮らしたいんだよ！！」

「普通にしたらばれないんだからいいじゃないか、リクオ。」

「むうゝ。じゃあせめて『若』はやめてゝ！！」

「京都から来ました。花開院ゆらと言います。どうぞよしなに」

独特の発音のしゃべり方で自己紹介してきたのは清継たちのクラスに來た転校生らしい。

……花開院ってなんか聞いたことあるような………現在はその花

開院とリクオ、カナ、氷麗、島とともに清継の家の資料室に来ている。

なぜかというと俺たちに『呪いの人形と日記』を見せて妖怪は実在するという自論を証明すると言ったからだ。

「うわゝ。なんか凄そうなものがたくさんあるなあ…雪女、うちの物にとりついたりする妖怪とかいたっけ？」

あれ？リクオには氷麗じゃないんだ。

「さあ…人形にとりついたりするものはいなかったと思いますけど、付喪神かもしれませんよ…いわゆる現代的な」

「この日本人形なんだけどね…一緒に持ち主の日記もついているから信憑性は高いと思うよ。」

「へえゝ日記ね」

「読んでみよう。2月22日…引越しまであと7日。昨日、これを機に祖母からもらった日本人形を捨てることにした。と言っても機会をうかがっていたが本当は怖くてなかなか捨てられなかっただけ…雨が降っていたが思いきって捨てた…」

と、ここで人形のほうを見てみる。

たら…

人形の目から血のような黒いものが…

一緒に振り向いていたリクオがいきなり人形に飛び込んでそれを拭いた。

「やっぱりこれ、本物だったりなあ」

そしてまた清継が喋りだす

「くく考えてみれば昔から見れば変だったこの人形…気づけば髪が伸びているような…」

もしかして…と思い人形を見てみると…

「あ…サイキ様…」

「確かに…ヤバイかも」

髪が不自然なまでに伸びていた。

「凍らせてしまいます!!」

「い、いや！俺が燃やす!!」

「だ、ダメだよ！みんなの前で!!」

確かにヤバイ

俺も氷麗も姿が変わるし俺なんか髪は赤色、目は青色に代わり身長も大幅にのびるからなあ

「2月28日引越し前日。おかしい…しまっておいた箱が開いている…」

「日記を読むのやめて…!!」

人形が動き出した！
やっぱり俺が…

なにかの紙が人形に飛ぶ！
そして紙が人形につくと一瞬で破裂した！！

「浮世絵町… やっぱりおった」

花開院が喋りだす。

今の技… もしかして花開院って……………

「陰陽師の名において。妖怪よ。あなたをこの世から滅死します！」

陰陽師…………… 最悪だあ…

陰陽師と対峙す（後書き）

感想とかも待ってまーす

初の出入り 鼠を食す

「若ー！！どうするんですかー！？なんであんな約束をしちゃったんですか！？」

「だって…頼まれたら断るわけにはいかないだろ。人として。逆に怪しまれるかもしれないし」

「私消されちゃいますよ！！封印されちゃいますよ！！」

清継の家からの帰り道。つららがここまで騒いでいる理由はこうである。

一時間前

清継家にて

「お、陰陽師だって！？花開院さんが！？」

「わぁ！これも妖怪」

「本当はだったんだ！！陰陽師ということはやっぱり妖怪はいたんだ！！」

本当の妖怪に驚くカナや島だったり清継はかなり興奮していた。俺とつららも…

「よし、リクオ。逃げるぞ」

「そ、そうですよ、わか……………一刻も早く…………」

陰陽師って俺たち妖怪の天敵だって聞いたぜ

「私は京都で妖怪退治をなりわいにする陰陽師。花開院家の末裔。」

「そういえば花開院ってＴＶで聞いたことがあるような……」

「それは祖父の花開院秀元ですね。」

確かに聞いたことあるな

「この浮世絵町はたびたび怪異におそわれると有名な町。噂では妖怪の主が住む街とすら言われているんです」

はい。その通りです。

「私は……一族に試験として遣わされたんです。より多くの妖怪を封じ……そして……陰陽道の頂点に立つ花開院家の当主を継ぐんです！」

マジでヤバイぞ

この堂々とした立ち振舞いきつとかなりの使い手だぞ俺はまだ修行の身。

消されるかも……

「ゆらくん！ぜひぜひ僕の清十字怪奇探偵団に参加してくれ！！僕もある妖怪を探しているんだ」

「ある妖怪？」

「そう！２人いるんだが、そのお二方は……月夜を駆け巡る闇の支配者と燃えるような髪を持ち眼光が青色の妖怪」

「それはもしかして百鬼夜行を率いるものとその下僕……」

「一緒に探そう！妖怪の主を見つけ出そうじゃないかー！」
これはヤバイ

「清十字怪奇探偵団、ここに始動だー！！ということで日曜日に……
そうだな……奴良君たちの家は広くて趣がある………ということで
君たちの家に集合だ」

「「エ、エエエー」」

ということである

「大丈夫だよ……多分……花開院さんに会えばみんなおとなしくなるだ
ろうし！！この先も！！」

よし！決めた。

「リクオ、俺は日曜日は特訓に行くぞ」

「え、そんな！ボク1人に面倒を押し付けるつもり！？」

「俺だって妖怪なんだ。まだ力もついてないから心配なんだよお……」

……あ、つららもつれてってやるよ」

「ほ、本当ですか！？この雪女、サイキ様に全力でついていきます

「!!」

ゴゴゴオオオオ

向こうからバイクの集団がやってくる。

暴走族らしい……旗に血畏夢百鬼夜行と書いてある
そして総長と呼ばれる大男が近づいてきた。

「あ、若、サイキ様。おつとめごころーさんです。人間に頼まれて
少し出入りしてきました。」

「もうなにやってんだよーまったく。早く帰るよー!」

俺も腹減ったしなあ

「おや、どうやら本家の方から聞こえてきますなあ」

まさか……

予感的の中

家から酔ったカラス天狗が飛んでくる

「若!おかえりなさいませ!皆の者!若がお帰りになったぞ。酒を
もつと用意しろー!」

ヤバイ

リクオがキレるぞ

「……………日曜日は学校の友達が来るんだー!!」

よし！俺も妖怪化して参加しよう

日曜日

平日より少し遅く起きて朝食済ませ、特訓に行く準備をする。

「サイキ、どこかに行くの？」

母さんと廊下で出会う

母さんにとっていても本当の、妖怪・不知火炎は死んでるからこの人はリクオの母さんなんだけど養子の俺をリクオと同じように接してくれた。

大切な俺の母さんだ。

「つつらを連れて山に特訓に行ってくるよ」

「今日は学校のお友だちが来るんじゃないかなかった？」

「そうだけど、陰陽師のこも来るから俺はパス。リクオだけで大丈夫だよ」

「あら、そう？でも人間のお友達も大切にしなきゃダメよ」

「わかってるよ。じゃあ行ってきまーす。つらら行くぞー！」

「はい」

というとおぼろ車に乗り例の山に向かった。

いつもの場所につくとすぐに妖怪化する

「よし！じゃあつらら。ちょっと相手してくれよ」

「え、嫌ですよ！私溶けちゃいます！」

「安心しろ。冷たい方だけしか使わないからさ」

「それならいいですよ。……………では行きますよ」

つららが息を吹き氷の長刀を作り構える。

「よし、かかってこい」

なかなか鞭を操るのは大変だな。

「よし、ちょっと休憩にす……。危ない！！」

つららの声と共に後ろに何か気配を感じ回避行動をとる。
振り向くとそこには獣型の妖怪が10体ほどいた。

「こんなやつら見たことないですし、まずサイキ様に攻撃したからには敵ですね!」

つららが構える。

「待ってくれ、つらら。こいつらは俺がやる」

「だめです。おそらくやつらはサイキ様を狙っています。だから、私が!」

「つらら、心配すんな。こんな弱そうなやつに負けない……」

言葉を言い終える前に敵妖怪へと攻撃を仕掛ける。

「新技だ!氷炎演舞!!」

妖怪たちのちょうど真ん中にもぐりこみ氷鞭と炎鞭舞うように振る。沢山の敵に対し有効な技だ。

「すごい……」

10体もいた妖怪が全滅する。

「サイキ様、お強くなりましたね」

「いや、まだまだ全然だよ。妖怪になれるようになってまだほんと少ししかたってないからなあ……それより、今のやつらは例の旧校舎にいたようなやつらか?」

「その可能性は低いと思います。あの妖怪たちは確実にサイキ様を

狙っていました。おそらく養子のごことはこつちでもあまり知られていないのでただ単にぬらりひよんの孫を狙ってきたのでしょう」

「そっかあ。まあまた今度来ても返り討ちにしてやるけどな。とりあえず休憩にすつか。あ、そうだ。父さんと母さんの話聞かせてよ、つらら」

「はい、いいですよ。っとその前にお弁当です。作ってきました。」

「ありがとう……ってやっぱり凍ってるよ。加熱っと」

つららの弁当は案の定凍っていた。
ので、俺の能力を使い解凍する。

「……うん。おいしい……じゃあ話し聞かせて」

「はい。ええとですね……まずは氷虎様。まず出入りのときの戦いがすごかったです。強さでは百鬼夜行の中でも群を抜いていましたよ。リクオ様のお父様の鯉伴様もその力を認めてまして私も同じ氷雪系の妖怪としてあこがれていました。」

「へえ」

「不知火炎様もとてもおつよいお方でした。……あ、でも不知火炎様は炎の妖怪。私の母は雪の妖怪だったので何かしらでよく喧嘩していたそうですよ。」

「そうなんだ。でも、父さんは氷の妖怪で母さんは炎の妖怪なのによく夫婦になれたよなあ」

とくに父さんきついだろ

「俺とつららだったら、俺が炎の分を抑えれば問題ないな」

「え、サイキ様！な、な、何を言ってらっしゃるのですか!？」

ははは、「冗談なのに驚きすぎだよ、つららは

「冗談だつて。あんまり気にするなつらら」

「・・・ご冗談ですか・・・はぁ・・・それはそれで・・・ちよつと・・・」

それからまたもくもくと弁当を食べる。

・・・そうだなぁ・・・うん・・・・・・・・・・よし、決めた。

「つらら!」

「どうしました、サイキ様？」

「俺は決めたぞ」

「何をですか？」

決めた。

俺は奴良家を・・・

「俺は妖怪として成人したらリクオと7分3分の杯を交わす。」

「え、ご兄弟なら5分でよろしいのでは？」

「いや7分3分でいい。俺はそのときから奴良の名前を捨てる」

「え、サイキ様！今、なんて！？」

「だから、俺が成人したら養子を破棄して、まあ人間としての生活もあるから妖怪のときだけでも奴良の名前を捨てるんだ。」

「……では妖怪のときは……」

「妖怪のときの名前は……尊敬する父さんと母さんから名をもらい、『氷炎』と名乗る！」

「氷炎……」

「ああ、そのときはつらら。ともにリクオについていこうぜ！」

「はい、サイキ様！」

俺はもうとつくの昔にリクオについていくって決めたんだ。

そのあともちよろちよろ休憩挟みながら夜まで特訓してから家に戻った。

「よし、ついたな。それより、今日の夕飯はつららじゃないのか？」

「……ああー！！忘れてた。サイキ様、先きますねえー」

俺は庭で少し涼んでくかな。

「サイキ様ー！大変でーす」

さつき行っただと思ったつららが戻ってくる。

「はあ、はあ・・・若が」

肩で息をしながらつららが伝えてくれた。

旧鼠組ってやつらにカナと花開院さらわれたらしい。

それでリクオが鼠に言われて『自分は三代目を継がない』という宣言書を組み中に回そうとしたのだ。

それを今じいちゃんが破り捨てたらしい。

「そっか、じゃあ俺はリクオのところ行ってくるわ」

ちょうど庭にリクオ発見

「おい、リクオ・・・」

「若！三代目を見捨てるってことは・・・下僕を見捨てるってことですぞ！！」

「う、うるさい！！」

リクオに歩み寄る。

「サイキ様！若に何とか言っちゃってください！！」

カラス天狗は無視して

妖怪化してからリクオに話し出す

「リクオ、どうするかはお前しだいだ・・・だが、俺はもう決めたぜ・・・・・・・・ついていく。お前の百鬼夜行について行く。」

するとリクオの姿が変わる

「フン、そうだな。俺の後ろについて来い・・・・・・・・夜明けまで鼠狩りだ」

一番街

現在、旧鼠組が牛耳っている街だ。
そのど真ん中に牢屋発見。
さあて鼠狩りの始まりだ！

「へへへ、久しぶりの出入りじゃー」

「アバレルゾー」

リクオが戦闘に百鬼夜行が夜の街を進む。

「・・・またせたな、ねずみども」

「何者だーテメー！」

「本家のやつらだ・・・・・・・・」

「三代目はどーした！」

「3代目はここだよー。この俺の隣にいるのー」

「は、何言ってんだ。てめえーってあれえー!?」

俺たちが話している隙に青田坊が檻を壊し首なしが二人を救出した。

「どうする、夜の帝王。人質が逃げちまったぜ。」

「なめやがって、てめえら皆殺しだあー!!」

旧鼠の声で両軍がぶつかる

「つらら、あれ行くぞ」

「はい、あれですね。」

「「暴風雪 氷鞭の舞」」

さつき練習してた俺とつららの合体技

つららの吹雪に俺が氷鞭で舞い効果範囲、威力共に倍增される技
これでかなり倒せただろう。

俺たち以外にも皆がんばってるなあ

ええっと、リクオはどこ行ったかな・・・

「あんどき殺しときゃよかったじゃねーか!!」

いきなり大声が聞こえ、巨大な鼠が出現

だけど、あいつの相手じゃないよな

「奥義 明鏡止水 桜」

巨大な鼠が燃える。

これは酒を利用した奴良家秘伝の技。盃に波紋が広がる間敵を焼き尽くす。

「夜明けとともに塵となれ」

これですべて片付いた。

「サイキ様、お疲れ様でした」

「おう。だが、初の出入りにしちゃあ、あっけないくらいだったな」

まあ、これから何度もあるんだ。

次に期待しよ

初の出入り 鼠を食す（後書き）

感想とかも待ってます

掬眼山へ行く（前書き）

まあいつも通り短いですね

擦眼山へ行く

「うらやましい〜!」

旧鼠事件の翌日の放課後

カナと花開院の話を聞いて清継が羨ましがっている

「羨ましくないよ…… スツゴク怖かったんだから!」

まあそれが一般人の反応だな。

「しかし、君らがピンチだからこそ彼等は現れた!それでこそボクの憧れるあのお二方だ!こーなったら早急に何か考えなければ…

……とりあえずボクも妖怪に捕まりたい」

なんか嫌な予感が…

なんか喉乾いたなあ

「つらら、なんか飲み物持つてる?」

「あ、はい。水ですがどうぞ」

つららからミネラルウォーターを受けとる。

「あれ?2人つていつの間にそんな仲良くなったの?」

ヤバイ!

俺とつららはこの前の旧校舎のときに初めて会ったことになってるんだ

「えーつとだな……」私たち付き合っているんです。」

……………へ!?

「昔、旅行先で知り合ってた久しぶりの、再開だったのですぐにはわからなかったんです」

ここはつららにあわせるしかないか…

「そうなんだよ。それからまた仲良くなって、俺がつららに告白をしたんだ」

やっぱり嘘だけど恥ずかしい

「やるじゃん、サイキ」

と巻

「美男美女カップルだね」

と鳥居

だが、つらはわかるが俺はその美男にはいらなくないか？

「そつえば奴良君はどないしたの？」

花開院たちはクラスが違うから知らないのか

「リクオなら熱出して休みだぞ」

「え！」

あれ？

つらら、知らなかったんだ

「早く帰りましょう！サイキさ…君」

明らかに動揺してるな

リクオが学校来ていないのに気づかずに自分はいつも通り登校してたからなあ

「うん、帰るか。」

学校から出てしばらく歩いたところ
人氣がなくなつたところで

「サイキ様、すいませんでした！！」

ものすごい勢いで謝ってきた

「ど、どうしたんだよ？」

「先ほどは私なんかサイキ様とお付き合いをしてるなど言っ
てしまつて…」

その事が

「別にその事ならいいよ。むしろつらなら全然OKだって」

「えっ！そんな…サイキ様つたら／＼／」

「だってさ、毛倡妓とかよりは全然いいでしょ。普通に同年代に見えるし」

「あ…そういうことですか…」

あれ？落ち込んでる

でもまあつらは人間の俺からしてみても可愛いと思うしな

とりあえず帰宅。

着替えてからリクオが寝ている部屋に向かう。

「ただいま！大丈夫か、リクオ…って氷でかつー！」

寝ているリクオの頭の上にとてつもなく大きい氷がのせられていた。

「雪女がのせてったんだよ」

やっぱりか…

「若、お待たせしました」

つららがお茶を持ってきた

「ありがとう。そういえばサイキはともかく雪女はいつまでその姿でいるの？」

俺とつらは現在人間の姿だ。俺は今まで人間の姿でいたのが長かったせいか、いつもはこっちの姿のほうがなんだか落ち着くので特訓するときなど特別なことを除いては人間でいる。つらは俺とリクオの護衛で学校に行くため人間に化けてるだけなのでいつもは家に帰ったらすぐに本当の姿に戻るのだ。今日はリクオが熱をだして寝ていると俺に聞いて急いでたので忘れていたのだろう。

「あ、そうですね。今、戻りますね」

「ちょっと待つて、つらら。」

今、妖怪に戻るのはマズイ

「どうしたんですか？サイキさま」

いや、そろそろ………

「やっほ」

「お見舞いに来てやったぞ。ありがたく思え！！マイファミリー」

ほらな。

「やっぱりつけてたのか、お前ら」

「つけてたとは人聞きの悪いな。お見舞いに来たと言っただろう？」

「私たちはこのカップルのほうが気になってたけどね」

やっぱりか

「え？カップルってだれのこと？」

「あれ、兄弟なのに知らないんだ。サイキとつららちゃんのことだよ」

ヤバイ

リクオに説明しないと。

「嘘！？そうだったの？」

回りのみんなに聞こえないようにリクオに学校であったことを話す。

「というわけで嘘だからな」

「う、うん。わかったよ」

なんとか誤解が解けたみたいでよかったよ。

「よし！看病はさておきGWの予定を発表するぞ！以前からコンタクトをとっていた妖怪博士に会いに行く！」

「えー！それって合宿ってこと！？」

最悪だ。

悪い予感的中だし

GWは毎日特訓しようと思ってたのに…

「そう、合宿！場所はボクの別荘もある掬眼山！！今も妖怪伝説が数多く残る彼のちで……妖怪修行だ！！」

ちよつと待てよ。

掬眼山つてたしか牛鬼がいるところだよな……………まああいつなら問題ないか

牛鬼組と対峙す 前（前書き）

遅くなりました。

ですがこれが本当の自分のスピードです。
すみません

牛鬼組と対峙す 前

「やっとなついた〜!!」

電車にバスと乗り継いで滋賀県の掾眼山までやって来た。

「気持ちわる〜吐きそう」

「まったく。なんでおぼろ車じゃ大丈夫なのにバスや電車じゃ乗り物酔いしちゃうの」

深呼吸つと

ここの空気はおいしいなあ

「おぼろ車は妖怪。あんな鉄の塊の乗り物とは違うだろ」

というわけで今回の妖怪合宿。

完全に強制参加だったので仕方なく来たのだが先ほどのとおり乗り物酔いでもう最悪…

本当なら青とか黒とかと特訓したかったんだけど。

つららばかりじゃなくて他のみんなとも手合わせしてみたいし。

「清継くん〜別荘は〜？温泉は〜？」

「そんなの夜だ！！さあいくよ！！」

温泉は俺も結構たのしみだなあ

・

・
・
・
・
歩くこと一時間。

いまだ目的発見でず…

清継の言う妖怪先生の宿題で梅若丸の祠を探さなくてはならないらしい。

だが、まだ見つからない。

「温泉まだ〜清継くん」

「そんなのまだだよまずは梅若丸の祠を見つけないければ……ん？あれは……」

「小さな祠にお地藏様が奉っておりますね」

「『梅若丸』って書いてあるよ」

リクオが石に書いてある文字を読む
みんなで近くに行って確認してみた。

「梅若丸の祠…きつとここだ!!」

「以外と早く見つけたな。さすが清十字怪奇探偵団」

後ろから声がしたので振り向いてみると……

「うわぁ!! 妖怪!？」

なんだ！？人型の妖怪が見たことないぞ！？

「サイキ君失礼だぞ！このかたが作家にして妖怪研究家の化原先生だ……………お会いできて光栄です」

「うんうん」

マジかよ

本気で妖怪に見えた……………

「梅若丸って何ですか？」

花開院が質問する。

「うむ…そいつはこのやまの妖怪伝説の主人公だよ。梅若丸……………千年ほど前にこの山に迷い込んだやんごとなき家の少年の名……………生き別れた母を探しに東へと旅をする途中、この山に住まう妖怪に襲われた」

「ほう…妖怪に……………」

たぶんそれが牛鬼のことなんだろうな。昔父さんに聞いたことがあるような気がする。

「この地にあつた一本杉のまえで命をおとす。だが母を救えぬ無念の心がこの山の靈障にあてられたか…哀しい存在へと姿を変えた。梅若丸は鬼となりこの山に迷い込む者どもを襲うようになった。」

みんな意外と真剣に話を聞く

「その梅若丸の暴走を食い止めるためにこの山にはいくつもの供養碑がある。そのうちの1つがこの『梅若丸の祠』だ。どうかね？素晴らしいだろー？妖怪になっちゃうんだよー」

「よくある妖怪伝説っぽいですね？」

「意外にありがちな昔話じゃなか」

まあやっぱり信じないよなベタな話だし

「あれ？信じてない？んじゃーもう少し見て廻ろうか」

との妖怪……ではなく、化原先生の声でまた森を進む

石で舗装された階段を進んでいく。

途中『ハイルベカラス』の看板があつたが気にしない

「うふふ…サイキ様、リクオ様へ行く前は心配でしたけど旅行って楽しいですねー梅若丸なんて妖怪知ってますー？」

つらは知らないのか

「梅若丸っていうのは牛鬼のことだよ。昔父さんに聞いたことがある。」

「氷虎様に……」

「ということはここは牛鬼の住んでる場所なの？」

「あれ？そのこともしらなかったのか、リクオ。」

「う、うん」

「サイキ様！なんで牛鬼組の島だと知っていて言わなかったんですか！？もし何かの間違いで襲われたりしたらどうするんですか！！」

「牛鬼なら大丈夫だろうなあと思ってさ」

話しているとみんなより遅れてきたので少し早歩きで進む。
そしてしばらくするとさらに霧が深くなってきた。

「すっごい霧深いなあ……全然晴れてたのに……」

霧が深くなるにつれ回りの木も太く大きい木が増えてきている気がする。

「ん？なんだこれ……」

大木の切れ端のようなものに縄を巻いて奉っているようだ……

「それは爪だよ。ここは妖怪の住まう山だ。もげた爪くらいでおどろいちゃー困る」

このおじさん……本当のこと、どこまで知ってるんだ……

「山に迷い込んだ旅人をおそう妖怪……名を牛鬼という」

擦眼山頂上
牛鬼組屋敷

1人の男が屋敷に帰ってきた。

「おかえりなさいませ」

それを青年らしき男が迎えた。

「かわりないか牛頭丸」

「牛鬼様、山に獲物が入りましたよ。」

2人が屋敷の奥に進み部屋に入る。

そこには頭に骸骨を被った少年のような男もいた。

「奴良リクオ、サイキとその学友。おそらく側近もいるでしょう。」

「そうか……………今日、全てを決する」

「牛鬼様…奴良サイキもですか!？」

「そうだ……………」

「わかりました。行くぞ馬頭丸」

牛鬼の考えを理解した牛頭丸は先ほどの少年のような妖怪、馬頭丸を連れて部屋を出て、廊下を歩いていく。

「さあて、狩の始まりだ……」

「ダメだ…通じないわ…どうしよう……」

つららがさつき言ってたことをまだ心配しているようだ。

「大丈夫だって、つらら。牛鬼なら問題ないよ」

「でも、サイキ様！もしものことがあるかもしれせんし」

あの何事も慎重な牛鬼だ
旧鼠事件のあとにそんなことを起こしたら大変なことになる

「いーやだぁー」

「帰りたいよぉー」

また歩き続けているが巻と鳥居が爪らしきものを見てから怖がってこの調子だ。

「2人とも心配ないさ。もうすぐ僕の別荘が……あつた！この山の妖怪研究の最前線！！セキュリティも万全だ！！」

人間のセキュリティじゃ、妖怪には通じないと思うんだが…

「なあ、妖怪にセキュリティは効かないと思うんだけど。」

「そうよ、サイキの言う通りよ」

「使用人がときどき来てるがなにか出たなんて話し1回もないぞ！？」

牛鬼組が人間に無駄に姿を見せることはないだろう

「それにほら！！襲われたとしてもこっちは少女陰陽師、花開院ゆらくんがいるわけだ！！」

はあ

陰陽師と同じ宿に泊まるとはなあ

化原先生が山を下る道を歩き出した。

「あ、先生も一緒に……」

「いや、ワシはもう山を下りるよ。じゃまじやろっ」

「そ、そうですか…？話をもっと聞きたかったのに」

「いやいや……ワシの役目は終わりだよ」

ん・・・なんだ・・・
かすかに妖気を感じるような・・・
って、もう帰るのか妖怪先生

「はっはっはっ！父親の山好きがこうじて建てた別荘だね。この山に妖怪研究に建て替えさせたものだ」

思った通りかなり豪華な別荘だ
女子勢はみんな温泉に向かった。

「では早速『夜の妖怪探索』に行こうじゃないか！！邪魔者はいなくなつたしね！！」

「い、今からですか？」

「バカ！！目的を忘れすぎだぞ、島くん！！我々の目的は妖怪に捕まることだつたじゃないか！！」

え！？

そうだったのか！？

「ちょっと待つてよ！！行かないほうがいいよ！！君たち妖怪を甘く見てるよ！ホントに人を襲う奴らもいるんだよ」

「リクオくん。君に妖怪のなにがわかるんだい？」

清継に何をいつてもきかないだろ

「（リクオ、行かせてもいいじゃないか。）」

「（でも…妖怪が襲ってきたら…）」

「（牛鬼組の島でそんなことないだろうよ。もし間違っただとしても俺たちが着いていけばすぐ退いてくれるだろ）」

「（……うん、僕らもついていこう）」

リクオとの小声での作戦会議？を終わる

「どうしても行くなら僕たちも行くよ」

「だったら私も行きます！」

あれ？つららも来てたのか

「（つらら！？）」

あ、ようやくリクオもつららって呼ぶようになったのか。まあみんなの前で会話すること増えたしね。

「（若とサイキ様を危ない目にあわせられません！！）」

というこで5人で『妖怪探索』に出かける。

森を更に奥へ進む

そっといえはさつき、妖怪先生が帰るときに感じた微かな妖気
あれはなんだったんだ……

たまたま牛鬼組の妖怪が近くを通っただけか……

・
・
・
・
・
・

「あれ？みんな……どこ？」

はぐれたようです。

「見ろ！！あれを！！絶壁の妖怪スポット。『牛隠れの洞窟』！！
かつてこの山で妖怪に襲われた法師が逃げ込んで百日間過ごしたと
いう洞窟……よし、島くんおりよう」

「無理ですよ」

清継とリクオ、島が洞窟のある崖の上に立っている。つらはまわりになにかいないか見張っているようだ。

ガサッ

草むらからなにかが飛び出してくる。

「リクオ様あさぶない！」

それにつららが反応し、リクオを突き飛ばす。
出てきたのはただの狸だった

「……………ん？　そっぴえばサイキくんはどこに？」

「そっぴえばいせんね…」

「リクオ様大丈夫ですか！？　え！？　サイキ様はどこに！？　？」

ヤバイぞ…………

清継たちがどこに向かっているかも知らないし、別荘だって道わらないし……………しょうがない牛鬼の館にいつてみるか。
場所は頂上だって聞いたことあるし。

「サ、サイキ様ー！」

この声…

「青ー！」

俺とリクオの側近の1人
奴良組の特攻隊長（自称）である

「サイキ様探しましたよ。浮世絵町からずっと追ってきたんですよ。それよりリクオ様や雪女はどうしたんですか？ご学友の方々も…」

「それが……はぐれてしまったんだよね。リクオとつららとあとふたりで歩いてたんだけど考え事してたら俺だけいつの間にか……つかんじで」

とりあえず安心だな
2人のほうが心強い

「とりあえずリクオ様たちと合流しましょう」

と言っただけだ青。

「どこにいるかわかんの」

「いえ、勘です」

更に迷うかも…

牛鬼組と対峙す 前（後書き）

次で牛鬼の話は最後ですね

出きるだけ頑張りますが戦闘が来るのでまた遅くなるかもですm（

——）m

牛鬼組と対峙す 後

リクオSide

「何しやがる…お前…この女は奴良組若頭の…僕の下僕だぞ………
わかってやってんならオレはお前を斬る!!」

清継を追って奥に進んだが途中で気絶した。

起こそうと駆け寄ったが今来た道から妖気が押し寄せてきたので戻
ってみると牛鬼のこの妖怪がっららを襲っていやがった。

「ざまあねえな。そんなよわっちい娘に守ってもらわなきゃーなら
ない妖怪の総大将なんてよ……そんなやつ不必要だと思わんか？」

ゆるさない

相手が誰であれオレの下僕にてえ出すんなら たたつきる！

「おい……俺の家族を傷つけるとはいい度胸だな、牛鬼組の牛頭丸
！」

……サイキ

Side out

青…もとい青田坊の勘によって先に進む。

先に言うておくけど今歩いているところは道じゃありませんからね。

「ねえ、この道本当にあってる？」

「……………わかりません。勘ですから」

ヤバイな

腹減ってきたし…

今ごろ力ナたちは温泉に入ってうまいメシでも食ってるんだろうな

あのときリクオにあんなこと提案すんじゃないかったよ。

とにかくくひたすら歩く。

「あ、やっと開けた場所が見えてきましたね」

青が言う。

やっと道らしき道が……

「リクオにつらら……」

つららが…怪我してる……………

そのつららをリクオが支えている。

そして、つららをやったやつは前にいる……………牛頭丸！？

何でだよ……………なんでだ牛鬼。

「サイキ様……あいつは牛鬼組の……」

そつ……だがつららに……

リクオたちの前にとびたす

「おい……俺の家族を傷つけるとはいい度胸だな、牛鬼組の牛頭丸
！」

「奴良サイキ………に側近もう1人か」

「サイキ様……リクオ様と一緒に逃げて……ください」

「黙ってろつらら。僕が、オレがアイツを斬る！」

リクオが言う。つららが必死で俺たちを守ろうとするがそれなりの傷を負っている。

「ここは俺に任せろ、リクオ。」

「ふざけんなッ！オレの下僕にてえ出したんだ。オレが片付ける！
！」

「ダメだ！リクオは牛鬼のところに行け。すべての黒幕はこいつの親玉の牛鬼だ。ケリつけるなら3代目としてすべてを片付けろ！！」

妖怪化しながらリクオにいい放つ。

日が落ちてきた…

それにつれリクオの姿も髪が伸び、夜のものに変わっていく。

「ちッ、わあったよ。だがお前も2人を連れて早く来いよ。サイキ、お前はオレの後ろを歩く奴だからな」

そう言つてリクオは歩き出す。

だが、牛頭丸がそれを許す訳がない。

「おおっと、行かせるかよ」

牛頭丸がリクオの前に立ちふさがるがその間に俺が入り、威圧する。後ろにいてリクオから受け取ったつららを抱えている青も牛頭丸を睨み付ける。

牛頭丸も手を出そうにも出来ない状況だ。

リクオの姿が見えなくなったところで牛頭丸に話しかける。

「俺は牛鬼を信じていた。父さんが牛鬼だけはいつまでも奴良組を愛しているって」

「違う！牛鬼様は今でも奴良組を誰よりも愛している！問題は奴良リクオだ！！あんな奴に奴良組は……俺たちの大将は任せられねえだろう！」

牛頭丸が刀を振るってくる

「「サイキ様！」」

つららが叫ぶ。

青に至っては俺たちの間に割って入ろうというぐらいの勢いだ。

「青、手を出すな。これは俺の戦いだ」

また牛頭丸に向きなおる。

「アイツはまだ十二歳だ。未熟なところはある。けど！アイツには確実にぬらりひよんの血が流れてる。覚醒したときに感じるあの『畏れ』は本物だ！」

牛頭丸の刃は防ぐので精一杯………というまでではないがかなりのものだ。

現在、氷鞭と炎鞭で防いでいるが防戦一方だ。

「……………牛鬼様の考えを否定するなあー！牛頭陰魔爪！！」

これが……………牛頭丸の……………体が動かなくなる。

「牛鬼組は人を操り惑わしひきよせ殺す『？』の代紋。お前にこれが破れるか？」

そして、牛頭丸の背中から二本の巨大な爪が現れ、襲いかかってくる。氷鞭と炎鞭を振るいなんとか防ぐ。

あの技を当てればあの爪ごと倒せるけど……………体が言うことをきかない……………

「そんなんで止めれると思うかあ！！これで最期だよ！！」

爪の数が更に増え、襲いかかってくる。

くそッ、こんなんでやられてたまるかよ！
俺は・・・アイツの・・・リクオの百鬼夜行に加わり・・・
戦う！！

自分の中の出来るだけの『畏れ』を放出する。

S i d e 牛頭丸

牛頭陰魔爪で止めをさすところだった。

これが奴良サイキの『畏れ』

奴の右側にあつた草木は突然炎を上げて燃え上がり、左側にあつた草木は一瞬にして凍りついた。

この一瞬で俺の『畏れ』がとけてしまう。
しかも今のでバランスが崩れた。
奴の攻撃が来る…

「今のうち！」
ブルークリムゾン
氷炎双線鞭！！」

S i d e o u t

俺の最高の『畏れ』をだした。

しかし、それは俺の予想を遥かにこえ周りにまで影響を与えるものだった。

そして、今ので牛頭丸も怯み、体も自由を取り戻した。

「今のうち！」
ブルークリムゾン
氷炎双線鞭！！」

現時点で俺の技で最高の威力を持つ技。

氷炎演舞は多数の敵に対して有効な技であるため、威力もそのぶん分散してしまう。

それに変わってこの氷炎双線鞭は両手の鞭を交差させ相手にうちこむもので威力は十二分に高い。

氷炎双線鞭で牛頭丸は気絶したようだ。

「さすがです。サイキ様」

「まあこんなもんだよ……」

「へっ、牛頭丸のやつあんな大口叩いて負けたのかよ。じゃあ、この馬頭丸様がみんなまとめて倒してやる」

森の木々を押し倒しすんできた大きな妖怪に乗っている小さな妖怪。

「あれも牛鬼組のやつか」

あれは知らんな

馬頭丸という妖怪が巨大な妖怪を操って襲ってくる。

ドォン！！！！

大きな妖怪たちが倒れる。それを行ったのは俺たちもよく知っている妖怪。

「サイキ様！大丈夫ですか！」

奴良組のお目付け役、鵜天狗の3人の子どもの黒羽丸、トサカ丸、ささ美だ。

「何しやがる、てめえ……ら……」

最後に青が馬頭丸に拳骨を食らわせノックアウトだ。
みんなが俺のもとへ集まってくる。

「3人はなんでこっちに？」

三羽鴉の3人に尋ねる。

「旧鼠の件の黒幕が牛鬼だとわかり掭眼山に行かれたリクオ様とサイキ様を追ってきたのです。それでリクオ様は？」

三羽鴉の長男の黒羽丸が答えてくれた。

「リクオはケリをつけるために牛鬼のもとに向かった。」

「そんな！危ないですぜえ」

「リクオなら大丈夫だ。俺もこれから向かう。青はすまないがづらを清継の別荘まで連れていってくれ。」

牛鬼の館に行くには三羽鴉の誰かに連れていってもらった方が速いしな。

「サイキ様！私なら大丈夫です！！」

「無理すんな、つらら。結構な怪我してるだろ。青に道教えながら別荘に行って休んでろ。」

「……………はい」

つららの気持ちはわかるが怪我してるならしょうがない。

「ささ美はここでこの牛頭丸と馬頭丸を見張っててくれ。黒羽丸とトサカ丸は俺と一緒に牛鬼の館に行くぞ」

「「「はい！」」」

掬眼山の山頂にある牛鬼の館についた頃には既に決着がついていた。

目の前には胸を斬られ片膝をついているリクオがいた。

そして、その後ろには同じく胸を斬られて倒れている牛鬼がいた。

「リクオ様ああ!？」

「な…なんだああ!？この状況は!？」

わって入ろうとする黒羽丸とトサカ丸をとめるリクオ。

「奴良組最西端のこの地にいるからこそよくわかる……内からも……外からも……いずれこの組は壊れる。早急に立て直さねば……ならぬ。だから私は動いたのだ。私の愛した奴良組をつぶす奴が許せぬのだ……当然だと思わんか……奴良組の未来を託せぬうつけが継ごうというのだ。しかも、我が……盟友氷虎の一人息子……サイキ。才あるものだがそのうつけを三代目に強く……推していた。しかし……リクオには器も意志もあった……サイキもリクオを私と氷虎以上の信頼関係があったからこそその行動だったとわかった」

牛鬼………そこまで奴良組を愛してたんだな……

「もはやこれ以上考える必要はなくなった。」

牛鬼が体を起こし刀を逆持ちして振り上げる。
まさか、牛鬼のやつ……

「これが私の結論だ!!」

その刀を自分の腹に向かって突き刺す………しかし、その刃は届くことなくリクオによって砕かれた。

「なぜ止める？リクオ……私には謀反を企てた責任を負う義務があるのだ……なぜ死なせてくれぬ……牛頭や馬頭に会わす顔がないではないか……」

「おめーの気持ちは痛いほどわかったぜ。オレが腑抜けだとオレを殺して自分も死に認めたら認めたでそれでも死を選ぶたあ……らしい心意気だぜ牛鬼。だが死ぬこたあねえよ、こんなことで……なあ？」

「若！？こんなことって……！これは大問題ですぞ!!」

「牛鬼……さっきの答え。人間のことは……人間ん時のオレにきけよ。気に入らなきゃそんとき斬りゃいい。そのあと……勝手に果てろ」

もうここは俺の出る幕じゃなかったな。

このあとのことも人間のリクオがやってくれるらしいし。

翌日

俺たちは本家に戻っていた。リクオたちの怪我の手当てもあったし、本当のケリをつけるためにじいちゃんや幹部を急遽召集して総会を開いた。

ここでリクオは牛鬼の件をすべておとがめなしにして奴良組三代目の候補に正式に立候補するというわけだ。

まあ俺は総会はサボって縁側でのんびりしてる。

「サイキ様、総会をサボっちゃっていいんですか？」

「いいって。俺のなかじゃリクオの三代目のことはとうに決まってたんだから。今さらって感じだよ」

「まあ、そうですね…」

「んー……………つらら酒持ってこい。やっぱり祝い酒だ」

「え！？今さらって感じなんじゃなかったんですか？」

夜遊びをす

この前の牛鬼事件とリクオの総会が終わり月日は流れ今は6月。

俺は三羽鴉に聞きたいことがあったので夜のパトロールに行く前の黒羽丸を呼び止めていた。

「それでサイキ様。聞きたいことは何ですか？」

「お前たちさ、掟眼山で俺のところに来る前に陰陽師と闘ったか？
なぜこんなことを聞くかというとつらが青に清継の別荘まで連れていってもらったとき温泉で花開院が妖怪と闘ったかと聞いたからだ。」

「はい。そこにサイキ様たちがいるかとも思い降りたのですがいきなり攻撃を仕掛けてきまして。」

まあ陰陽師としてやそこに力ナたちがいたから守らないとも思ってたんだろ。

「それで闘ってみてどうだった」

「正直なかなか強かったです。しかも、式神を同時に三体も召喚したのには驚きました。我ら、三羽鴉も苦戦しました。」

「そっか……………ごめんな、パトロールの邪魔しちゃって…」

「いえ！それでは行ってきます」

「行つてらっしゃい」

三羽鴉を苦戦させるとなると花開院もかなりの実力者だ……

それに比べて俺は全然ダメだ。あの牛頭丸と闘ったとき以来あの『畏れ』を思いっきり出したときにおこったあれが一度もできていない。

「はあゝ、もつと強くなりてえなあゝ」

サイキsideout

黒羽丸が飛び立ったあとの縁側でため息をつきながら座っているリクオを見つめる4つの影。

リクオとサイキの側近である雪女、青田坊、黒田坊、首無である。

「最近、サイキ様が元気がないと思っていたらこういうことだったのね。」

「そうだな。サイキ様が強くなりたいというのはわかるがまだ十二歳と若い。急ぎすぎてもしものことがあるかもしれない。」

と、いつも慎重な首無が言った。

「ああ。あの氷虎様と不知火炎様の息子だ。それも重荷になってらっしやってるのだろう」

と、黒田坊

「だがなあ、あそこまで思い詰めているのも良くないぜ。なにか気晴らしになることはねえかなあ」

「「「「.....」」」」

それからしばらくの間4人のあいだに沈黙がすぎる

そのとき.....「どうしたんですか、みなさん？」

そこに来たのは浮世絵町一番街に一番大きな店『化猫屋』を構える良太猫だ。奴良組幹部でもあり、先日の旧鼠事件などで組に恩を感じている。

今日は旧鼠事件以来、店が軌道にのってきたのでそれを報告しにきたのだが.....この瞬間4人は同じことを思い付いた。

サイキs i d e r e t u r n

時間は過ぎ6月23日

あれからはリクオが三代目を継ぐことを本気で考えるようになったこと以外たいして変わったことはない。

「はあ……」

「どうしたの、サイキ？」

俺の溜め息と一緒に登校しているリクオが気をかけてくれた。

「いや……最近強くなってる実感がしなくてな……」

「そんなことないよ！サイキ、最近は青田坊や黒田坊、首無しとかいるんな妖怪たちと特訓してるし」

してるはしてるんだけどなあ

「この前、掬眼山でやった畏れを思いっきり出して回りを凍らせた
り燃やしたりした、あれが出来なくてさ……あんときは無我夢中だ
ったしさ……」

「…………サイキなら大丈夫だよ。」

うん…………頑張るしかないか

「おっはよー！」

この声はカナか

後ろから声がして振り向く

「おはよ〜」

「おはようカナちゃん」

「あれ？サイキ君元気がないけどなんかあったの？」
顔に出てたかな…

「ああ…うん。まあちょっとね………そういえば…ホレ、誕生日プレゼントだ」

制服のポケットから髪留めを出してカナに渡す。

「あ！覚えててくれたんだ。ありがとう。」

「カナちゃん、僕からも………なんだけどサイキとかぶっちゃったね」

リクオがカナに渡したのも装飾は違うが髪留めだった。

「ううん。ありがとう、リクオ君」

放課後

「フレ、フレ、リクオ様」

リクオがまた自分から先生の手伝いをかって出たので現在それをやっている。

そして俺も手伝うことに
今テンション低いのに……

「よし……これで終わりか」

今日も修行にいこ……

「サイキたちは先に帰っていいよ。ボクは教室のごみ捨てに行くから。」

「まったく、そこまでやらなくていいのに……じゃあ俺は特訓にいくから帰るよ。」

「若、すいません。私も帰りますね。」

そう言っつたらと家に帰る。

「今日は私と青田坊と黒田坊と首無の4人がついていきますね。」

「なんで今日は4人も……まあ助かるからいいけど」

それから特に会話もなく家につく。

制服から着替えて準備してからつららとさっきつららが言った3人と合流する。

「では行きましょうぜ、若。」

「おう……あれ？なんでこっちに？」

青たちが歩いていく方向はいつも俺が特訓している場所とまったく違う方向だ。第一、いつもだったらおぼろ車に乗ってくの今回のは歩きだ。

「サイキ様。今日は私達が今のサイキ様に一番いい場所を見つけました。」

首無がそついうがどんどん町のほうに行つてると思うんだが

・ ・ ・ ・ ・

「つてここ一番街じゃん!!」

一番街といたら旧鼠事件のときに来た以来だ。
結構賑わってんだなあ

「……………つて、こんなところじゃ特訓できねえじゃん!!」

「はい。今日は特訓はお休みですよ。」

「さてよ、つらら!休みて、俺はもつと強くなりたいんだ!!休んでなんかられないよ」

つららに反論したがそれに黒が応える

「強くなりたいのはわかりますが特訓のしすぎで身体が壊れたらもともありません。」

「だ、大丈夫だって…俺の身体はそんな柔じゃないって…」

「いえ。最近のサイキ様は無茶すぎですぜえ」

「そうです。私達にとってあなたをリクオ様と同じぐらい大切な存在なんですからね」

そっか……………みんなありがとな

「わかったよ、今日はゆっくり休んで楽しむぞー!で一番街に来たつてことは良太猫のこの店に行くんだよな。」

「はい。そろそろ……………つと、ここですね。」

化猫横丁に入ってからしばらく歩いたところにそれはあった。

「いらっしやいませー!!」

「奴良組御一行様、お待ちしておりました。」

「妖怪和風お食事処『化猫屋』へようこそ!!」

「いらっしやいませ、サイキ様」

店に入ると化け猫妖怪と店主の良太猫が元気に迎えてくれた。

「おう、良太猫。だいぶ繁盛してんじゃん」

「はい！おかげさまで。」

それから奥の大人数用の席に案内され酒や食事が次から次へと出された。もちろん現在妖怪ですよ。

「酒もいいのだし料理もうまい。いい店だなあ」

すこし酔ってきたな。

みんなも楽しんでいるしやっぱり来てよかったな。

「ありがとうございます。それではこれから入んでうちの組じゃあ名物の百鬼花札やりませんか？」

「おう、いいぜ。俺は花札は強いぜ。」

「「「いらつしゃいませー！」「」」

また客が来たみたいだな。さっきから大勢の妖怪が来てるしすごいな

「じゃあ配りますね」

良太猫が花札を配ろうとしたとき今、来店してきた客がこっちに来た……

「リクっ！っカナ！？」

リクオはわかるがなんでカナを連れてきてんだよ！？
それを見てつららたちも驚く。つららと青は言うまでもないが黒と首無も一度清十字怪奇探偵団が家に来たときに見ているからカナが人間だと知っている。リクオはカナを連れて俺の隣に座る。
位置的关系は左からカナ、リクオ、俺だ。

「すまん、良太猫。花札は一時中断だ。」

「あ、はい。」

良太猫に断りを入れてから回りに聞こえないようにリクオに話しかける

「（リクオ、なんでカナを連れてきたんだよ！？）」

「（学校で妖怪に襲われているところを助けたら俺のことを知りた
いって言うから連れてきた。）」

そう平然というリクオ

たしかにここにくれば店員の化け猫たちが『若！』ってよんだり、
それなりの行動をするからリクオが妖怪の主だってことはわかるだ
ろうけどさあ……………

「（でもカナが人間だってばれたらヤバイぞ）」

「（バレなきゃいんだろ）」

ダメだ

人間のときと性格が変わってるよ……………

ということではれないようになんとかすることに。

接客の妖怪がカナに興味津々だ。

それもそうだろ。人間なんだから見たことないに決まってるし。

そろそろ日が昇ろうという時間。ここも閉店に近い時間だ。

カナはさっきリクオが家まで送りに行った。

もう寝ちゃってたからな。結局人間だってことはバレずにすんだ

「よーっし！俺らも帰るか」

「ありがとうございますー」

閉店に伴い俺たちも家に帰る。楽しかったなあ。でも……………眠い。

今日の授業は全部寝よ

鞭VSムチ

「はあゝ、めんどくさ」

現在、放課後で場所は商店街。

なぜ商店街に来ているかというと言つまでもなく買い物なんだが、実は学校の実習で料理を作ることになりその材料をじゃんけんで負けた俺が買いに行くことになったというわけだ。

「これで全部だな」

メモ書きしてあるものをすべて買い終わり帰宅の途につく。

ドガアッ!!

公園の横を歩いていると突然ものすごい轟音がおこる

「妖気!？」

轟音のした方向にはブランコが見るも無惨な姿になっていた。

「あれは花開院に、じいちゃん!？」

なんであの組み合わせなんだよ…
天敵同士じゃんか

「お、サイキ」

今、叫んだのでじいちゃんと花開院、それに敵らしき妖怪が俺に気づいてしまった。

あの妖怪はおそらくじいちゃんを狙いに来た妖怪だろう。

とりあえず俺も戦わないとだから2人のところに向かう。

「ちょ、サイキ君！なんでこっち来たん！！いくらおじいさんが心配だからって危ないよ。」

「いや、俺も戦って俺がじいちゃんを守るって！」

「なにゆうてんの！相手は妖怪だよ。妖怪と戦えるのは同じ妖怪か私みたいな陰陽師だけや！」

しまったー！！

花開院に見つかる前に妖怪化しとくんだった！！

「うるさい『護衛』だな」

敵妖怪が部下を引き連れ、風を操り攻撃してきた。
見たことない妖怪だ。

それを花開院が札を展開し防ぐが飛び散った風が後ろのビルに直撃し、窓ガラスを吹き飛ばした。

「二人とも、悪いこと言わん……………逃げて!!」

「たしかに逃げたほうがよさそーじゃの。しかし、かまいたち…
こんな荒っぽい奴だったか…………ハテ」

たしかに一旦逃げたほうが良さそうだな。花開院のまえじゃ妖怪にもなれないし、花開院ならそう簡単には負けないだろう。

「妖怪に詳しいいんやなおじいちゃん…………でも、多分あいつはかまいたちとちやうよ。あいつは風の『ムチ』四国の山奥に現れる…………怪異妖怪!!あの風は『毒』人を病にさせる…………猛毒の風!」

四国妖怪がわざわざこんなところまで来るなんて。奴良組を倒して天下をとろって気か?

いや、今はこんなこと考えてる場合じゃない。正面の奴に気をとら

れてるうちに部下の奴に回りを囲まれてる。

「ヤバくないか、花開院？」

『風の陣型 砂打ちの鞭!!』

部下、一人一人が風をおこし、それは俺たちを取り囲むものへと変わっていった

「サイキ君!!」

鞭になった風が俺に向かってくる。
いつもならよければ速さだが今は人間の姿だ。体が対応しない。

「うっ!!」

花開院が俺をかばって鞭にあたる。

くそッ

何やってんだ、俺は!!

「2人ともつかまって!! 式神! 禄存!!」

これが花開院の式神………禄存と呼ばれる鹿のような式神は俺とじいちゃんを乗せ、近くのビルの上上がる。

風のムチは追いかけてくるがさすがに屋上までは届かなかったようだ

「花開院!!」

俺たちを逃がすために結構攻撃をくらったみたいだ。
しかし、花開院はこのくらいで負けるような陰陽師じゃなかった。

ドンッ

更に式神を2体

これで黒羽丸が言っていたように式神を同時に三体召喚した。

2体の式神が部下たちに襲いかかる。

そして………

新たに金魚のような式神を召喚して自分の手と一体化させた。

そして、その口から攻撃を放ち部下たちを全滅させる。

すごい………これが陰陽師の、いや、花開院ゆらの実力。

……だがちょっと待て

あの敵妖怪はどこに!?

上から見てればわかる。今倒せたのは部下たちだけだ。

奴は突然花開院の後ろに表れ、風でできた鞭で花開院に攻撃する。

しかし、とどめをさすのかと思いきやこっちに向かってきた。

やっぱり目的はじいちゃんを倒すこと。

「護衛はあと一人か…だが、そいつは人間じゃねえか」

やっぱり俺のことは知らないな。奴良組と組にちかいものぐらいしか俺が養子に入ったこと、いや…妖怪、氷虎と不知火炎との間に子どもがいることさえ知ってるかどうか………

「ムチ、俺は妖怪だ。」

そして、妖怪の姿になる。

「これは面白いな。先程まで完全に人間の気配だったんだがな。まあ、いい。ザコはザコだ。」

そう言つて風のムチを振るってくる。それに俺は氷鞭、炎鞭で対応する。

この『畏れ』は毒をもった風。風の軌道なんてよめるわがねえ。

「このままじゃ勢い負けする……………じゃあ、これなら！『氷炎
双線鞭！』」

風のムチの攻撃が一瞬怯んだ隙をみて技を放つ。
がムチはヒラリとよける。

「そんな大振りあたるわけないだろ！」

この前の牛頭丸のときも同じだが当てれなくては意味がない。やっ
ぱりあれでムチの動きを止めないと当てられない。

「弱い、弱い……だが氷と炎の二種類の畏れか？それは珍しいな」

「俺には大妖怪、氷虎と不知火炎の血がかよってる。そして、今は
ぬらりひよんの養子だ。」

「そうか…お前が。知ってるぜ、最近頭角をあらわしてきている大
妖怪の子ども。まあ、いいや。所詮、まだガキだ。お前の親となら
おもしれえことになっただろうによ」

はあ？

「お前、今の本気でいったのか？」

「ああ、本気だぜ。」

ふざけんな…………お前んかが…………

「お前んかが父さんと母さんに勝てるわけないだろ!!」

轟!!

「——ッ、ぐっ…………」

これだ!

あのときの…………これが俺の『畏れ』だ。

「とどめ!『氷炎双線鞭!!』」

双鞭がムチの体を切り裂いた。

「サイキ、強くなったな。もうすぐ陰陽師の嬢ちゃんが来るから人間に戻つとけよ。」

じいちゃんのいうとおりに人間に戻る。

「しかし、なぜ四国のもんが奴良組を狙う」

やっぱりこいつは先日ひひを殺した奴か。

「四国は天下をとる……」

そっいつてムチは消えていった。

ガチャっ！

勢いよく屋上階段の扉が開く。

「大丈夫か、2人とも！？……………あれ？ムチは？」

「えっと…なんか逃げてったぜ。」

花開院は納得しかねてたがそこにもなにも起こらないので帰っていった。

怪我が大したことがなかったなのでそれは良かった。

「じいちゃん、俺、強くなりたい。」

四国妖怪……………やつらを倒すには今のままじゃだめだ。

「いいだろう。その眼、氷虎そっくりじゃのう。だが、その前に『畏れ』について説明せねばのう。」

「『畏れ』って元は人間を驚かすとこれろから始まったんでしょ？」

「まあ、そうじゃな。じゃが、次第に妖怪の数が増え、妖怪同士の縄張り争いが起きるようになった。そのために今のような『畏れ』が生まれたんじゃ。そして今、『畏れ』には二種類ある。」

……………

「『鬼發』と『鬼憑』……………サイキでいうとあの鞭は鬼發じゃな。そして、その鬼發は不知火炎の技じゃ。」

炎鞭は母さんのだったな。氷鞭が使えるのは父さんのおかげか…

「そしてさっき使った畏れを断つたのは氷虎の鬼憑じゃ。鬼憑というのは自らの『畏れ』を具現化し技として昇華させる……『畏れ』を以て『畏れ』をやぶる……それが妖怪の歴史の必然で産み出された、対妖用の戦闘術じゃ。」

父さんの……『鬼憑』

「名を氷断^{ひやうだん}。相手の『畏れ』断ち、動きを止める。もともと、自分の『畏れ』より相手の『畏れ』のほうがより強いものであればこちらの能力も弱まる。まあ、氷虎ならほとんどの妖怪を圧倒していたしのう。むしろ、氷断を使わず終わらせたことのほうが多かったじやろうな。」

さすが、父さんだなあ

「俺も父さんみたいな妖怪になりたい！」

「ああ。修行にうつてつけの場所がある。明日には本家に迎えが来るよう手配しとくわ。」

「ありがとう、じいちゃん。」

話しもつき家に帰ろうとするが、じいちゃんはさっきも一緒にいた納豆小僧を連れて違う方向にいくこうとする。

「やうくお？」

「……ちと、四国にな」

……

四国って今の敵の本拠地じゃん……

鞭VSムチ（後書き）

ひょういの漢字が変換できなかったなので鬼發としました

修行に行く

あのあとじいちゃんと別れて帰宅。

「サイキ様ー！？護衛をつけると行っているのにまた1人で街に行かれては困りますー！！」

「いいじゃんかよー。怪我はしなかったんだし」

いちいちうるさいなあゝ

「怪我しなかったって！な、なにかあったんですか！？」

「その事についてはシャワー浴びたらみんなに話す。じいちゃんのこともあるからさ……」

ここだけは真面目に言う。

「わかりました。それでは皆を集めます。」

さて……………どう説明するかな？

はあゝスッキリしたー

ムチと戦って汗かいたからちようど良かった

シャワーをし終わり大広間に行く。

そこには今、本家にいるすべての妖怪がいた。

牛鬼の件で現在、本家にいる牛頭丸と馬頭丸もいた。

「サイキ、いったい何があつたの？」

リクオも帰ってきたか。

「さっき買い物にいったとき公園にじいちゃんと陰陽師の花開院が一緒にいたんだ。」

「なんでそんな組み合わせに」

「総大将が滅せられる」

まあおかしな組み合わせだがじいちゃんが今の花开院に負けるとは思えない。

「次が重要なんだ。花开院はじいちゃんを守って戦っていた。その敵は四国妖怪、ムチだ。そいつは俺が倒したけど死に際にそいつはこう言った。『四国が天下をとる』だ」

「四国だつてええ」

「じゃあヒヒ様をやったのも四国だったのか」

だめだ。

幹部がやられ総大将がいない今、奴良組はバラバラだ。

「もしかしてあのときのやつらも四国の妖怪だったんだ！」

リクオも四国妖怪にあったのか…

「で、じいちゃんなんだが、納豆小僧と四国に行った。」

「そんな……やっぱり総大将はいないんだ！」

「家がなくなるよー」

妖怪たちが逃げ出そうとする。

「妖怪がおたおたすんじゃないねえー！人々から畏れられる存在なんだろう？じーちゃんは何にか考えがあるんでしょ………はつきりしてんのは敵が土足でボクらのシマをふみあらしてること。入ってきたなら落とし前つけるだけだ！奴良組は今からボクがしきる！！」

いつってくれるぜ、リクオ。

それでこそ俺の大将だ。

あのあと俺は縁側で酒を飲んでいる。

ここはお気に入り場所だ。庭には桜の木と池があり景色も綺麗だ。だから、修行に行く前にここで酒を飲んでいこうと思ったんだ。

「サイキ、ここにいたんだ。悪いんだけどサイキもパトロールにつきあつてきれない？」

「悪いな、リクオ。俺、今夜あたりに修行に行くんだ。多分、遠いところに。じいちゃんに強くなりたいて言ったら出来ることになったんだ。こんな大事なときにごめんな。でも、強くなって帰ってくるから。」

「うん。待つてる。強くなってボクの百鬼の……ボクのすぐ後ろについてきて。」

「ああ……もちろんだ。帰ってきたときには俺は13になってる。だから、帰ってきたらお前と盃を交わしたい。五分五分じゃなく七分三分のだ。正式に俺はお前の下僕になる。」

「うん。待つてる。サイキは一番信頼できる妖怪であり友達でもあり家族だ。……じゃあボクはパトロールに行つてくるよ。」
そう言つてリクオは玄関のほうに向かつていった。

「シク、シク……感動しましたよ。サイキ様……」

「なんだ、つらら。聞いてたのか。」

「すみません。通りかかったときに声が聞こえたので…………サイキ様。私もリクオ様と七分三分の盃を交わします。」

話ながらつららが俺の隣に座る。

「おおつと。それはいいが俺が一番だぜ。」

これだけは譲りたくないからな。

「はい。ですが、修行とはどこに行くのですか？」

それは俺も知りたい。

「場所は俺も知らないんだ。鬼憑を覚えたいって言ったんだけど。」

「鬼憑ですか……………それなら遠野かもしれませんが。東北は多くの妖怪が生まれた土地で特に遠野は『極寒』『極悪』『極強』の3Gと言われているそうです。」

マジかよ

なんかヤバそうなところだな。まあ強くなるためだからいいんだ。

「それは我々のことだな」

え……………？

「弱い子はいねが、弱い子はいねが」

目の前には河童の妖怪となまはげ2体がいた。

「奴良サイキだな。」

「お、おう。そうだけど……っ、うわああー！」
なまはげに捕まれてからだごと持ち上げられました。
「それでは行くぞ。」

俺の返事を待たずになまはげは走り出す。

「いつてらっしやいませ！サイキ様！」

道中ひたすら走り続ける。

「あなたたちは遠野の妖怪なんですか？」

「そうだ」

「遠野から来たにしては早すぎやしないか？」

さすがにじいちゃんが夕方あのあと連絡したとしてもいくらなんでも早すぎる。

「我々はたまたま近くを通りかっていたからすぐに駆けつけたんだ。だが、覚悟は出来ているのか……お前、死ぬぞ……」

「そんなのとうに出来てるぜ。さっさと行くぞ！遠野ってところに
な！」

修行に行く(後書き)

次回から遠野編ですが更新は少し遅くなりそうです。

ゝ遠野編ゝ 妖怪 不知火炎（前書き）

自分は地方に住んでいるので気づかないうちになまりがセリフなどに入ってるかもしれません。書いてる途中にも何回か見つけたんですけどまだ残ってるかもしれません。すいません！

く遠野編く 妖怪 不知火炎

「ついたぞく起きろ！」

……… ついたのか………
いつのまにか寝てたぜ。

「つくの早くないか？」

「遠野をなめるなよ」

いや、いくらなんでも早すぎると思うんだが………ここが奥州遠野一家

あれ？そついや寝るときに人間の姿に戻ったはずんだけど今は妖怪の姿だ。

「なあ、ここってどうなってんの？いつのまにか妖怪の姿になってるんだけど。」

先頭の河童に聞く。

「ここは妖気に満ち溢れてる。ある程度のものでないと入ることもできず逃げることもできない」

「へっ、上等じゃねえか。帰るときは俺の鬼憑でここの妖気を断つて出たってやるよ。」

しばらく歩くと屋敷に着いた。
中に入り奥に進むと大広間に着く。

「……………」

部屋に入るとすべての視線がこちらに集まる。

どうやら今は朝食の時間みたいだな。おそらく一番奥に座っているでかい顔の河童の妖怪が大将だろうからその前にいき正座する。

「ほう……………あんたがぬらりひよんの言っていた。」

「そうです。俺がぬらりひよんにここを紹介され修行に来ました。」

「その髪の色。あいつにそっくりだな……………」

この髪の色って母さんの……………」

「母さんのこと知ってるの……………いや、自己紹介が遅れました。俺はぬらりひよんの養子で大妖怪 氷虎と不知火炎の息子、奴良サイキです。」

『不知火炎の！？』

『あいつが子供を作っていたとは！？』

『おもしれえこともあるもんだな』

「おい！お前ら母さんのこと知ってるのか！？」

「知ってるもなにも不知火炎はこの遠野出身の妖怪だからな」

そうだったのか……母さんの故郷か

「では、次は見習いの仕事だな。連れてって教えてやれ」

と俺をつれてきた河童の妖怪
ちよっ！？見習いつて

「まて！見習いつてなんのことだ！俺は修行しにここに！」

「ぬらりひょんはお前を強くするためにはどんなことをさせてもいいと言っていたからな。見習いの仕事をすれば強くなれる。我々が保証しよう。」

「ったく………わかったよ。じゃあ見習いの仕事終わってからも特訓つけてくれよ」

とりあえずこういうことになり見習いの仕事（雑用）に向かう。
一通り説明してもらったんだが仕事多すぎんだよっ！これで強くなれるならいいけどとりあえず文句をいっても仕方ないから薪割りの続きをする。

「まだ半分か。腕いてえ」

「お、サイキ。薪割りはどうだ？」

「雨造か……どうっていつでもこんだけやってもまだ半分だ。なんかコツはないんか？」

「コツか……淡島に教えてもらわなかったのか？」

ここ遠野では家事を妖怪たちがそれぞれ分担している。それを今回俺が全部やることになったわけだ。淡島はもとも薪割りだったので俺に教えてくれたんだがそれは場所や道具などの基本的なことだけだった。

「ああ、基本的なことだけだったよ。やっぱり他のやつもそうだけだよそ者にはみんな酷いんだなあ。」

「まあ遠野はそういうところだからな。まあ、俺はお前のこと結構気に入ってるぜ。俺はまだここを出たことをないんだ。外のことを教えてくれよ。」

「それぐらいならいいぜ。俺はこれでも小さい頃に父さんや母さんにいろんな妖怪のこと聞いてたからそれなりに知ってるし。あ、でもその代わり薪割りのコツ教えてくれ」

「いいぜー。別に難しい話じゃねえんだ。サイキ、戦闘のとき相手を効率よく倒そうと思ったら、どうすればいい？」

「効率よくかあ……まあそれぞれやり方があるだろうけど一番はでかい……必殺の一撃を打ち込むのがいいんじゃないのか？」

今回、鬼憑を使えるようになれば俺のスタイルは、敵の畏れを断ち切り動きをとめたあと氷炎双線鞭で決めるってかんじかな

「そうさ。畏れをキープしたまま、集中を切らず、相手に必殺の一撃を打ち込むんだ。いいか、一撃だぜ？失敗したからって、相手は何度も打たせてくれないぜ。勿論、一撃で相手が倒れるかどうかは、やってみないとわからねえ。だけど、それだけの集中力で打ち込むのさ。薪割りもそれと同じだよ。何度も失敗するのは集中できなないからだ。集中力を高めて、敵に打ち込むつもりで斧を打つんだ。」

「敵にうちこむつもりで、か…」

「そうだ。じゃあ構えてみる。」

雨造に言われ、台に原木をおく。息を吸い込み、斧を構えた。そして、畏れを発動し斧を振りかぶった。

集中……集中……集中………畏れを切らず維持する………一撃を打ち込む！！

「おお…」

まるで薪に斧が吸い込まれたようだったし台のそばには、綺麗な断面の薪が落ちていた。

「サイキ！一発でできるなんてすごいなあ。鬼憑もすぐ出来るようになるんじゃないか？」

「いや、まだ練習しないとダメだな。」

それからまた何回もやってみる。何回か失敗もしたが最後の方にはほとんど成功するようになった。

「ありがとうな、雨造。なんか掴めたみたいだ。礼に俺の知ってる妖怪のこと教えるよ。」

「ギャババ、じゃあオイラーが見つけた特別な場所で話そうぜ。ちよつと山んなか歩くんだけどな、滝があるんだ。冷たくて気持ちいいぞー。」

といって雨造が引つ張ってくる。最初みたときは某ライダーに似てるか思ってたんだけど結構いいやつだなあ。

「よし。家事も一段落したし、行くか」

雨造の言ったとおりいいところだ。滝つぼの水はひときわ澄んでいて、微かに漂う山の霊気も心地いい。

そこで俺達は知ってる妖怪のことを話し合った。雨造はここを出たことないにも関わらずいろんなことを知ってるんだな。

「雨造。母さんは……不知火炎はここ出身なんだろう？なんか知らないか。」

「オイラーも詳しくないんだけどここ遠野でもかなりの実力者だっ

たらしいぜ」

へえーやっぱりすごかったんだ。

「どこからともなく火が上がったと思ったら瞬く間に大きくなり敵を焼き尽くすって言われてたらしいし背中には炎の翼を持ち天をかける火の鳥のようだったともきいてるぜ。多分それが不知火炎の鬼憑だぜ。」

それは俺も使えるようになりたいな。

今回父さんの鬼憑、『氷断』を修得するためにここに来たんだが俺には母さんの血も流れてる。だから、その翼も修得したい……

「つとそろそろ稽古の時間じゃねえか？」

「そうだな。でもどこでやるんだ？」

「オイラーが案内してあげるよ。サイキにはいろんなことを聞けたし。」

ということで雨造の後に着いていく。

よし！気合いいれてくぞ！早く鬼憑を修得して浮世絵町に帰って四国の連中をぶっ倒すぞ。

ゝ遠野編ゝ 妖怪 不知火炎（後書き）

遠野編は何話ぐらい続くかわからないんですけどもうすぐ学校のテストもあるので10月中か11月上旬ぐらいまでだと思います。

く遠野編く 特訓開始（前書き）

短いです…

〈遠野編〉 特訓開始

「ここが…」

「遠野の数ある実戦場のなかで一番広いところだぜ」

雨造に連れてこられてやって来たのはもちろん特訓のためなわけだ。たくさんの大木が立ち並び、その真ん中にはまたもや巨大な切り株があった。

現在、そこで淡島と土彦が戦っていた。もちろんそれは本気の命懸けのものではなく互いの力を高め試すもので遠野では日常的に行われているものだ。

「やつと来たか……俺はお前の監視役のイタクだ。」

「イタクは監視役じゃなくて指導係だろ。ちゃんと見習いの仕事のほうも面倒見てやれよな。オイラーがみてもいいんだけどさ」

「雨造、お前はよそ者に優しすぎだ。あの不知火炎の子供だからって奴良組で甘えられて育ったやつだろ」

「まあ、あいつらは真面目だからなあ。だが、俺は甘くない。強くなるためなら見習いの仕事でもなんでもやってやる。」

「……………まあ、いい。今からお前の力を見る。来い。」

イタクの後ろについていき切り株の上に立つ。するとそこにいた他の妖怪も集まってきた。

「お、新人とやるのかイタク」

話しかけてきたのは『男』の淡島だ。親が天女と鬼神らしく昼は男、夜は女らしい。

「ああ。まずはどれだけ畏れを使えるか見る。鬼發ぐらいはできるんだろ？」

「もちろん。じゃあ、いくぜ。氷炎鞭！！」

氷鞭と炎鞭をだす。

「それがサイキの鬼發か……………いや、不知火炎の鬼發に氷虎の能力も混ざったってところか」

「オレと同じか…………」

淡島は性別がかわるが畏れも俺と一緒に二種類だそうだ。

「すこしかかってこい」

イタクが言うので氷鞭を振るう。炎鞭だとまわりが燃えるからな。

イタクは後ろに下がり氷鞭を避けようとする。けど、そんなんじゃ俺の鞭は避けられないぜ。

「…………ッく、」

降り下ろした氷鞭は空を切ったがそのまま地面にあたり勢いのまま直線上に地面を凍らせた。

イタクが咄嗟に横に避けなければ今頃氷づけになっていただろう。

「鬼發だけならかなり使えるじゃねえか。」

「当たり前だ。どんだけこれの特訓したと思っただよ。」

「じゃあ、そろそろ見せてやる。これが鬼憑だ！」

見極めてやる。鬼憑がどんなものを……イタクは背中にはある鎌をとり構えた。

「畏れの発動、『鬼發』！……の移動！！『鬼憑』！！」

これは……畏れが鎌に集中した。
その鎌は思いつきり投げ飛ばされた。

ドンっ！！

「妖怪忍法レラ・マキリ……俺の秘技だ。」

鎌を避けるために氷鞭と炎鞭で防ごうとするが一瞬でやぶられ、俺の体をかすり更に周りの大木を破壊した。

「ヒエヒヒヒ、やりすぎだあ〜イタク〜」

「まーた実戦場を壊す気か？」

鎌がイタクの元に戻ってくる。

「畏れを断ち切る……畏れをやぶると言ってもいい。畏れをやぶるには……気合いや気迫のたぐいでしかなかった。自らの畏れを具現化し技として昇華させることだ。畏れを以て畏れをやぶる……これが妖怪の歴史の必然で産み出された対妖用の戦闘術………これが鬼憑だ。たぶん、お前がやりたい氷虎の鬼憑は相手の畏れを断ち切り動きを止めてから、更に氷で何らかの攻撃をするんだろう。」

「イタク……みんな……頼む、そいつを俺に教えてくれ!!」

「死んで本望ぐらいの気合いじゃねえと時間の合間に見てもやらねえぞ」

「強くなる……強くなって浮世絵町で待ってるみんな……俺の主のもとへ帰る!!」

「……ふん……ここは戦闘好きの集まり……実戦あるのみだぜ!!」

そっちのほうで俺的にはやりやすいから助かるぜ。

「よし!!次はこの淡島の畏れを見せてやろう。さあやるぞ」

「おう!頼むぜ淡島」

さつきかすったときの傷なんてもういい。時間は少ないんだ。

く遠野編く 襲撃

イタクの鬼憑を見たあと結局、夜までイタク、淡島、雨造、土彦、レイラたちに実戦という特訓をやった。現在、風呂に入っている。気持ちいいんだが特訓の傷がしみるよ。

「サイキー、半日やつても出来なかったなー。向いてねーんじゃねえか」

……………結局出来なかったんだ。早く修得して戻りたいんだが。

「うるせーなー。まだなんかコツが掴めないんだよ」

「サイキー。コツなんてオイラーが教えた薪割りと同じだぜ。」

薪割りと一緒に…

畏れを維持したまま一撃に集中する。

わかってるんだが薪割りみたいにすぐ出来ないんだよ。

「なあ、サイキは早く強くなって主の所に帰るって言ってたけどそこまで急ぐことなのか？」

「ああ。今、俺たちのシマに四国妖怪が攻めてきたんだ。俺の予想だとあと数日であいつらが本格的に攻めてくる。だから、それまでに戻りたいんだ。」

さっきから無言だったイタクが口を開いた

「その四国つてのは強いのか？」

「わからない。四国妖怪の力は未知数だ。だが、おれは四国妖怪の一人と戦ったんだが正直ギリギリだった」

「フン！サイキでギリギリなら大したことないな」

まあ認めるしかないか

「それでこのあとやるのか？」

「おう！やろうぜサイキ！！このあまのじゃく淡島がまた付き合つてやろう」

「バツ、淡島。今入ってくんなよ！！」

現在、夜。

つまり淡島は女である。女であるからもちろん出ているところは出ている。

「いや、今日は早く寝るつもりだ。明日早く起きて家事を済ませてから特訓するよ。じゃあお先」

ということと寝床に向かう。夕飯はさつき食べたからいいとして…

……………なんだこれは

俺の寝床は少し大きな釜だった。

予定通り早く起きる。

昨夜からたまっていた洗濯物を川で洗い干して薪割りを今やり終わったところだ。まだ仕事は残っているので次の場所に移動中だ。

おっと！

地面には所々に苔のはえた大きな石が転がっていて足場が悪すぎる。

ゴゴオオオ！！

恐れ！？

こんな早くに誰が……………

いや、あれは…穴？

数十メートル先に穴のようなものが空いておりそこから毛の濃い手が……………つて、手ツ！？

遠野には妖気が溢れていて簡単には入れないし出れない。

それなのに入ってきた。ということは遠野の妖怪であるか、他の妖怪だ。どちらにしても鬼憑を使えない今の俺じゃこの結界をやぶることもできない。

戦うとしたら強敵だ。

「腹減った――！飯を食わせろ――！」

前言撤回……………なんかバカそう。

外見は猿に似ているけど頭の毛は背中まで垂れていて身長は二メートル強あり、背中に沢山の荷物を担いでいる。

「……………お前、食い物くれ。くれ！くれ！くれ！！」

「待て！今、食べ物なんて持っていないよ！！」

なんか悪い予感が……………

「嘘言うな！！渡さないなら力付くで奪っちゃる」

「だからないって！」

って言ってもあの眼はマジだ。

「鬼憑、霧尽投飢箱！」
むじんとけいすけいばこ

やつの背中に担いでいた箱が空中に浮き、そしてこちらに飛んできた。しかも、数は多数。

避けきれない……………じゃあ破壊する！

「氷炎演舞！！」

ですべてを破壊する。

しかし、攻撃は止まない。突然、近くにあった巨大な石が浮き、こっちに飛んでくる。

数は1つ。他はない。これぐらい！

「なめんな！」

炎鞭で叩き落とそうとする。しかし、炎鞭が石に当たることなく、ましてや俺にも当たらず…というより俺の体を透き通っていった。幻か？

また近くに転がっていた石が飛んでくる。今度は2つ。今度はこそ実体か！？

違った！？

氷鞭と炎鞭で叩き落とそうとするがまたもすり抜けた。

そしてすぐにまた2つの石が飛んできた。
今度こそ実体、いやまた幻か

「喰らえー！」

つぐー！！

2つのうち1つは幻だったみたいだったがもう1つが実体だった。
その石は真正面からあたり俺は後方に飛ばされた。

受け身をとって立ち上がろうとするがふらついてしまう。さっきの一回分でも結構なダメージくらった。

「サ、サイキー！ってあれは異ノ助！」

後ろから聞こえるこの声は雨造か。異ノ助ってのは前のやつか……
…名前知ってるってことはやっぱり遠野の妖怪なのか？

「雨造！あいつはなにmondだ！？」

「あれは異獣の異ノ助だ。元々、遠野にいたんだけどいつつも食べ物探してて、あげないと襲ってくるんだ！」

そんな妖怪いるのかよ……

「そいつはオイラーが捕獲するよ。鬼憑の使えない今のサイキーじゃ勝てない。」

「いや、俺がやる。特訓にもなるし。だから下がってろ。あいつを止めればいいんだろ」

雨造の返事を待たず、異ノ助のほうに顔を向ける。

『氷断』で異ノ助の畏れを断ち切る。

それをやる！

集中だ……薪割りと同じように畏れをキープしたまま放てばいいんだ。

集中だ……集中。

また石が飛んでくる。

どうせ初手は幻だ。

「グハッ！」

くっそ……まさか一発目で来るとは思わなかったぜ。だがまた続け
てくるとは考えにくい。

集中……思い出せ、今まで氷断を使ったときのことを。
使えるさ、俺なら使える。

「サイキー！また来るぞ！！」

「もう知らん！！集中するから！！」

集中、畏れをキープしたまま集中を切らさず……
…一気に撃ち込む！！

バツ！！

周りが所々凍りついたり、所々燃えたりしてる。そして異ノ助の畏
れは断ち切られ動きが止まっている。
成功だ。

あとは異ノ助を捕獲するだけだ。

「これで終わりっ！氷投！」

左手に固めた冷気を投げる↓見事命中↓異ノ助顔以外凍る↓捕獲完了

「成功したぜー、雨造。」

後ろを向くとそこには雨造の他にイタクに淡島、土彦、レイラ、ユ
カリがいた。

「ったく…朝から騒がしいと思ったらこんなことやってたのか」

「やっとできるようになったか」

「フッフ、異ノ助久しぶりね」

まあこいつら言うてゐることは無視して出来るようになったことを喜ばう。これで四国も敵じゃないな。

あッ、ヤベ。

まだ見習いの仕事残つてゐるよ…

ゝ遠野編ゝ 襲撃（後書き）

次話で浮世絵町に戻ります。

ゝ遠野編ゝ 帰郷（前書き）

前回出たのは異獣という名前の妖怪で江戸時代に書物『北越雪譜』で語られている謎の獣。

詳しくはWikiで『異獣』と検索してください。

〈遠野編〉 帰郷

「まだ、甘いぞサイキ！」

あのあと凍らせた異獣の異ノ助は遠野にたくさんいる猿の妖怪たちが連れていった。

俺はというと見習いの仕事を小一時間で終わらせた。鬼憑も修得したことだし赤河童に一言、礼を言っではやく帰りたいんだが………さっきの声はご存知、俺の指導係のイタクだ。まだ全然なっていないということで午前中いっぱい実戦形式の特訓をやっている。

まあ確かにまだ完全じゃないかも知れない。イタクの畏れだって完全に断ち切ることができないでいるし。イタク以外でも淡島や雨造たちとも何回も鬼憑の特訓を繰り返した。

そして昼になり………

「これで四国のやつらなんて楽勝じゃねえか？」

「こんだけやっててそうじゃない方がおかしいぞ」

「ああ、ありがとみんな。まあ四国の力がどれだけのもんか知らねえから断言はできないけど」

………できないけどあのムチレベルの妖怪なら今、淡島がいったように楽勝だ。だが、攻撃用の鬼憑も出来るようになりたかったなあ。この父さんの鬼憑はあくまで、相手の畏れを断ち切り動きを止める

ただだ。父さんならそれに加えてなにか出来ていたかもしれないけどな。

「ギャババ！短かったけどここまでみつちりやってそれはないぜ、サイキー。それに最近は四国の噂も全然聞かなかったし、大したことはないぜ」

雨造の言う通り四国の噂はあまり聞いたことがない。あるとすれば昔のはなし。たしか……江戸時代に松山城を乗っ取ろうとした。個人の能力は圧倒的に妖怪側が上だし数でも上回っていたほどだった。だけど人間が持っていたある刀のせいで妖怪は負けたと……

それぐらいしか聞いたことはなかった。

「まあとにかく俺はこれで帰るよ。その前に赤河童のところに行つて礼を言つてこないとなあ。」

「そういえばサイキつて今日で13になるんでしょ？」
「なんで知ってるんだレイラ」

確かに今日は俺の誕生日で妖怪の成人年齢の13歳になった。一応世間では兄になっているリクオより誕生日が早いかつてのは周りに誤解を生まないためだ。リクオという跡継ぎがいるにも関わらず年上の養子をとるというのはリクオを廃嫡すると言ってるようなものだ。だけどじいちゃんはそのこと微塵も思っていない。今でも跡継ぎはリクオにすると決めているようだし、俺を養子に迎えてくれたのは盟友の一人息子であつたからだ。

「そうだぜ。今日で俺も妖怪として成人になつたわけだ」

「まだ、力は半人前だけだな。」

くっそお……イタク、最後まで……

「そう言っなよ、イタク。サイキ！誕生日ついでに最後に言っとくぞ。『常に畏れをとくな』。お前の畏れは強力だがまだ経験の浅いお前じゃ敵の畏れにのまれるかもしれないからな。だから少しでも気張っとけってことだ」

気張っとけって、淡島……まあ今回、実戦形式で何度も特訓したが本当の命の取り合いじゃなかったからいいがこれからの四国戦やこれからあるだろう戦いじゃそうはいかないからそこそこ、気を引き締めていかないな。

「注告サンキュ。じゃあ俺は赤河童の所に行くよ。」

みんなと別れて屋敷に向かう。中にはいるとそこには来たときと同じでたくさん妖怪が座っていた。

「おお、帰るか……」

赤河童な前に行き正座する。

「はい。この度は私のような若輩者を見てくださりありがとうございます。それではこれで私は主の元へ帰ります。」

「まったく……本当に不知火炎に似ておる。いつもは好きにやっているのに出ていく時だけ礼儀正しくしよって。」

「はい、それではこれで……っあ、そのうちぬらりひよんの孫が来るかもしれません。その時はまたよろしく願います。」

そう言って屋敷を出て歩いていく。

リクオもいつかここにくるだろうなあ。今の俺はリクオより強い自信がある。昼ならともかく夜のアイツなら絶対力を求めてここにくる。それに俺もそうだがリクオには守りたいものがある。そのためなら絶対強くなるはずだ。

まあとにかく今はこの妖気の壁を破って浮世絵町に帰る！

畏れの発動………鬼憑！！

妖気の壁におおきな壁があく。そして、俺はそこからでて、歩き出した。

四国妖怪と対峙す（前書き）

誤字などがあるかもしれません。すいません

四国妖怪と対峙す

やっと着いたか……昨日もらっていた金を使い電車で揺られること数時間。最寄の駅についたと思ったら既に日は沈んでいた。

とにかく家に帰るために早くタクシーに乗ろう。視線が痛い……

現在俺は妖怪の姿だ。遠野を出てから人間の姿に戻るのを忘れててそのまま人前に出てしまったのが間違いだった。そのまま隠れることもできず電車でこっちまで来てしまった。まあ、この姿は身長が伸び、髪と目の色が変わるだけだから普通に人間に見えるからいいんだがまあ炎髪だし目は青いから目立つのは絶対だ。

とにかく今は家に帰ろ。

「浮世絵町までお願いします。」

タクシーに乗り運転手に行き先を伝える。

しばらく無言だったのだが運転手が口を開く。

「お客さん、髪の色が面白いですね……おつ、目の色も青色だねえ。最近、流行ってるカラーコンタクトってやつだねえ。おじさんわかるよ！若い頃は何でもしたがるんだよねえ。オレも昔は夜にバイクを乗り回したもんだよ……」

……なんか、変な人の車に乗っちゃったよ……

「えー、では次は今、入ったばかりのニュースです。」

ラジオでニュースがやってるようだ。

『道楽街道にて妖怪のような生き物が暴れているという目撃情報が多数寄せられています。火があがっているという情報もあり危険ですので近くにいるかたはできるだけ離れてください。』

これって……もう四国と戦ってんのかよ。

「へえゝ妖怪かゝ。コスプレでもしてんのかねゝ」

「あ のっ！道楽街道に向かってください！！」

「おっ！君もコスプレに参加するのか！やっぱりいいねえ、若いって。」

「そんなことより早くお願いします。」

戦況はどうなってるんだ…

サイキSide out

奴良組と四国八十八鬼夜行との戦争は大将であるリクオが一番最初に動くという型破りな始まり方となった。そこから両軍の妖怪が真っ向からぶつかっているのである。

幹部同士もぶつかるなど両軍の総力戦だ。

リクオはゆっくりとまっすぐ、向こうの大将、玉章のところに歩い

てゆく。

ぬらりひよんの畏れで周りからはリクオの姿を認識されずただゆつくりと歩いていく。

「明鏡止水 桜」

リクオが玉章にむかって自らの奥義を発動する。

盃の中の波紋が鳴り止むまで炎は消えず対象を燃やしつくす。

「玉章様!？」

玉章は七人同行の一人の犬鳳凰を自分の身代わりにして炎を受けさせた。

犬鳳凰が燃え尽きるとリクオはまた歩み、玉章に近づく。

「オイオイ……部下を身代わりにして逃げるのか。どうも……いつまでたっても小物にしかみえねえ奴だ。このまま消してしまつてかまわねえ気がしてきたぜ」

スッ……

リクオは気付けなかった。音もなく空中から近づく夜雀という妖怪に。

「そうだ……この玉章の部下になるものは玉章のために犠牲となり玉章に尽くすのだ!……見せてやれ、夜雀」

リクオの視界は真っ暗になった。例えるなら完全なる闇の世界。

「世の理には陰と陽がある。陰とはすなわち妖怪のこと。姿を消し・
・・闇に消える・・・まさに陰の存在・・・その陰を相殺するもの・
・・・陽。陽の力を持つことで陰を消すことができる。つまり妖怪
退治とは陽の力を加えることなのだ。それが人間が生み出した陰陽
術でありおぬしがくりだした明鏡止水・桜。普通の妖怪は持たぬ・
・かつて百鬼を統一したおぬしの祖父が手にした力・・・そしてこ
の玉章が手にしている力もまた・・・」

ずっ・・・

鈍い音がする。

玉章の刀がリクオのわき腹を切り裂いた音だ

「人間はかつて陰を強く畏れた。・・・が今は世界が明るすぎると
は思わんか・・・・妖怪の存在が薄れるわけだ、奴良リクオ・・・
・変える必要がある。そして我々は再び人に畏れられなければな
らない。そうだ・・・この玉章がこの世に闇を取り戻すのだ。」

リクオが片ひざを突く。

「訊こう、奴良リクオ。わが八十八鬼夜行の末尾に加わらんかね？
悪くないと思うぞ。働きしだいでは幹部にしてやらんでもない・・・
どうだ？」

玉章の問いにリクオが静に答える。

「ことわる．．．てめえと盃を交わすと考えるだけで虫唾が走るぜ」

「そうかね．．．残念だな。ならば、君を殺して君の百鬼の畏れを得るとしよう！！」

まだうごけないリクオに玉章は刀を振り上げ、おろそうとする。

ゴオオオオオオ！！

突然、玉章に向かって炎の玉が飛んでくる。

それを後ろに下がりよけるのだがその火の玉は地面に落ちその場所に炎の柱のようなものを作り上げた。

「この畏れは．．．」

リクオが感じたその畏れは下僕であり友であり兄弟である妖怪のものだった。

サイキSide in

もう道楽街道はすぐそこだ。

ここから十数メートルぐらい離れたところにある路地を抜ければそこにつく。

「おおつと。兄ちゃん！すまねえが遅れるのはここまでだ！」

「えっ！なんでだよ！？」

「あれをみる。火柱が上がってるぜ。さすがにあんなとこいけねえよ」

あれはリクオの明鏡止水・桜・・・大将が戦ってるのかよ

「わかった！じゃあおつりはいらさないから！」

懐にある金を全部置きタクシーから飛び出る。

自分の足で走り路地を駆け抜ける。

だけど、路地を抜けるとそこには信じられない光景があった。リクオが腹を切られ片膝をついている。

その前には四国の大将だと思える妖怪が立っていた。

そしてそいつがまたリクオに刀を振り下ろそうとしている。

やばい！

ここからじゃ間にあわない・・・それなら

「炎投！」

右手に溜めた炎の玉を敵の大将にむかつて投げた。

そいつは炎投をよけるため後ろに下がった。

よし！今のうちにリクオのもとにかけよる。

「リクオっ！大丈夫か！？」

「やっぱりか・・・おせえじゃねえかよ、サイキ」

「すまねえな、リクオ。強くなってきたからいいだろ。」

周りを見る・・・うちの組のものと四国の妖怪が戦っている。
乱戦でわかりにくいが断然こっちの方が押してるじゃねえか。

「お前がムチを殺った奴良サイキか・・・やれ、夜雀」

「サイキ様！逃げて！」

この声は雪女か・・・わかってる。上から来ている妖怪。

四国妖怪・夜雀・・・遠野で雨造が話してくれたなかにいた妖怪の一人だ。

ってそんなことどうでもいい。

「おい、四国の狸。俺の名前は今日から変わったんだ。妖怪『氷炎』。それが俺の名だ！」

「フン。名など関係ない。お前の光もこれで閉ざされた・・・」

夜雀が近くまで来た。

こいつの畏れは細かな毒羽を相手の目に刺し、その毒で視界を真っ暗にするものだ。

だけど、俺には通じない

「畏れの発動・・・鬼憑、『氷炎断』！！」

ゴオオオオオオオオ！！！！

夜雀の畏れを完全に断ち切った。

毒羽も消え、これのおかげで見えなかったリクオの目も視力が戻っただろう。

畏れを断ち切られた夜雀は動けなくなり地面に落ちた。

念のため氷投で凍らせておく。

「サイキ様！・・・いえ、氷炎様！すごいですね！！お父様の畏れを使えるようになったのですね！！」

まだ形だけだな。

父さんのはもつとすごいだろ。

「な・・・なにをしたんだ。」

「これが俺の父さんから受け継いだ俺の畏れだ。お前にも味合わせようか？」

「まで、サイキ。大將は俺がやる。」

.....

「わかったよ」

こいつから感じる妖気他の四国の奴等よりは断然強いが今のリクオなら問題ない。引っ掛かるのはアイツの持ってる刀だ。なんであんなボロボロのを使ってるんだ。
とにかくリクオの邪魔にならないように後ろに下がる。

「サイキ様ー！」

「サイキ様！」

「サイキ様あ！」

「サイキ様！」

「サイキ様」

後ろから一斉に俺を呼ぶ声が聞こえる。

青に黒。首なしに河童、毛壤樓だ。

皆が敵の幹部を倒したようだ。

「あつ、今日で俺、成人だから名前変えたんだ。父さん母さんから一文字ずつとって『氷炎』だからヨロシク。」

「見ましたぜえ、サイキ様の畏れを。すごかったですね」

「みんなはもう父さんのを今まで何度も見てきてるから慣れてるだろ」

「いえ、氷虎様はあまり使わなかったの……それにサイキ様のは不知火炎の能力もありますから。」

「どいつもこいつも役に立たない奴らだね……ま……関係ないけどさ……所詮、使われる存在だからな。」

玉章は髪に刀を持たせそれを振り回した。

「お前たち……ボクのために……身を捧げろ」

振り回された刀は回りにいる四国の妖怪を切り刻んでいった。

「何をしているんだ、あいつは!？」

「味方を……斬っているのか!？」

斬ってるだけじゃない。玉章の妖気がどんどん大きくなってきてる。

「ぶはは……見ているリクオ!! 下僕の血肉でボクは魔王となるのだ!!!」

俺が前に出ようとしたとき横の路地から一人の少女が出てきた。

「リクオ、あれって」

「花開院ゆら……」

花開院は玉章の前に立ち式神を召喚する。

「待て！！その妖怪！！人を害する事はこの私が許さへんで！！」

だめだ！花開院じゃ今の玉章には勝てない。

「たんろー！ろくそんー！いくで…全式神出動や」

対ムチ戦のときにだした式神を一気に召喚する。

ドォン！！

しかし、式神たちは玉章の一閃によって瞬殺された。

「サイキ、ゆらを頼む！」

リクオは玉章を斬りに、俺は花開院の確保に向かう。

ザッ！

リクオのドスは玉章の顔を斬り、面を割った。その隙に俺は花開院を後ろから抱え込み下がらせようとする。

「死ぬぞ、お前。下がってろ」

「…………ハッ、お前は妖怪の主！ってお前も離さんか！」

「さがったほうがいいぜ、花開院」

すると、花開院が俺の顔をのぞきこむ。

「…………サイキ君？」

「……………バレた？」

ヤバイぞ

よりによつて陰陽師の花開院にはれるなんで。

「サイキ君が妖怪だったなんて……………」

「今はそんなことどうでもいいんだよ。下がるぞ。」

花開院を脇に抱え後ろに下がる。

俺が離れたあとリクオと玉章が再度ぶつかる。

しかし、今の百鬼夜行を背負っている玉章とリクオの差は歴然としていた。

ヤバイな

リクオが何度も吹き飛ばされる

ここから2人が話していることはよく聞こえないがリクオの劣勢は変わらない。

「サイキ様！ 私たちも加勢しましょう！」

「ダメだ！これはリクオの戦いだ。アイツは大将として体張ってるんだ。」

シュウウウ

リクオの体が少しだけ小さくなったように見える。

やっぱりヤバイ。

もう日が出てきた。

リクオが人間に完全に戻ったらアウトだ。

って、花開院をここにおいとくわけにはいかない。

リクオまで正体がばれちまう。

「花開院、早くここから立ち去れ。」

「な、何言つてんの！？今まで脇に抱えとったくせに」

「いいからいけ！これは妖怪同士の戦争だ。人間は邪魔なんだ。」

そつきつく言々と花開院は去っていく。

「サイキ君はウチがいつか滅したるからな！！」

いつかか………花開院も今の自分の力をわかったんだろうな。はっきり言つて今の俺なら花開院にも勝てる自信はかなりある。

「リクオ様からはなれろー！！」

やはり我慢できなかった首なしたちが玉章に向かっていく。しかし、またもや玉章の一閃により弾き返される。

「なぜ……貴様たちはこんな弱いやつについていく。」

「当たり前だろ……………」

青の言う通りだ。もう俺たちに理由はいらない。しかもリクオと玉章には圧倒的な違いがある。

「玉章……………てめえの言うその畏れ。俺たちはテメエのどこに感じろってんだ……………？てめーは刀におどらされてるだけでてめー自信は……………器じゃねーんだよ。ボクがおじーちゃんに感じた気持ちは怖さとは違う。強くてかつこよくて……………でもどこかにくめない。だから、みんなついてゆく……………あこがれなんだよ、畏れ……………ってのは」

昼と夜の血が混じっているのか……………

「そんなじーちゃんが作ったこの奴良組。サイキがいて……………カラス天狗がいて……………牛鬼が……………いるこの組を守りたいんだ」

リクオが立ち上がる

「ボクは気づいた！それが百鬼夜行を背負うということだ！！仲間をおろそかにする奴の畏れなんて……………誰もついてきやしねーんだよ！！！」

「だまれ」

立ち上がったリクオに玉章の刀が降り下ろされた

「あ？」

……………あれはリクオの畏れなのか……………

確かに刀はリクオの体を斬った。斬れてるけど、それは実体にも見えずそこにあった。

「鏡花水月」

リクオの一閃が玉章の右腕を切り落とした。

四国騒動後始末

奴良組と四国妖怪の戦争はじいちゃん…もといぬらりひよんの介入で幕を閉じることになった。

四国へ行っていたぬらりひよんが四国の八百八狸を束ねる隠神刑部狸を連れてきた。

隠神刑部狸の懇願もありリクオの『犠牲になったものを弔う』という条件で手打ちとなった。

そして今、俺には気になることが2つある。

1つはリクオが玉章を斬ったあとに夜雀が玉章を裏切り刀を持ち去ったことだ。

そして、もう1つは花開院に俺の正体がばれてしまったことだ。俺の方が実力上だから滅されるとかはないと思うけど学校行けないじゃん。あと俺が妖怪だってことはリクオも疑われるしそこんどこも何とかしないとな。

「どうしようリクオ……」

「ボクも学校に行って何とかするよ」

「ダメです!!!リクオ様はおとなしくしてください!!!」

リクオは昨晚かなり斬られてるから学校に行けそうにない

「じゃあ、つらら！学校に来て花開院を誤魔化してくれ！」

「すいません、サイキ様。そうしたいのは山々なんですけどリクオ様の世話もありますので。」

「じゃあ、青は！？」

「すいません。俺も四国の件で色々とありますんで」

ちくしょー！

もう何日も学校行つてないから休むわけにはいかないし……………
はあ。しょうがない。いくか……………

あれ、来てない？

一限目がおわり恐る恐る花開院のクラスを覗いてみるとそこにはいなく、今日は来てないみたいだ。

もしかして……………いや、まさかな……………

放課後

「サイキ、今から、清十字団の集まりあるから久しぶりに来いよー」

島が俺を呼びに来る。

そつえば清継が生徒会長になったとかいってたな。

「あー、すまん。俺、用事あるから」

やっぱり気になるじゃねえかよ、花開院。

さっきから感じる妖気。なにかと戦ってるような感じだ。四国妖怪はもう帰ったから違う。あるとしたらうちの妖怪。

学校をでて妖気の動く方へ走る。あんまし遠くないから数分で着いた。

思った通りだ。

そこには妖怪三体と花開院がいて戦っていた。まだどちらもやられていないようだ。

「まて！」

妖怪化して近づく。

「お前ら、奴良サイキを知ってるか？」

俺の問いに妖怪の一体が答える。

「もちろんしってるさ。昨晚の四国戦では活躍されていた」

こいつらが奴良組なのはまちがいないけど俺の顔知らないのか？

「俺は奴良サイキだ。お前らはもういいから帰れ。」

「サ、サイキ様！？こいつ手練れの陰陽師ですよ！」

「わかってる。そいつは俺がやるからお前らは早く帰ってる。」

そう言うところ人は本家のほうに帰っていった。

「サイキ君、私を殺しにきたん？」

「いや……………今日は話をしにきた。」

「妖怪と話すことなんて何もない！」

「言っておかなきゃお前、誤解するだろうからさ。リクオのこととか」

「誤解なんてない！サイキ君は妖怪だった！だから、リクオ君も妖怪なんやろ」

「だから、それが誤解なんだよ。いいからここすわって話しきけ。」

花開院を河原に座らせる。ここは素直だなあ。

「まず、俺は妖怪だ。それは認めよう。でもお前も知っての通り人間の姿もある。というか妖怪になったのは数ヶ月前だ。なぜか知らんがそれまではずっと人間として生きてきた。」

「でも、妖怪なんのはかわりないやろ！兄弟ってことはリクオ君もおじいちゃんも…」

今まで言ってきたこと本当のこと。ここから嘘。

「そこなんだ。実を言つと俺、養子なんだ。だから、リクオたちとは血が繋がってない。」

「嘘やろ、それ。」

なぜ、ばれる！

「う、嘘じゃねえって。生まれてからずっと人間だった俺に愛想が尽きた両親が俺を捨てたんだよ。それをじいちゃんが拾ってくれたんだ。」

嘘だけど

「そうなんや。でもサイキ君が妖怪であることに変わりはない。絶対いつか滅したるからな。」

「いつかなんだ」

「……………今のうちじゃ勝てる気がせん。うちはこれから修行する！だからいつか絶対めつしたる！！」

「おう、いつかな。それじゃあ」

さて、かえるか

「……………サイキ君は本当に妖怪なんやな……………」

「だから、そうだって言ってるだろ。俺は妖怪でお前は陰陽師。敵だ。まあ友達でもあるけどな。友達としてならいつも一生懸命な花開院、好きだぜ。」

「な、なに言ってるねん！早く帰らんと滅するで！！」

……………これで当分は大丈夫かな。

呼び方と盃（前書き）

遅れました。すみません

呼び方と盃

花開院に会った次の日、今日も学校なんだけどやっぱりリクオは行きたいと言った。いくら、妖怪の血がはいってて治りが早いからってまだ無理そうだ。

1人で学校に行って教室に入るとすぐにカナが詰め寄ってきた。

「サイキ君！今までなんで休んでたの！？昨日忙しそうでなにも話してくれなかったし！」

昨日は花開院を警戒してたからなあ……って俺、風邪で休んでたはずじゃ……

「先生は家の都合って行ってたのにリクオ君は学校来てるのっておかしいよ！」

「ええっと……俺にしかできないことだったんだよ。俺のほうがリクオよりがたいいいじゃん？だから、俺が選ばれたんだよ。」

「……なんかあやしいなあ」

「気にしない、気にしないっ！もうすぐ先生来るぞ！」

そういつて強引に話を終わらせて自分の席に向かった。

その日の授業が終わり、帰途につく。やっぱり花開院は来てないか……リクオもいないから清十字探偵団に行く理由もないから帰るか。

家に着いたがいつもと代わり映えのしない光景。四国騒動が終わり奴良組も元通りになった。変わったことといえば、組員が少しばかり増えたことだけだな。四国との抗争に価値リクオの名も多少広まり加入したいというものが増えたのだ。

「ただいま」

「お帰りなさいませ、サイキさ……氷炎様」

昨日もただよくこういうことがある。

廊下を歩けばよくちよく挨拶されるが先日改名したばかりだし妖怪のときはとか紛らわしいことだったから戸惑っているんだろう。つららには前に一番最初に話したから家ではサイキと呼ばれてる。まあ、基本は今までどおりサイキでいいんだけど妖怪として表に出るとき、まあ出入りのときとかは氷炎がいい。

「家では今までどおりサイキでいいよ。氷炎は出入りのときとかだけでもいいから」

はい！と元気よく返事した新入り妖怪は自分の仕事があるようで小走りで奥へと向かっていった。

俺はというと自分の部屋に行き、着替えてからリクオの元に向かった。今日の宿題とか渡さなくちゃいけないし。というかリクオが絶対持ってきてというから・・・

「リクオ宿題だぞー」

「ありがとう、サイキ。今日の学校はどうだった？」

そんなに気になるのか・・・

「今日も花開院は来てなかったぞ。あとカナへの対応が大変だった。」

「今日もって昨日も休んだの！？どうしたんだろう？」

「あれ？言わなかったっけ？今、特訓してるって」

「聞いてないよ！」

マジか・・・昨日の夜に言った気がするんだけどなあ

「リクオ様、お茶が入りましたよ・・・サイキ様お帰りになってたんですね。今、お茶をお持ちしますね」

つららがリクオのお茶を持ってきた。

「いや、おれはいいよ。のど渴いてないし」

「そうですか・・・それよりサイキ様。先ほど陰陽師や家長の名前が聞こえましたが、な、に、が、あったのですか!？」

聞いてたのかよ。

しかもなんか黒いオーラ出してるぞ、つらら。

「い、いや。なんでもないぞ。きにするな。」

「そうですか・・・それならいいのですが・・・あつ!そういうばサイキ様ってリクオ様と盃って交わしましたっけ?私や青や黒、首なしに河童はもう済ませましたよ。」

「・・・忘れてた。マジ、一生の不覚だ。こんな大事なことを忘れてたなんて

「つらら、酒もってこい。リクオ、今から盃交わすぞ!」

「え!?!今から?」

「そうだ。善は急げだ。俺が一番最初にしたかったのになあ」

こうして俺はリクオと七分三分の盃を交わした。
一生リクオについていく。

リクオの百鬼夜行でリクオのすぐ後ろに並びともに戦っていくことを誓って

父の話（前書き）

一応過去編です。

でも、出るのは題名通りお父さんだけでお母さんは今回出てきません。

父の話

俺はリクオと盃を交わした。これで俺は完全にリクオに忠誠を誓ったことになる。もちろん今までもそうだったがこれからはもっと精進して強くなるつもりだ。

先日の四国騒動の際に俺は今までは四国妖怪に勝てないと判断して遠野に行き父さんから受け継いだ『鬼憑』の『氷炎断』を習得した。これは畏れをもって畏れを断つものなのだが俺は敵の畏れを断ち切って、動きを止めるだけだ。イタクみたいな鬼憑の強力な技は持っていない。でも、父さんは畏れを断ち切りさらに技を持っていると思う。俺もそれができるようになればさらに強くなれると思う。

そのためには父さんの畏れを実際に見たことがある誰かに話を聞かないな。

だれにすっかな……………

じいちゃんは一さっきどこかに出掛けてったから……………牛鬼はいないから鴉天狗か木魚達磨かな。

「サイキ様ー！」

部屋からでようとしたとき鴉天狗が全速力で部屋に飛び込んできた。ナイスタイミングじゃん

「総大将がどこにいかれたか知りませんか!？」

「行き先は知らねえよ。それより鴉天狗に聞きたいことがあるんだ」

「聞きたいことですか、サイキ様？」

「ああ、父さんのことだ。俺の鬼憑をもつと強力なものにしたいんだ。そのためには父さんの鬼憑を見たことのある鴉天狗に話をききたいんだ。」

「わかりました・・・それでは少し昔話をしますかな。」

時は日本史でいう戦国時代

戦乱の世とよばれ、人間は多くの戦をしてあまたの命が散っていった。

そして、妖怪も自らの力を示すため、自分の島を広げるために戦っていた。

そしてここにも数多くの妖怪を率いる妖怪、ぬらりひょんがいた。

まだ100歳程度だが急速に力を伸ばし組も急激に成長した。

数年前には掬目山に住まう武力集団『牛鬼組』を倒し従えさせ、その勢いは上り調子である

そして今奴良組は今後どのように動くかを決める会議をしていた。

「総大将、次はどこを攻めるのですか？」

「そうじゃのう……牛鬼の掬眼山までの奴らはだいたい倒すか従えるかしたからのう。このまま一気に京、大阪に行くか」

バンッ！

牛鬼が畳を叩き音が響く。

「総大将！あそこに行くにはまだ早いです！あそこには羽衣狐がいるのですよ！」

16世紀末期、豊臣秀吉が天下をとりその側室の淀姫に大妖怪、羽衣狐がとりついていてるのだ。とりついた人間の寿命で死ぬが、何度も生まれ変わり妖怪を率いてきた。羽衣狐の妖怪はいつもも相当な力を持っているものばかり、余程の戦力がないと戦いを挑むなど考えないところだ。

「おもしれえじゃねえの」

「やってやろうぜー！」

牛鬼の反対を気にすることなく関東大猿会の会長、ひひを筆頭に大阪に攻め込もうという意見がたくさんでる。

「私も反対ですな。牛鬼の言うとおり、大阪に入るにはまだ時期尚早かと。もう少し力を溜めてからにするべきかと」

「木魚達磨がそこまで言うなら・・・そうだなあ。新しい仲間でも探すか。だれか心当たりのある奴はいねえか」

先ほどまで騒いでいた一同が一気に静まる。そしてゆっくりと牛鬼が手を上げる。

「心当たりがないわけでもない。むしろ、強さだけならこの場にいるもの誰も勝てないだろうな。」

「ム・・・それほどのものか？」

自分の組のものに言われてぬらりひょんは口をつむぐ

「名は氷虎。年はまだ20にもみたないが、畏れを完全に習得している。そして、奴は元京妖怪だ。」

「ふん。私と同じ氷結系の妖怪か。でも何で元なの？」

雪女のせつら。

後のつららの母親である。

「生まれてすぐ才能を開花させた氷虎は京妖怪の中でも有名になっていった。しかし、あることから羽衣狐と陰悪になり争いを避け琵琶湖まで逃れてきたのだ。だから、集団でいるというのがあまり好

きではない。私も組に誘ったのだが断られた。」

「気に入った！うちの組に入れるぞ！」

「総大将！そんなに簡単に決めていいんですか！？」

「まあ、あってみないとわからないが気が合いそうだ。」

こうして奴良組は近江の国、琵琶湖沿岸へと向かった。

父の話 弐（前書き）

なんか会話が変かも……

父の話 貳

滋賀県の琵琶湖沿岸

日本で一番大きな湖として知られている。

月が水面に映るころぬらりひょん率いる奴良組がそこまで来ていた。

「ここが琵琶湖だな……ん？凍ってる？」

「妙ですな、総大将。今はそのような季節ではないのに」

鴉天狗の言うとおり今は冬ではない。

なのに、琵琶湖には厚い氷が張られている。

「はあ……またやっているのか」

牛鬼が深いため息をつく。

「どうしたんじゃ、牛鬼？」

「総大将、きになさるな。この氷は氷虎が張ったものだ。あいつはときより、琵琶湖に氷をはりその上をすべっているのです。」

「ほう……面白い奴じゃのう。」

すると向こうのほうからぬらりひょんと同じぐらいの背丈の男がこちらに向かってきた。

「さあ、いくぜ！16世紀最大の7回転ジャンプ！」

氷虎は岸に向かって勢いよく回転ジャンプした。そして、宣言したとおり七回転ジャンプを見事成功させ地面に着地した。それにぬらりひょんは拍手をした。

「すげえじゃねえか、氷虎」

氷虎は目の前の妖怪の大群に一瞬、鋭い目つきになるが牛鬼を見つけた瞬間笑顔に戻る。

「あんたは牛鬼が言ってた、ぬらりひょんか。江戸の任侠一家が俺に何の样だい。」

「そうだな・・・単刀直入に言う。氷虎、ワシの組に入れ」

「いいぞ」

即決。

ぬらりひょんの言葉のすぐに氷虎が答えた。

「あらら・・・こんな簡単にいっちゃったじゃない、牛鬼。」

「・・・いいのか、氷虎。お前は羽衣狐との一件以来、仲間との行動が嫌で、ここで一人で暮らしていたのではなかったのか？」

「そうだぜ、牛鬼。入ってもいいって言ったけど、それは総大将の・

・・・ぬらりひょん次第だ。羽衣狐とのがあつて、俺は仲間を作るのが怖くなった。でも、原因は羽衣狐たちと俺のうまが合わなかっただけ・・・本当にいい組ならちゃんとやっていける。これは俺の我が儘。組に誘ってもらつておいて言える立場じゃないんだけど、ぬらりひょん・・・俺と戦つてくれ。」

氷虎は自分の過去を捨てるため新しい仲間に出会つたために戦う。まだ若く、凶暴な妖怪がたくさんいる京で生まれ育つた氷虎には戦うことでしか相手の思いを完全に理解できないのだ。

「わかった。お前が言つのなら戦う。」

組のものは反対しない。それは総大将が決めたことであり、彼がいっつもより真剣だからだ。

そういつて、ぬらりひょんが獲物を構える。

「ありがとう・・・じゃあ、遠慮せずに行くぜ！」

氷虎が地面に手をつく。

するとそこからぬらりひょんに向かって氷の道ができ足元まで達したところで、その氷から巨大な氷柱が出る。その鋭い先端はぬらりひょんの体を射抜こうとする。

しかし、それはぬらりひょんがドスで破壊する。

「おもしれえ、畏れだな。お前、セツラよりは強いな。」

「ん、名前で呼ぶなーッ！」

「うるさいぞ、雪女」

「あ、あんたこそ、う、五月蠅いわよっ！鴉天狗！！」

『お、おい。鴉天狗を雪だるまにするな!』

後ろからセツラが叫ぶがぬらりひょんは気にしない。

「面白いな、お前の組は。」

「まあな。毎日、あきねえよ……じゃあ、俺も本気で行くぜ。」

ぬらりひょんがゆっくり、氷虎にむかって歩き始めた。
ここから妖怪の『畏れ』の戦いが始まる

「明鏡止水!」

氷虎の視界からぬらりひょんの姿が消えた。

ぬらりひょんも畏れ。相手に自分を認識させなくするものだ

「見えない……これがぬらりひょんの畏れか……『氷断』!」

氷虎畏れ、『氷断』。相手の畏れを断ち切り動きを止め、さらに技を繰り出し敵を倒すもの。

だが、『氷断』はぬらりひょんの恐れを断ち切れていなかった。

シュッ!!

ぬらりひょんの攻撃を間一髪ところで避け、ドスが空を切る。
いきなりぬらりひょんが氷虎の前に現れ攻撃してきたのだ。もっとも、今まで単に歩いてきたただだが。

「さすが、牛鬼が認めた奴じゃ。」

「次は当てるぜ！」

後ろに跳び下がってからぬらりひよんはまた姿を消す。

「氷断！……」

また氷虎が氷断をする。

先ほどより強い力で放ったがまだぬらりひよんの姿は完全に現れない。

だが、氷虎は今のだけで十分だった。

今ので、大体だがぬらりひよんのいる方向がわかった。

「……氷断・集！」

そのぬらりひよんがいる方向に右足を一步踏み出した。

すると先ほどの全方向にはなった、氷断と違い足を踏み出した方向だけに一直線に畏れが放たれた。

ゴオオオオオオオ！！

ぬらりひよんの畏れが断ち切られた。今の氷断は先ほどの全方向に向けられたものと違い一方向に集中して放ったものだ。そうすることによって畏れの強さが何倍にも膨れ上がる。

畏れが断ち切られたぬらりひよんは動けない。

氷虎はその隙に自らの畏れの鬼發の『氷造』で氷の刀を作る。氷と

いつでも強度、切れ味とも普通の刀以上だ。

しかし、この刀はまだ使わない。先ほどの氷断からの次の攻撃として、最初に見せた氷柱がぬらりひょんを貫こうとする。だが、またその攻撃は当たらなかった。いや、実際氷柱は体を貫いていたのだがその後、ぬらりひょんの体は消えていた。

ガッ!!

氷虎が気づいたとき、ぬらりひょんは後ろにいてドスを振り下ろしていた。

ドスは氷刀で防がれた。

「本当にお前の畏れは面白いな。」

「主こそな」

今のはぬらりひょんの畏れの鬼憑『鏡花水月』だ。

大まかにいえば相手の認識をずらす。

わかりやすく言えば幻影を作るということだ。

ドスと氷刀がぶつかるがすぐに二人は距離をとった。

「強いな、ぬらりひょん。よし、奴良組に入るぞ!」

氷虎は氷刀を消す

「ん? もついいのか?」

「ああ。組の雰囲気もいいし、大将がいいからな。これだけ戦えばなんとなくわかったよ。それに琵琶湖の魚も飽きたしな。」

ぬらりひょんも自分の獲物をしまう。

「ハハハつ。歓迎するぜえ、氷虎。盃を交わそう。」

こうして氷虎はぬらりひょんと盃を交わし奴良組の一員となった。

「しかし、氷虎。本気で戦うといっておいて本気を出していなかったじゃろ。」

「あれ、気づいてた？」

「ああ。牛鬼が言うにはこの奴良組で勝てる奴はいないらしいからな。」

「そんな大げさじゃないって。まあ、まだ隠し玉はあるけど、それを使う前にお前のことがわかったから。」

「そうか……なあ、一つ聞きたいことがある。」

魚をつまみに酒を飲みながら話す。

「なんだ？」

「ワシはもう直に京に入る。そうすれば羽衣狐とぶつかるだろう。そのときお前はどつする？」

ぬらりひょんの問いに氷虎はすぐに答えた。

「戦うさ。俺は奴良組の一員だから。総大将・・・お前についてくよ。今日妖怪との因縁も断ち切るのにいい機会になるし。でも、あいつは強いぞ」

「わかっておる。氷虎でも勝てないか？」

「俺か？戦ったことないからわかんないけど倒せたとしても、あいつは転生するからその後が怖いんだよな。・・・まあでも大丈夫だ。何とかなる！」

「そうじゃの。・・・それにしてもこの魚はうまいの・・・」

それから数ヶ月後、奴良組は京にはいった。

時間はもどり現代

「まずはこれぐらいですな。氷虎の最初のエピソードは……」

すごいな……。本気を出さずにじいちゃんと互角って。

その本気も知りたいけど『氷断・集』は使えるな。

アレをできるようになればさらに強い奴とも戦えるし、その後の攻撃の仕方とかで戦い方のバリエーションも格段に増える。

よし、また特訓するか。今度は時間はあることだしゆっくり、きちりやっこう。

「ありがと、鴉天狗！俺、特訓に行つて来る！」

ということとで部屋を飛び出し玄関に向かう。

やる気でできたあ！花開院も特訓やつてるんだし、俺もがんばろう！

父の話 貳（後書き）

とりあえず過去編終わりです。

次はまたオリ話やって、その次に原作通り邪魅編、竜二たちがやってくる話をやります。

それが終われば四百年前のあの話で羽衣狐とのバトルです。

旅行に行く(前書き)

最後の終わり方変です！すいません！

旅行に行く

鴉天狗から父さんのことを聞いてまた修行を開始した。

だけど、今回は前ほど多くない平日5日のうち2日ほど放課後にと休日の2日間だ。

理由は3つある。

まず、俺が遠野に行っている間に清継が生徒会長になっておりさらにやる気を出したということだ。この前の四国戦を清継自身が見ることができなかった悔しさもあるらしいが。

2つ目は四国戦の時ほど急ぐ必要がないことだ。

あのときはいつ四国との戦争が勃発するかわからない状況だったから早く力がほしいと思ってたけど、今のリクオからして当分大きな戦いどころかそんな機会があるかどうかだからじっくり、ゆっくり修行して確実に力をつけていこうとおもう。

そして、3つ目の理由としてつららが『一人で無茶して大怪我でもしたらどうするんですか！？』というからだ。

今日は特訓をする土曜日なのだが現在俺は東北新幹線の中にいる。

東北ということだとわかんと思うが目的地は遠野。

遠野のあいづらがどう思っているかはわからないけど、俺は今回のことでそれなりに恩を感じている。

だから、礼の一つでも入れに行く。アポはとつてある。遠野の地は修行にも適してるからそれもしてくるし、あの露天風呂にももう一度入ってくる、いわゆる旅行的な感じの……つまりなんだが。

「緊張しますね〜。遠野って私、雪女の祖先の土地でもありますし楽しみではありますが、3Gとも言われてますしね〜」

つららがついてきた。

つららはお供は絶対に必要！ということで別にダメじゃないんだが、旅行が楽しみという感じのほぅが強い気がする。

「つらら、そんなに楽しみか？」

「はい、もちろん！サイキ様との旅行ですし！」

「旅行っていつでも観光するわけじゃなし、ただ世話になった奴らと酒飲んだり、修行したり露天風呂に入ったりするだけだぞ」

「それでも楽しみですよ！温泉もあることですし。」

ふう。飲みかけコーヒーを一口、口に入れる。

「そついや、つららって母さんが遠野出身だったってことは知ってたの？」

「はい。不知火炎様とはよくお話してましたし。私の母さんとは犬猿の仲みたいでしたけどね。」

そうなのか。

つてか母さんっていつ奴良組に入っただ？鴉天狗の話だと約40年前、16世紀の終わりに父さんが入ったときにはまだいなかったみたいだし

「母さんがいつ奴良組に入っただのかは知ってるか？」

「詳しい時期はわかりませんが江戸の時代に入る前とのことですよ」

ということとは父さんのすぐ後ってことかな？
じゃあこれは・・・

「じゃあ、父さんが京妖怪だったってことは知ってるか？」

「そ、そうだったんですか！？京っていえばあの羽衣狐の・・・」

「ああ。つららもそこまでは聞いてないみたいだな。父さんは・・・」
「」

つららに先日鴉天狗から聞いたことを簡単に説明する。

「ということらしい・・・そういえばそれからのこと聞いてなかったんだよな。あれから京に行くらしいし」

「あつ、思い出しましたよサイキ様。不知火炎様はその京入りのときに遠野から用兵として呼ばれて、そのまま組に入ったんですよ！その理由は氷虎様に惚れたからなんです！！」

遠野の妖怪は他に属さず独立独歩貫き続けて来たんじゃないのかよ。
・・・あ、でも赤河童がいつも好き勝手やってるっていったよな。

「でも、俺生まれたの13年前だぜ？400年前に母さんが父さんに惚れたのなら俺はもっと早く生まれててもおかしくないだろ」

「それはですね・・・お二人とも素直になれなかったんですよ。相手を好きだというお気持ちがありながらも素直になれず約300年もの間気持ちを伝えられずにいたのです。そしてサイキ様をご出産なさるところまで行くのにさらに100年もかかりました。あ

あ、素敵ですね・・・妖怪だからこそありえる何世紀の大恋愛ですよ」

ははは・・・冗談だろ。

父さんも母さんも恋愛ことには弱かったのか・・・

と、こんな感じで父さんと母さんの昔話を聞きながら数時間が過ぎた。

岩手県に到着しさらにタクシーで遠野の里の付近まで行き徒歩で妖気の結界のところまで行く。

「つらら、もう元に戻っていいぞ」

つららは人間の姿からもとのあやかしの姿に戻る。

俺も妖怪の姿になる。

面倒だ。

ここに入るときは畏れを断ち切っていかなければいけない。

まあ、たいして難しくはないからいいけど

「鬼憑・・・氷炎断!!」

妖気の壁が勢いよく割れた。

「さあ、行くぞつらら」

「はい！サイキ様」

屋敷に向かって歩く。道は微妙にしか覚えてないがなんとかなるだろう。

しばらく歩いていると前方から見覚えのあるシルエットがやって来る。

あの特徴的な形は………雨造だな。

「よー雨造。久しぶりだ」

「おっ！サイキー……じゃなくて氷炎か。そっちのは奴良組のか？」

「はい。雪女のつららです。サイキ様がお世話になりました。」

なんかそれ夫婦みたいな会話だぞ、つらら。

「ギャババ。世話になったのはこっちもだしよー。それで、今回はどうしたんだ？」

「ああ。一応特訓のおかげもあって四国を簡単に倒したからその礼に関東の酒もって来たのと、ここなら修行もやりやすいからそれもやりにきたって感じた。」

「そうかー。じゃあ屋敷に行こうぜ。これから昼時だからまだみんな集まってるぜ」

「赤河童、あの時は世話になりました。」

遠野のみんながそろってる中でつららとともに赤河童の前に座り、礼を言う。

「別にこなくてもよいものを・・・」

「妖怪仁義って奴ですよ・・・これは関東の酒です。どうぞ」

酒を出した途端にやつきやがった。

酒、好きだな

「おお。いいものを持ってきてくれる。久しぶりに地酒以外のものも飲みたかったところじゃ」

「じゃあ、俺は実戦場借りるぜ。いくぞ、つらら」

「はいっ」

挨拶も軽く済ませ、実戦場で特訓を開始する。途中からイタクたちも付き合ってくれたのでなかなかやりがいがあった。

ただ、ひたすら特訓をしたけど父さんの『氷断・集』がまだできないでいた。

あれができればイタクの鬼憑も断ち切ることができると思うんだが・
・
・

旅行に行く（後書き）

誠に申し訳ありません。現在学校の勉強がおろそかになりすぎ、やばい状態になりました。小説を書く時間があまりとれなくなっています。ですので、しばらく休載ということになります。時間があれば少しずつ書いていくつもりなのでたまに投稿されているかもしれませんが。

邪魅の漂う家 壱（前書き）

久しぶりの更新です。

これからも更新遅いかもかもしれませんがよろしく願います。

邪魅の漂う家 壱

暑い夏は外には出ず家の中でゆっくりしていたいのだが…

あの妖怪好き野郎の清継があんなことを言い出したせいで……

学校で1学期最後の試験が終わり夏休みがすぐそこまで来ていた。

俺はまたリクオに付き合わされて清十字団の部室へやって来ていた。

「さあて！期末テストも終わってウキウキだねええ」

ウキウキかあ…………

まあ試験が終わってくれたことはよかったよ。

なにせ、勉強なんてリクオに付き合わされてるだけでヤル気ゼロの俺だから曰頃、まるで勉強してない。

だから、試験もできるはずがなく白紙で提出したら教師に呼び出される。無視しようと思ったけど、家に連絡されて、母さんに迷惑はかけれないからとりあえず説教を受けたりして面倒だった。

「それはさておきこれを見てくれ!!」

「何これ?『妖怪ハンター 清継くんへ』!?!」

清継がいつも持ち歩いているノートパソコンを一同に見せる。その画面には今、巻がよんだ題名のメールが映っていた。

『妖怪ハンター 清継へ』

清継くん!助けて!!

私の家に妖怪が出るの!

夜になると枕もとに立つのよ!!

お被いしても何をやってもだめなの
詳しいことなんだけど……

~~~~~

・・・ていうことなの。  
お願い・・・数多くの妖怪をハントしたという清継くんしか頼れないのよ!!

・・・よく読んでないんだがこんな内容だった。  
妖怪が枕もとにねえ？  
それにしても・・・ぷッ！妖怪ハンターって・・・3年前のガコゼの事件から一回も妖怪を見てないのによく言うよ。

「まさか・・・この子助けに行くの？」

「悪戯かもしんないじゃん？」

「その心配はないさ。この地域に伝わるとある伝説とも符合する部分も多いしね。」

それは妖怪として興味深いな。

「それでその妖怪の名前は？」

「ちゃんと読んでなかったのか、サイキくん。妖怪の名は邪魅だよ。」

たしか雨蔵から聞いた妖怪の中にいたな。

それならもういいか。

本物見てみたいって気持ちはあるけど暑い夏は外出たくないんだよな。

妖怪の力で体温は調節できるけど雰囲気かな・・・浮かれた人間が調子のもてりしてウザいんだ。

まあ、リクオが反対してくれるだろうし、俺が行くことはないだろう。

「だめだよ！危ないよ、妖怪退治なんて！」

「僕がいるから安心だよ。それに、調べたけど人に危害を加えるような妖怪じゃないよ。」

「でも・・・」

「うーん・・・でももう返事をしてしまったんだ。」

おい、まで・・・そこは同意を得てからにしろよ。

でも、まだ巻たちもたいして行きたそうじゃないから、反対派が多いはず。

島はしょうがないとしても、リクオはもとから反対。カナは妖怪嫌い。花開院は学校にすら来ず、特訓してるからない。つららは俺もリクオも反対派なのだから行く理由がないだろう。

「そんな・・・貴重な休みがあゝ」

「そこには海がある。」

「さすが清継くん。」

「ハイハイ、行きます！」

何！？巻と鳥居が落ちた！

「家長くんは行くよね？」

「うん。みんながいくならいよ」

カナまでもか・・・

「しょうがない・・・僕も行くよ！」

は！？何故リクオが・・・

「ハイ！私も行きます！」

つららめ・・・リクオが行くからか。

確かに先の四国戦でリクオの名は多少なりとも広まっただろう。

だから、護衛の一人は付けておいた方がいいけどこのままじゃ俺も・  
・・・

「サイキ！」「サイキ様！」

リクオとつららが同時に俺に『行こう！』という目線を向けてくる。

「はあ、俺も行くよ」

これはもう、行くしかないだろ。

まだ着かないのかよ。

石畳で舗装された並木道を歩いて早数十分。

テンションの高い清継とそれに便乗している島を先頭にたまたま二人ずつの組になって歩いている。

巻と鳥居、リクオと力ナ、俺とつららだ。

そして、つららもまたテンションが高い一人であった。

「サイキ様とりよっこおー。サイキ様とりよっこおー」

つららが賛成した理由はこれである。

ちなみに、リクオは自分ひとりじゃなにかあったときにみんなを守れないかもしれないからだ。

「旅行って言ったって、この前よりかマシだと思っけどたいして、観光とかはないと思うぞ。清継は妖怪退治にしか興味ないみたいだし。」

あいつのことだ。

今回のをあの高いテンションのままで、だが自分は何も見たりしないままリクオが俺が片づけてしまって、終了だけそのあと、また

新しい計画をやるうとするつもりだ。

「それでも、いいですよ。サイキ様と一緒にいられるだけで私は幸せですから……。って、すいません！わたし、また失礼なこと行っちゃいましたっ！」

「失礼なことではないだろ。つららに俺と一緒にいて幸せって言われても悪い気はしないし、人間のときは俺たち恋人関係なんだからそういうの周りに聞かれても疑われずに済むし。敬語なのはあれだけだ。」

「悪い気はしないって……。サイキ様ってば……」

つららが顔を赤くしているけどどうしたんだ……。こいつが熱があるわけないし。

「でも、俺ってリクオと盃交わして主従の関係になったけど、あんまり関係変わってないよな」

リクオにもいつも言っではいるんだけど、盃を交わす前と俺への接し方が何一つ変わってない。前と同じ普通の兄弟のように接してくる。兄弟といっても年も変わらないから兄、弟関係ないけど。

「そんな急には変わりませんよ……。いえ、これからもずっと変わりませんよ。サイキ様とリクオ様は幼少のときからずっと兄弟として育ってきたのですから。」

「そうかなあ……。それと、リクオとかのほかに組のみんなも変わらないの接し方だよな。やっぱり、養子を破棄してないからか……」

前、リクオと盃を交わしたら養子も破棄して一妖怪として奴良組に、リクオに仕えようとか思ってたし、つららにも話したんだがけど、まだじいちゃんにも誰にも言っていない。

「そのことなら、もういいんじゃないですか？主として、そして弟としてリクオ様に仕えれば良くないですか？」

たしかに、その考えもあったな。  
まあ……それで、いつか。

「そうだな、それでいいこう」

簡単に考えを変えてしまった俺であった。

街に入るとそこは都会では見られない風情ある所だった。  
依頼主の家は中でも大きな塀に囲まれた屋敷だった。  
さすがに奴良組のよりは大きくないようだが。

「依頼主の菅沼品子です。来てくれてありがとう……でも大丈夫

かしら、一応は期待しています。」

挨拶もそこに髪をサイドで三つ編にして眼鏡をかけている菅沼品子が俺たち敷地内に招きいれようとする。

ザアアアア……

妖怪！？

突然現れた妖気に気付き後ろを振り向く……

「……その娘に近づくな」

その瞬間、妖気が消えそこにも誰もいなかった。

「サイキ、今……」

「リクオも感じたか。今そこに妖怪がいた。多分、邪魅なんだろうけど……」

『その娘に近づくな』か……



邪魅の漂う家 壱（後書き）

邪魅編っていつでもあと一話だけです。

## 邪魅の漂う家 弐（前書き）

今までで一番長くなった気が……  
なんか最後プツリとキレた感じになった気もしますが気にしないで  
くれたらありがたいです。  
これで邪魅編終了です。

## 邪魅の漂う家 弐

「お？お邪魔します・・・」

廊下をぬけ、部屋に入ると天井、壁の一面に大量の札が貼られていた。

そこは、菅沼品子の部屋で、神主がいた。

この、神主が大量の札を彼女に渡したのだろう。

「ここよ、昨日もここに出て・・・私に覆いかぶさるように私をじっと見るの」

「覗き込むだけなんだね？」

確認のために清継が聞く・・・が、

「これを見て・・・昨日はこうして跡がつくまで強く握られたの！」

包帯がとられた右腕には強く握られたような跡があった。

さわってくるのか・・・

「ちょっと・・・話が違っじゃなかー！？」

「危害加えてるじゃないのー！！ゆらちゃんはなんで来てないのー！？」

「花開院なら陰陽術の特訓してるぞ」

多分、あれからまだずっとやってるだろうな

「そんな」

「な、なんでサイキ様がそんなこと知ってるのですかあゝ！？」

巻や鳥居は本当に怯えてるようだ

「それは、会って話したから・・・」

「それは・・・偶然ですよね・・・サイキ・・・さま・・・」

「あ、いや…たまたま会ったんだよ。」

つららの目が怖い・・・花開院を見つけたのは偶然だ・・・話さなくちゃいけないことはあったけど・・・

そんな修羅場に発展しそうな俺たちをほっというて、管沼品子が悲痛の面持ちで再度口を開いた。

「もう次は・・・何されるかわからない。私・・・怖いんです。お願い・・・邪魅から守って！！」

彼女の必死の願いにみんなは静かにうなずき神主も交え邪魅に対してどうするかを話し合った。

話し合った結果、今日は女子が管野品子の部屋と一緒に寝ることになり、男子は廊下で見張り役になった。

「何かあったらこいつで連絡取り合おう」

と清継が取り出したのは呪いの人形だ。

「君たちにも先日、あげただろ？」

「うん、ここにあるけど」

「おう、家にあるけど」

「サイキくん！なんで君は持ってきてないのかね！こんな時に使わずしていつ使うというのだ！」

いや、あんな気色悪いのを持ち歩きたくないだろ。

「もうちょっといいデザインはなかったのかよ」

「何を言うか！すばらしいデザインじゃないか・・・それよりも・・・今晚会えるかもしれない！！あのおふた方に！邪魅は昔からこ

の地に伝えられてきた妖怪。実際に被害も出ているしあのお二方ともつながりがあるかもしれない！」

だからここにいるんだよねー

まあ、清継は霊感ないから無理か

「いたっ・・清継くんうしろー!?」

リクオが叫ぶ

俺も振り向いたところ一瞬人のような影が廊下の角を曲がっていくのが見えた。

「なにイー、どこだー!?」

よし、俺が行って邪魅の正体をみてやろう。

そのためには、清継たちが邪魔だな。

「清継!、島! 奴は部屋の方に行ったぞ! 俺とリクオは念のため、こっちの方を見てくる」

「わかったぞ、サイキくん! さあ、行くぞ島くん」

リクオとともに廊下を走る。

「サイキ、邪魅が部屋の方に行ったなら僕たちも行かなきゃ! みんなが危ないよ!」

「心配すんな! あれは嘘だ。さっき見た影はまだこっちにいるはずだ。俺が妖怪化して一気においつめる。そのためにはあいつら邪魔だろ」

リクオと一緒に廊下を走る。

「うん、でも、今の奴… 昼間見た奴と違うような…」  
「違う？ どういうことだ？」

とにかく追うしかない…  
廊下の角を曲がったところで妖怪化しでその影との距離を一気に詰める。

その瞬間、影が方向をかえ、俺の方に突っ込んできた。

「ちッ！ 炎鞭」

右手から出した炎の鞭で影を貫くと、その影は消えていった。

消えた？ なんだ、今の感覚は……こいつは……妖怪じゃない！？

「サイキ！ さっきの影は？」

追いついてきたリクオ

「ああ、炎鞭で貫いた。そしたら消えたよ」

「消えたって……もしかして」

リクオも何かに気づいたようだ。

「ああ、こいつは邪魅なんかじゃ……妖怪でもない」

「うん…妖怪じゃないとしたらこいつはいつたい……」

ある程度予想はつくけど証拠がない。なにか… なにかないのか

「ん？これって…」

リクオが壁に張り付いている何かを見つけた。それは小さな紙切れでなにか模様が書いてあるようだ。

これは……まさか……

「リクオ、この邪魅騒動は意外とはやくケリがつくかもな」

翌日、清継の提案で昨日の神主の神社に来ていた。

「そう… また出たのですか…… 邪魅には本当に手をやかされる」

「神主さんは邪魅のことをよく知ってるんですね！」

「もちろん… 昔からそうだった邪魅騒動の話が多いんだよ、ここは」

「え？じゃあ昨日はお化けもなにかお話があるんですか？」

カナは昨夜、妖怪を見たらしく神主にそれを聞く。

「うむ…昔この町が秀島藩と呼ばれていた頃、大名屋敷があつてね。そこにまつわるいまましい伝説があるんだ………」

神主が邪魅にまつわる話を語りだした。

そこには名前が定かではないが非常に君主に忠実な若い侍がいたという

勤勉でよく働き、何よりも君主定盛を心から尊敬していた。

やがて、定盛の目にとまり、定盛もその侍のことを信賴してたいそうかわいがったという。

腕もたった侍は瞬く間に出世していき、いつしか定盛の片腕とまで呼ばれるようになった。

だが……その侍をよしと思わぬ者がいた。

定盛の妻である。

彼女は何をするにも一緒に二人の仲の良さが氣にくわなかった。

嫉妬した妻は君主のいない間にいわれの無い罪をきせ、侍を屋敷の地下牢に閉じ込めてしまった。

そのときだった……海沿いにあるこの町を大津波が襲ったのだ！！  
後に『地ならし』と呼ばれた程の大量の海水。

町の者はほとんど高い丘に逃れたが地下にあった屋敷の牢は瞬く間に海水が流れ込み若い命が散ったのだ。

それ以来、この町ではさまよう侍の霊がたびたび目撃されるようになる。

という話だ。

この話は妖怪界でも同じように伝えられたらしく俺も雨造に聞かされてた。

「水にまみれ…風にまぎれ、邪魅と呼ばれる妖怪が生まれたんだ。邪魅というのはうらみをつけた人間を襲う妖といわれている……この地にはまだうらみをつけた大名家の血筋が残っている！」

「え…！？ということは……まさか！？」

「そう…つまり品子ちゃんはその大名家……秀島藩藩主『菅沼定盛』の血筋。その直径にあたるんだよ」

ふん、そうか……それにしてもあの写真の模様どこかで……

「そんなこと言って！！まったく効かないくせに！！もうたくさんよ！！鎮めるって…一向にいなくならないじゃない！！」

「力が及ばないことは返す言葉もないが邪魅のうらみが強すぎる場合は落とせない場合もあるんだ……憑き物落としができなかった家はこの町を去った。さもなくば最悪のことになるかもしれないから……………」

「……………」

神社をでてとりあえず菅沼家に戻るため歩く。先ほどのことや道を歩いていると聞こえる菅沼品子への陰口でみんなが暗い気持ちになっている。

「リクオ、今回の件、今夜には片つけようぜ。」

みんなと少し離れたところを歩きながらリクオに話しかける。

「うん！僕ももう少しで全てが繋がりそうなんだ……さっき神社の部屋に飾ってあった写真に昨日見た紙切れに書かれてあった模様と同じものが書いてあったしね」

ああ……あれか。

「あとは動機だけだな……」

「え！？そうなの！？」

「ああ、昨日の昼間に邪魅らしき奴を見たとき『その娘に近づくな』  
って言ってた。そして、菅沼品子は秀島藩藩主の直系で邪魅は藩主  
を慕っていて嫉妬した妻に殺された若い侍だ。」

「もしかして、邪魅は藩主への恩を今も忘れてなくてその直系にあ  
たる品子さんをあの神主のお札……式神から守ってるんだね！」

まあ、私見も入ってるんだけど、間違っていないだろう。

「でも……神主が菅沼家ね人たちをあの家から追い出そうとしてるのは  
わかるんだけど、その理由がまだ見えないんだよなあ」

「そうだね……それより今、さっきのことのせいでみんなが暗く  
なってるよ。なんとかしなきゃ」

「まあ、そうだけどころというのは清継に任せておけばいいんじゃない  
か？」

「海に行こう！」

いきなり、清継が手をたたき大きな声で言った。

「気分を晴らすには海が一番！！作戦を練るにも気分が落ちてちゃ  
ー出るものも出ないよ！！この際、パーッと行こうじゃないか」

「いいい！！ナイスアイディアよ清継くん！！」

「まさか、その口からそんな言葉が出るなんてえ」

「ほらな、」

「ハハッ、そうだね」

しかし、ここの海は海といってもカニの産地であり、そこには漁港があり遊べる場所なんてどこにもなかった。それでも、菅沼品子は『みんなみたいな仲間がいるってことが本当にうれしい』『ありがとう』といったんだ。

その言葉で俺達もまた元気がでた。

「よし！今夜こそ邪魅を捕まえるんだ！！」

今夜……そう、今夜だ。

……そのとき、

「おいおい、バケモン憑きのその娘にやかかわんねーほうがいい

ぜ…？」

「あつ」

あきらかに人間の不良みたいなやつらが突っ掛かってきた。

確か、こいつらは昨日、この町に来る途中にリクオに絡んでたやつらだ。そのときは、四国戦で少なからず有名になったリクオを追ってきた小妖怪を見たリーダー格の奴が逃げ出したんだ。

「菅沼のおじょうさん、ここにいたのかい？」

「ひひひ、やばいことになっちゃう前に早く出た方がいいぜえ〜！？」

こいつら、もしかして…………

「ゲツ！」

リーダー格の奴がリクオを見た途端、いきなり逃げ出した。昨日のやつ、相当怖かったのか。まあ、ともかくこれで。

「これで、もう片がつかない、リクオ。」

「うん。今晚でこの邪魅の問題を終わらせよう。」

ヤクザに絡まれたせいかまた、みんなのやる気がでてまた、神社に来て作戦会議中だ。

あのヤクザは邪魅の噂がたつて出て行った家を安く買いたたいているブローカーでしょっちゅう管沼家にきて『早く出ていけ』など言ってるそうだ。

「何か方法はないんでしょうか！？僕ら品子さんを守りたいんです」

「そうそう・・・もっと強力なお札とかないの？」

「何言ってるんだよ、サイキー。この人のお札は効かないって言うたじゃん。」

俺たちは今夜決着をつけるために作戦を考えた。

それは神主に新たなお札・・・式神の札を催促し神主はそれで管沼品子を脅かし家から追い出そうとするだろうが俺たちの予想だと邪魅が現れてそれを退治してくれる。

そこで俺たちが妖怪の姿でそこに行き事情を説明。

そのあと、神主のもとに行きすべての悪事を暴くというわけだ。

「仕方ありませんね。実は20年前に邪魅にとり殺された事件があったんです。その時京より取り寄せた奥の手があります。」

そう言つて神主が4枚のお札を出す。

「これは強力な護符です。この四枚を部屋の四方にはり決して外に

は出ないこと。もちろん品子ちゃん以外は中にも入らないこと。そして朝まで絶対に戸を開けてはなりませんよ・・・」

よし、ちゃんと引っかかってくれたな

まあ、俺たち中学生を疑うようなことはしないだろうと思ってたから大丈夫だと思ってたけど。

そして夜中・・・

「よし、準備できたな我が大将」

「ああ、行くぞ」

清継たちを適当に回らせ妖怪の姿になった俺とリクオは管沼品子の部屋に向かった。

ガタガタ・・ガタガタ

戸が揺れる音がする

瞬間、扉が斜めに切られた！

ガキイッッ

「おっと」

部屋の中から人型としてはそれなりに大きい妖怪が先頭にいたリクオに切りかかってきた。

「俺は敵じゃねえよ」

「そうだぜ邪魅・・それに管沼品子さん」

・・・・・む！

管沼品子が俺の顔をじつと見つめる。

待て・・・この展開って前にもあった気が・・・

「・・・奴良サイキくん？」

「またバレたー！？」

何故だ・・・最近ばれやすくなってる。

確かにリクオに比べれば身長が伸びて紙の色が変わって少したったぐらいだけださ。

「あなたももしかして妖怪だったの・・・!？」

正直に言うべきなのか？

それともなんとかして誤魔化すか？

「そのことについても詳しいことは道々話してやる・・・この邪魅騒動のカラクリ、暴いてやるからよついてきな」

フー・・・リクオがとりあえず話を流してくれた。

家を抜け出し神社へ向かう。

「この方向って神社の方じゃ・・・」

「そういうことだ。すべての黒幕はあの神主だ。あいつらは邪魅が本当にいるってことは知らないがそれを式神の札を使い今回の事件をでっちあげてきた。だが、それを邪魅が今日みたいに今までお前を守ってきた。」

「なんで・・・邪魅は私たち一族を恨んでたんじゃないの!？」

「その逆だよ。邪魅はずっと主君に尽くしてきた。殺した妻への恨みではなく主君への恩義で妖怪になってお前たち一族を守ってきたわけだよ。だろ、邪魅？」

ゆっくりと邪魅はうなづく。

菅沼品子は足を止め邪魅に顔を向ける。

「あの・・・誤解しててごめんなさい。今まで助けてくれてて、守

ってくれてありがとう」

邪魅は彼女の顔をじっと見つめる。

『ありがとう』というずっと聞きたかった言葉を聞けたのだから。

「どこの者かは知らぬが・・・このご恩・・・」

「まだその言葉は早いぜ。すべてはここにいる元凶を片づけてからだ」

菅沼品子が先頭に立ち中に入っていく。

「なっ、なぜ部屋からって後ろの奴らは!？」

「すべての悪の元凶はあなただったんですね」

神社の中には神主と黒いスーツをとサングラスを身に付けた奴らに昼のやくざたちもいた。

「な、何をいつてるんだね、品子ちゃん。」

「まだしらを切る気か、神主さんよ。式神を使い邪魅騒動をでっち

あげ今夜、この子を襲おうとしたみたいだが本当の邪魅がそれを退治してくれたぜ」

「そうそう。もう今更悪あがきしようなんて思っなよ・・・ほらよ」

奴らをおどかさうと炎投で炎の塊を床に投げる。  
するとその炎は奴らを取り囲むように広がった。

あら？これはもう決着ついちゃってね？

「おいおい、大将に花ぐらい持たせろよ。」

「ねえ、ちょっとやりすぎじゃない？」

「すまん、こんなになるとは思わなくてよ。とりあえず外に出ようぜ」

今、リクオは邪魅と七分三分の盃を酌み交わしている。  
邪魅の主君への忠義に感動したらしく百鬼夜行に加えたくなっ  
たらしい。

これで、仲間が増えるってことか。

「じゃあサイキ君。説明してもらえない？さっき、あなたの大将もリクオって名乗ってたけど」

やっぱり覚えてたか

このまま忘れていてくれればよかったんだけど

「えっと、俺もリクオもいろいろ事情があるけど妖怪なんだ。いつもは人間の姿してるけどっていうか、リクオは夜にしかなれないんだけどね。で、リクオは奴良組の若頭で俺はその組員ってわけだ」

「・・・にわかに信じられないけどこんなことがあったら信じるしかなさそうね」

「そういうことだ。このことはくれぐれも他の連中には言うんじゃないやねえぞ・・・ゴホっ、ゴホッ」

う・・・風邪ひいちまったかな・・・ってそれはないか。

咳を受け止めた手に何か違和感を感じたので見てみると真っ赤な血が手のひらに広がっていた。

邪魅の漂う家 弐（後書き）

ジャンプ最新号読みました。

新章はじめなのにリクオがひとこましか出てなかった（笑）

## 対花開院兄弟

『どうだい？みんな見つかったかい？花開院さんは！』

「あー、こちら異常なし」

季節は7月も後半に入り更に暑さが増してきた。

既に夏休みに入っていて俺は家でのんびりするか特訓をするかのどちらかだけをしていたかったんだがまた清継の奴から招集がかかった。

『そうか、諦めないでがんばってくれよ。今度の旅行こそ花開院くんを連れていきたいからね。』

ということらしい。

今回も案の定リクオに連れてこられてしまいつららと花開院を捜しているところだ。

「りょーかい」

けど、俺は花開院の居場所を知っている訳だけど誰にも教えてない。確かにさっきこんなことより家でのんびりしたり特訓したりのほうがいいといったけどゆっくりつららと散歩するのも結構いいもんだ。

「花開院なんてほつときましよう、サイキさま！」

「ほつとくつていってもあいつ、一人で修行中だから俺たちが行っても邪魔になるだけだしな」

「ああー！やっぱり居場所も知ってるんですね！」

と怒るつらら

あのとときはしょうがないだろ。リクオの正体を隠すためだったんだから。

ん……リクオ？

そついえばどこに行つた？

さつきまで近くにいたはずなんだが。

「つらら、リクオがどこに行つたか知らないか？」

「あ、本当ですね。いつの間にかお姿が見えなくなって……、探しましよう、サイキさま！」

「そつだな。つららはあつちを頼む。」

「はい！」

ふたてに別れリクオをさがすことにした。

どこ行っただりクオは……。

ってか、ここら辺で花開院が修行しているところじゃ……

ズドドドド!!

なんだよこの音!

明らかに戦闘音じゃんかよ

とにかく今の音がした方に走る。

「花開院さん!!」

リクオの声! また厄介事に首突っ込んだのかよ

「リクオ!」

たどり着いたそこには倒れている花開院、その側に立っている着物をきた男にリクオがいた。

「サイキ!」

「また妖怪か……さすが浮世絵町だな」

また妖怪かって俺が妖怪だってまたばれたよっ!? しかも初対面の

奴に！

「サイキ、アイツは陰陽師で花開院さんのお兄さんだよ」

陰陽師だからか……。確かに　なかなか強そうだな。

「な、サイキくんまで何しに来たん……」

「ゆら……まだ妖怪なんかと友達ごっこをしていたのか」

こいつが花開院の兄さんか……

「リクオ、花開院をここまでやったのはこいつか？」

「うん」

そうか……

「それなら容赦はしねえ！」

俺は妖怪化して花開院の兄貴と対峙する。

「それがお前の本性か。妹を……だましおって、妖怪めが……」

「サイキ、気をつけて！」

「リクオ、花開院を連れて下がっててくれ。」

俺の言葉にリクオは頷き、花開院を起こす。

「サイキくん！なんで私を助けるん！？」

「花開院……俺たちは妖怪と陰陽師。本来は敵同士だ。けどなあ、前にも言っただろ？俺たちは……友達だ！！」

そつだ、妖怪、人間、陰陽師があるけど俺たちは友達なんだ。助けるのは当たり前だ。

「フン……」

「花開院の兄貴。友達の身内だが手は抜かないぜ。」  
体から妖気を放つ。

普通の人間なら畏れで気絶でもするんだがさすがだ。平然としている。

「なかなかやるようだな。俺も本気でいくか」

すると、懷から竹筒を取りだしそこから水をだす。

「式神融合、仰言」

その声とともに一瞬で煙が蔓延する。

そして、煙が晴れたとき、

「花？……いや水でできているのか」

俺の回りに水でできた花が浮遊していた。

「ただの水ではないぞ。仰言よ、地に根を張り、花を咲かせて魅せよ」

数個の花が地面に落ちた。

ジュボオオオオオオオ！！

「溶けた？めり込むくらい……なんや、この式神は！！」

と花開院。

花開院もしらない式神なのか

「式神、仰言は金生水の花。金生水とは金の表面に凝結により生じた水滴を集めたもの。その純度は99.999%最も澄んでいてもつとやわらかい水……まさに水の中の水！この世で最も腐蝕を促す液体は『酸』でも『王水』でもなく純粋な水だ。式をまじえたこの花に触ればどんなものもたちまち溶ける……たとえ妖怪でもな」

「……………」

「あいにく俺には才能がないんでね、この式神は3分しか使えない。まあ、それに耐えればお前の勝ちだ。」

あつそ……

「じゃあさつさと始めようぜ」

「フン……、」

一斉に花が俺に向かってくる。

純粋な水……っっているんな言葉並べて言ったけどどうせ水なんだろう？

……………

「炎鞭！」

右手から炎の鞭をだし花にぶつける。  
チツ、少し押されるな。

「火の妖怪か……運が悪かったな。水と火じゃいくら妖怪でも部が悪いか」

「なめんなよ」

既に余裕の笑みを浮かべながら攻撃してくる。襲ってくる花を鞭で叩き落としていく。

流石にこの数を一本の鞭で全て落とすのはキツいな…

「しぶといな。こつちもそろそろ限界だ。終いにするぞ!？」  
上、下、右、左、斜めなど全方向から花が襲ってくる。

これは一本じゃ無理！

あれをやるか。

邪魅のことから帰って来てからも時間があれば特訓を繰り返してできることも増えた。

「炎塔！」

炎の柱が俺を中心に現れ、迫ってきた花を消滅させた。これは俺の防御技。

これで終わりか!？

「3分間」くろろさん」

ん！？

俺の回りに水が円を作り、そこには東西南北などの文字が書いてある。

チツ、これも陰陽術か！

この形はなにかの陣………この準備のためのさっきの攻撃か！

「異形のものよ、闇に散れ。仰言、金生水の陣！」

だが、本当に相性が悪いのはそっちなんだよ！

「氷造！」

地面に手をつき、かつて父さんが使っていた、空気中の水分を凍らせ武器を作っていた技を使う。

今回の場合、地面を凍らせてアイツの陣全てを凍てつかせた。

氷炎断を使っても一発で終わったけど、後ろに控えているもう一人の陰陽師も気になるからな。

「な！？火の妖怪が氷の能力も使うだと………」

「お前だつてかくし球仕込んでたじゃねえか」

「言葉を操ることも陰陽師のわざなんだ」「竜二、オレがやる」おい、魔魅流！」

花開院の兄貴………竜二の言葉を遮り後ろにいたもう一人の陰陽師、魔魅流がこちらに向かってきた。

「そんな真正面から来ても！」

炎鞭を横に一閃

ガシッ！！

しかし魔魅流は俺の肩に手を置き、体勢をずらし炎鞭を避けた。  
そして、もう片方の手を俺に向け雷撃を放つ。

「めっ」

と同時に、

「氷炎断！」

雷撃と畏れがぶつかり合う。

「やれ、魔魅流」

竜二の声で更に雷撃が強くなる。

このままじゃ力負けして滅される。

クッソ、陰陽師になんか負けてられないんだよ！

特訓を思い出せ！

やったことをフルに出せば更なる力を得ることができる。

父さんも使ってた

氷炎断の進化系………

「氷炎断・集!!」

ゴオオオオオオ!!

全方向ではなく魔魅流に向かつて一直線に放たれた畏れは雷撃を消し去り、直線上にあったものは凍るか焼けるかし、それをまともにくらった魔魅流は気絶した。

「魔魅流が……貴様、名は？」

「妖怪、氷虎と不知火炎の息子、そして、後ろにいる奴良組若頭、ぬらりひよんの孫の奴良リクオの下僕しもへの氷炎だ！」

なんか長くなったな。

戦いの途中からリクオは妖怪の姿になっていた。まあ、戦いを止めないで見ていてくれてたのはありがたいのだけど

「まったく、あなたは知らないうちに強くなっていく」

不意に陰から首無が表れる

「牛鬼様、あの陰陽師サイキなんか負けてますぜ」

「牛頭、お前は一度サイキにまけているんだぞ。」

瓦礫の上には牛鬼を筆頭に牛頭丸と馬頭丸。

そして、また、また、妖気が膨れ上がってくる。

瞬く間に俺やリクオ、花開院や竜二の回りには本家の妖怪が集まった。

「お兄ちゃん、コレ百鬼夜行や」

「百鬼夜行！？ふざけるなよ！だとすればこの中に……」

竜二が探すもの、それは百鬼の大将……すなわち、

「サイキが言っただろ。俺はこの百鬼の主。関東大妖怪任侠一家奴良組若頭のぬらりひよんの孫の奴良リクオだ」

妖怪の姿になったリクオが俺の横まで出てきた。

「ぬらりひよんの孫だと……お前が。」

「で、どうするんだ竜二さんよ」

「流石にこの数はキツイから今日はひく。だいたい俺たちはゆらに伝えることがあつてきたんだ」

「私に……」

「ああ、訃報だ。秀爾と是人が死んだ」

そいつら陰陽師か……

「すなわち花開院が京都にはった8つの結界のうち2つが破られた。そして当主花開院秀元は魔魅流を本家に加え修業中の身であるお前まで呼び寄せた。事態は……思ったより悪い方向に進んでいるぞ、

ゆら京に戻ってこい。奴が……花開院の宿敵のあの大妖怪が動き出した！」

竜二の言葉に花開院は呆然としている。  
だが京の大妖怪って……

「おい、竜二。京の大妖怪って。」

「ああ、妖怪でも知らねえのか……1000年以上前から花開院が苦湯を飲まされてきた……羽衣狐だ」

伝えることを全て伝えたのか、竜二は気絶した魔魅流を背負い去っていった。

「リクオ……行かせていいのか？」

「ああ、別に。それより羽衣狐は……」

小さい頃の記憶は曖昧だ。でも、ひとつだけ覚えていることがある。

俺の両親、氷虎と不知火炎は殺された……羽衣狐に。その事実だけは幼かった俺の記憶にしっかりと残っている。

## 対花開院兄弟（後書き）

なるべく2週間は空けないようにしようと思っているんですが過ぎ  
てしまいました。

明日から部活もないのでこの間に書けるだけ書きたいと思います。

## 想い（前書き）

あけましておめでとございませす  
新年一発目の投稿です

## 想い

竜二が去ったことで奴良組妖怪も本家に帰っていく。俺は首無と毛嬢楼を捕まえて並んで帰っていた。

「2人ついていつから組にいたんだっけ？」

「私達は江戸の時代からですよ。といっても青たちよりは後で鯉伴様の体制は既に磐石なものになっていました。氷虎様と不知火炎様は既に幹部でしたが鯉伴様とは年が20も離れていなかったのよき兄貴分、姉貴分でしたよ」

「私も入りたての頃は不知火炎様に色々教えてもらいましたよ」

話を父さん達のことに変えてくれたありがたい。

「で、その父さんと母さんが死んだときなんだが……」

一瞬にして2人の顔が凍りつく。

「何でか知らないけど俺もその時のことを覚えていない。でも、そのとき気付いたら目の前に血を流した父さんと母さんが倒れてた。羽衣狐に殺されたんだ。」

「サイキ様、なぜ羽衣狐だと……、私たちもその事についてはよく知らないのですが」

「俺も確証はないよ。でも傷口からして殺されたのは確実。羽衣狐だったのはその当時羽衣狐が復活したって幹部達が話していたのを聞いたからだ。父さんとは因縁があるみたいだから狙うのはもわかる。そして、今、羽衣狐が動き出した。」

「……それを知ったサイキ様はどうするつもりですか？」

既にわかっているような口調で言う首無

「京都に行くよ……。行って父さんと母さんの死の真相を確かめる」

「1人ですか？」

と毛嬢楼

「みんなに迷惑かけたくないから1人で行こうと思ってたんだけどよく思い出したら清継……学校の友達がみんなをつれて夏休みに京都へ旅行に行くって言ったのを思い出したから一緒に行こうと思う。人間だけで行かせるのは危険だから」

「そうですか……それは私たちがついていきにくくするためですか？」

さつきも行った通りみんなに迷惑はかけたくない。首無たちが人間に化けても清継たちにはついていくのはむずかしいだろう

「まあな、お前達はリクオに着いていけよ。俺もただリクオとは盃を交わした主従の関係だろ」

四国との戦いの時、俺がいない間につらら達と一緒に2人ともリクオと杯を交わしていた。

「そうですね、我々はリクオ様の下僕しもへ。あの方の畏おそについていきます。」

「うん、そうしてくれ…………ツが！」

また血が……

前より増えたし、原因不明だし

「さ、サイキ様!？」

「大丈夫!慌てるな。」

「慌てるなって言われましても血をはくなんて尋常じゃないでしょ」

だめだ、なに言っても聞かなそう。

「わかった!あとでゼンに診てもらってから他の奴には秘密にしておいてくれよ。特にリクオとつららはうるさいから」

「…………しょうがないですね。絶対にゼン様に診てもらってくださいよ」

まったく…………いつまでこんな心配性なんだか。  
俺はもうお前らと同じリクオの下僕なんだから

「ということだ、ゼン。」

本家に戻りさつそくゼンのもとに行き、邪魅のときの吐血や今日のものを話し、身体を診てもらった。

「んー、なんとも言えないな。」

「あれ？吐血はゼンの得意分野じゃないのか」

「それを言つなよ。俺の場合は生まれつきなんだから。でだ、身体には特に異状はない。まあ、簡単に言えば原因がわからん」

「おい！ちよつと待て！一応医療に携わってるのにそんな断言していいのかよ」

「わかんねえもんはわかんねえんだよ。だが、予想なんだが……」

いや、だから予想とかでいいの？

「サイキ、お前の親は氷の妖怪と炎の妖怪だ。真逆の性質をもつ能力がサイキの体に宿った。」

確かにそうだ。父さんと母さんはどうやって俺を産んだんだ？

「その能力が妖怪として活発に活動してきた今になって拒絶反応を起こし始めてるんじゃないのか」

「体内で拒絶反応が起こって体が耐えきれなくなり吐血か……」

考えられないことじゃないな。でもそれが原因なら、

「ゼン、それが原因なら……」

「ああ、このまま妖怪として活動していったらいずれは妖怪の寿命を待たずに死ぬだろうな」

「そうか……、まあその予想が本当だったとしても俺は京都に行く」

京都に行けば妖怪の力を使うだろう。でも、俺は行く。羽衣狐に会い、親の死の真相を確かめるまでは

ゼンの部屋から出て部屋着に着替えリクオを探しているんだが……いや、先にじいちゃんのところに行っとくか。

広い屋敷だけどさすがにすぐじいちゃんの部屋まで着いた。

「じいちゃん、話あるんだけど今いい？」

「おう、サイキか。いいぞ」

とのことなので戸を開けなかに入る。そこにはキセルで一服しているじいちゃん、ぬらりひょんがいた。

「今日は大変だったそうじゃな。陰陽師がきたとか」

「うん。まあそのおかげで俺の鬼憑がさらに強くなったよ」

ほう、と眼光が鋭くなるじいちゃん。

「で、本題なんだけど……」

どう反応するか……

「陰陽師が京都で羽衣狐が活動を始めたって言ってた。」

「そうか……」

「だから、俺は京都に行く。」

「目的は？」

俺の目をまっすぐ見つめるじいちゃん。

「父さんと母さんのを殺したやつ……羽衣狐を倒す。」

「仇討ちか……だが羽衣狐だとなぜわかる？」

「因縁があるんだろ？それに当時羽衣狐が復活したって幹部達が話してたからね」

「確かに可能性は高い。そしてワシには止める権利はない。リクオと盃を交わしたのならリクオに全てを委ねろ」

「ありがとう、じいちゃん。じゃあ、リクオにも話してくる」

「おっ、いたいた……ってこの状況なんだ……？」

リクオを庭の桜の木の上に見つけたのだが

「ハッ、ふふふ」

水に濡れて不気味に笑う花開院が木の下にいた。

「なにしてんだ、お前」

「なっ、サイキ君！？って、リクオ君が妖怪じゃないって騙したや

ろ！なにが本当で何が嘘かは今リクオ君から聞いたけど！」

やっぱりそれか……

「それはしょうがないだろ。リクオは俺の主なんだ。」

「だからってその嘘は悪行や！帰ってきたらリクオ君と一緒に滅したる！！」

ああ、京都に戻るんだったな。

「リクオ！」

「あ、ちょ！無視すんなー！」

リクオがこちらを向く。

「俺、京都に行くことにした！盃を交わしたから単独行動の許可をもらいに来た」

「そうか……行ってこい！サイキの好きにやればいい。」

ありがとう、リクオ。

「ということだ、花開院。俺も京都に行くから会つかもしれないな」

「なつ、京都になんの用があるんや！？」

花開院家も千年以上前から因縁がある。だけど、

「アイツと因縁があるのは花開院家だけじゃないんだよ」

サイキが去ったあと、ぬらりひょんはその昔、大名屋敷から拝借したキセルで一服しながら月を見ていた。

「（サイキも親の背をおうか）」

ぬらりひょんはサイキと会う前に納豆小僧から陰陽師との戦いのことを聞いていた。

どんな戦いをしていたか、どんな畏を使っていたか。

「（氷炎断・集か。氷虎と始めて戦ったときにワシの畏を断った技の応用。そして、羽衣狐……）」

こんなことを思っているうちにぬらりひょんは400年前のあのときのことを思い出していた。

時は400年前

京都は天下の往来を跋扈する魑魅魍魎どもで溢れていた

## 想い（後書き）

いつまで続くかわかりませんが・・・たぶん原作が終わらない限り  
続くと思いますが今年も一年よろしく願います

く過去編く 2人の出逢い（前書き）

宿題もせず書いていると1日で出来ました。  
短いですけど最後まで読んでもらえれば幸いです

## く過去編く 2人の出逢い

戦乱の世も終わりに近づいてきた昨今、奴良組の勢いは更に増していた。

現在は京に入る最終準備として牛鬼組が居を構える掟眼山に着いたところだ。

数カ月前に加わった氷虎は既に組の者たちとの仲を深め、実力も伴っている。組内では幹部並みの力を持っていた。

「おゝ、懐かしいな掟眼山」

「あれ？アンタもここに来たことあるんだ」

氷虎と話しているのは同じ氷系の妖怪、雪女のせつらだ。

「おう、京から出たあと何回か遊びに来てたからな」

「へえゝ。あつ、そういえば今日遠野から1人来るんじゃない？  
ねえ、ぬらりひょん」

とせつらが先頭を歩くぬらりひょんに聞く。

「ああ、昼には合流する事になってるんだが……遅いな。」

現在は昼をすぎ、既に二時間はたっている。

「そいつはどういう妖怪なんだ？」

氷虎が聞く。

「たしか、火の妖怪だ。俺もよく知らねえんだよ。詳しくは……鴉天狗！今日くるやつってのはどんなやつだ？」

「総大将がそんなのでどうするんです！まあ、今日来るのは火の妖怪、不知火炎です。まだ若く氷虎と同年代だ」

とぬらりひょんに鴉天狗がいうがここまで知っているのは鴉天狗だけだったらしい。

「氷虎って何歳だっけ？」

「じゅーなな」

「えっ、嘘！？」

「ホントーだよ」

ふざけた口調で氷虎が言う。

「私と結構差あるじゃない」

せつらが言うこの結構とは約100才もないだろう

「鴉天狗、京入りの前になんでそんな若いのを呼んだんだ？」

「いえ、私もそこそこのやつと言ったのですが、その結果こういうことになりました。強さはそこそこと言うことなので……」

「まあー、いじゃん！楽しく……」

ドオオオン！！

氷虎の言葉を遮るように彼らの目の前に何かが落下してきた。

『敵襲かー！？』『戦闘じゃー！！』

血気盛んな奴良組の連中は突然の落下物を敵襲だと思い戦闘の準備を始める。

空気が張りつめるなか落下物によってできた煙が晴れ始める。

「１人が……？」

煙の中に見える影はどう見ても１人のもの。  
すると、中から声が聞こえてきた。

「イテテ……着地失敗しちゃったよ」

その声は女のもの。しかも、まだ若い感じの声だ。

「ぬらりひょん、俺悪い気しかないんだけど」

「ああ、ワシもじゃ」

いや、この２人だけでなくここにいる全員が落下してきた『ドジ』な奴が今日来る予定の不知火炎だと思い始めていた。

「んーっと。奴良組の皆さんはどこだー？」

煙が完全に晴れた。

そこには真っ赤な腰まである長い髪を垂らした身長155センチぐらいの少女がいた。

「あつ、どーも！奴良組の皆さんですね！遠野から来ました不知火炎でーす！」

こんな不知火炎を見てせつらは……

「なんかちっさくてうざいわね」

「なー！なんだとおばさん！ちっちゃいって言うな！」

「わ、私がおばさんだって！ふざけんじゃないよ、ガキ！」

不知火炎と雪女のせつら。全く逆の能力をもつせいなのかこれから数百年犬猿の仲になっていく。

延々と続きそうになっているので総大将のぬらりひょんが止めに入る。

「そこら辺でやめとけ、2人とも。えっと、不知火炎だったな。ワシが奴良組総大将のぬらりひょんじゃ。よろしく頼む」

「おおー！あなたがあのぬらりひょん！100年でここまでの百鬼夜行を作り上げた妖怪！お会いできて光栄です！よろしく願いしまーす！」

総大将のぬらりひょんが不知火炎を受け入れたので幹部などは自己紹介をしたり握手したりするが意外と友好的だ。

幹部紹介最後に氷虎が不知火炎のもとにやってくる。

「お、俺は氷虎だ。よろしく」

なにか緊張ぎみで氷虎が自己紹介をする。そんな氷虎を思ってかぬらりひょんが野次をいれる。

「氷虎ー！せっかく同年代なんだからもつと喋ろよ。それとも同年代の女で緊張してのか！」

「うるさい！ぬらりひょん」

「えー同年代なん……ですか。私、16です。氷虎さんは？」

「……17」

またも呟くように言う氷虎

「わー！私、こんな年が近い妖怪初めて会いました！感動です。よろしく願います」

「お、おう。」

自己紹介を終えて逃げるように不知火炎のもとを離れる氷虎にせつらとぬらりひょんが話しかけてきた。

「やっぱり氷虎もわかいなあ。あのぐらいで緊張してな」

「ちげえよ。ただああいうテンションの高すぎる奴が苦手なだけだ」

「とかいって一目惚れとかしちゃったんじゃないの？チビだけど顔は整ってる方だし」

「んなわけないだろ……ああいうの苦手だって言っただろ。」

これが氷虎と不知火炎の出逢いだった。

く過去編く 2人の出逢い（後書き）

この過去編は何話続くのだろうか。

前々から書きたかったところなので筆は進むのですが宿題がヤバイですね。

明日は出掛ける予定があるので次は明後日かその次の日かです。

く過去編く 打ち解け（前書き）

大変遅れてしまつて申し訳ありません

く過去編く 打ち解け

奴良組は京入りを翌日と決め、この日は牛鬼組の屋敷に泊まることになった。

妖怪として比較的若い者が集まっている奴良組は京入りという契機にまた宴会を開いていた。

総大将、幹部たちは広間で飲んだり食ったり騒ぎ放題。せつらなどの女中、小妖怪は料理や酒を作ったり運んだりしていた。

そんな中、遠野から来た不知火炎は基本的に何もする事がないので宴会の輪に入っていればいいのだが……………

「私も何か手伝いまーす！」  
と言いつつ、奥へと駆けていった。

「あの騒がしいのはどうにかなんないのか？」

氷虎は幹部席の末端で一人酒を飲みながら呟いた。

「氷虎さーん！お酒持ってきましたー！」

氷虎は深く悩んでいた。

強者がひしめく京で生まれ、10年以上も戦いながら生きてきた氷虎にとって奴良組のような安息の場所というのは得意な物ではなかった。今となつてはかなり仲も深め大丈夫ということなのだが、今日来た不知火炎。

この不知火炎の高すぎるテンションに氷虎はついていけるはずがなくため息ばかりついていた。

しかも、不知火炎は氷虎を年が近いせいがよく構ってもらいに來るのだ。

不知火炎が酒の小瓶をのせたお盆を持ちながら氷虎へむかつて走ってくるが……

スタスタスタ……「ぎゃっ！」　バタっ！

ガシャン！

畳を走ってきた不知火炎は何もないところで転け、転倒。当然、持っていたお盆は投げ出され、乗っていた小瓶は宙に。

しかし、最後の『ガシャン』という瓶が割れるが悪かった。宙に舞った瓶は綺麗な方曲線を描き氷虎の額に直撃。額にあたった瓶は見事に壊れ、入っていた酒は顔全体を濡らした。

「はあゝ」

深くため息をつく。

「イテテ……。あつ！すみません！氷虎様！だ、だ、だ、大丈夫ですか！？今、タオル持ってきます。」

「俺はいいから……他のやつにまた酒とか運んでやって」

「でも……」

不知火炎は渋るが……

「これで大丈夫だから」

氷虎は自身の能力で顔についている水分を凍らせ、それを剥がすことによって解決した。

「はい……すみません！」

少し落ち込んだのか早歩きで奥に戻っていった不知火炎。

すれ違いで入ってきたのはせつら。氷虎の横に座り空いている酒皿をとる。

氷虎はせつらが仕事が終わったのだと思い酒を注いでやった。

「あんたも大変だね」

「……見てたのかよ」

「まあね。あのチビ、ドジすぎでしょ。」

そつだな、とまた酒を飲みながら相槌をうつ氷虎。

「でもアンタってチビのこと極端に苦手すぎじゃない？アイツが年の近い氷虎にたくさん喋りかけてくるのはわかるけどさ」

「俺ってさ、あの京で生まれて何年か前まで生きてきた。奴良組に入って、こんなに騒いだのは初めてで最近ようやく慣れてきたところにあのテンションだ。さすがに無理だよ」

「そうだったね」

2人は騒がしいなか、また静かに酒を飲み始めた。

「じゃあ、氷虎さん！模擬戦お願いします！」

「……おう」

奴良組一同が屋敷の大きな庭に出てきた。そして、皆の前で氷虎と不知火炎が相對していた。

これから氷虎と不知火炎の模擬戦が行われるのだ。

何故このようなことになったのかというと………

時間は遡り宴会の盛り上がりも最高潮に達してきた頃……

「いいねえ、不知火炎。言い飲みっぷりだ！」

ぬらりひょんはお酌にきた不知火炎に酒を飲ませ、最初は遠慮したもののそのうち盛り上がり流され左手を腰にあて小瓶をいっき飲みしたわけだ。

既にぬらりひょんは水口酔い気味

「おい、不知火炎。その年で派遣されたぐらいならそれなりの強さなんだろう」

「はい！もちろんです！どんなやつでもかかってこいです！」

「じゃあうちの誰かとやってみるか……」

そうだな……と誰にしようか考えるぬらりひょん。しばらく思索した結果、ぬらりひょんの目に静かにせつらと酒を飲む氷虎の姿が写った。

「よし。氷虎！不知火炎と模擬戦だ！！」

「は？」

そんなこんなで氷虎に決定した。無論、反対、抗議した氷虎だがぬらりひょんやまわりの酔っ払った妖怪達に押し切られてしまった。

「氷虎さんって名前からして氷の妖怪ですね。私とじゃ相性が悪いですね。」

「喋ってないでさっさと終わらせようぜ。」

ヤル気がない氷虎は模擬戦の開始を促す

「そうだな。じゃあ始めるか。鴉天狗！」

「はい。では………模擬戦、氷虎対不知火炎、開始！」

その言葉とともに不知火炎は氷虎から少し距離をとり、

「まあ、さっきあんなこと言いましたけど、氷虎さんもその年で不良組幹部になっただぐらいですし私も本気でいきます！」

すると、不知火炎の背中から炎が出てきて次第に体を覆うほどの翼になった。

「飛べるんですよー、これ」

有言実行と言わんばかりに炎の翼を羽ばたかせ空中に飛び上がる。

「じゃあさつさとかかってこい」

氷虎は以前ぬらりひょんと戦ったときに使った氷の刀を作り不知火炎を迎える体勢をとる

「親火!!」

その言葉と共に炎の翼が形を変え、渦をまく円形になった。

「行きます!」

両翼の渦の中心から炎の固まりが氷虎に向かって一直線に向かって飛んでくる

そんな単純な攻撃なんて…と思い氷虎は一メートルほど後ろに下がり避けようとするが、

「追尾!？」

氷虎が避けたことによって地面にぶつかるはずだった火の玉は突然向きを変え下がった氷虎へと照準を戻した。

突然の方向転換に氷虎はなんとか対応し氷の刀で火の玉を叩き落とした。

「へえー、面白い畏を持つてるじゃん。こっちからも行くとするか」

既に先程と模擬戦への意欲の違いが感じられる。

氷虎が地面に手をつく。

すると、そこから空中にいる不知火炎のもとまでジャンプ台のような氷の道ができる。

氷虎はそこを滑り不知火炎な元へと飛んだ。

「空を自由に飛べる相手にあれじゃヤバイんじゃないか？」

観戦している一ツ目入道が言う。確かに空を自在に移動できる不知火炎と違って氷虎はそれが出来ない。

「アイツなら大丈夫さ」

とぬらりひょん

「空を飛べる私に向かって自殺行為ですよ、氷虎さん！」

不知火炎も一ツ目入道と同じ考えだ。

しかし、氷虎は表情を変えることなく……いや、むしろ楽しんでいるような表情で氷の刀を不知火炎へと振るう。

その刃を簡単によけた不知火炎は右手から炎をまとった鞭をだす。

「炎鞭！」

不知火炎は炎の鞭を既に空中で体勢を崩しそうになっている氷虎に一直線に放つ。

「甘いぜ、不知火炎！」

氷虎は足に触れている空気中の水分を一瞬で凍らせ氷の板にした。崩れかかった体勢を氷の板を踏み台にしてもとに戻すと共に炎の鞭を間一髪のところまで回避する。

完全に当たると思っていた攻撃が回避され一瞬思考が停止した不知火炎

その隙を氷虎は見逃さなかった。避けた勢いのまま不知火炎を地面へ蹴り落としたのだ。

自身も重力に見を任せ地に降りる。

「あそこでよけられるなんて……、さすが氷虎さん。強いです……でも私も負けませんよ！」

この言葉に氷虎のやる気は更に上がってきていたと共に不知火炎への考え方も変わってきていた。

「（やっぱり俺は戦うしか出来ないんだな。不知火炎と今、戦ってるからこそアイツのことがよくわかってくる。やられても諦めない根性とか、俺は好きだ！）よし！こい、不知火炎！」

「はい！」

元氣よく答えた不知火炎は地面を勢いよく蹴り、地面から少し浮いた状態で氷虎へと迫る。どうやら今回は近距離で勝負に出るようだ。それに対して氷虎はその場から動かずまた地面に手をつき、凍らせた。しかし、今回は氷の道ではなくぬらりひょん戦のときに見せた氷の柱を不知火炎へ何本も向けていた。

「私には効きませんよ！」

と言って両手から出した炎の鞭で氷の柱を破壊していきながら氷虎との距離を詰めていく。

それなのに氷虎は焦りもせず楽しそうに笑っている。  
そして、氷の刃と炎の鞭が交わる

二本の鞭に二刀の氷の刃で受ける。

両者共にこの戦いを楽しんでいた。  
命がけのものではなく互いの实力を知るだけのものだからという理由だけではないだろう。  
相手の気持ち、性格が少なくとも氷虎には手に取るようにわかって  
いた。

そして、やはり実力は氷虎のほうが上まっていた。

だんだんと不知火炎の顔にも焦りの色が出てきている。

「やっぱり強いですね、氷虎さん」

「あんがとよ！」

言葉を返すと同時に力のこもった氷の刃は炎の鞭を切り捨てた。

「スゴイです、氷虎さん！私も本気の畏をぶつけます！」

と言った瞬間、不知火炎の目付きが変わった。

プレッシャーにも感じるほどの畏れを放つ不知火炎の手には炎をま

とつた剣が握られている。

「超高温の炎で永久に精錬されているこの剣はどんなやつでも折ることは出来ませんよ。たとえ、氷虎さんでも」

「確かにすごそうだな」

氷虎は素直な感想を述べた。

「じゃあ、行きます……鬼憑、炎刀突式！」

炎の翼を羽ばたかせ、真っ直ぐ構えた炎の剣で相手突き刺すという単純な技。しかし、ただ単純なわけではない。

翼を羽ばたかせた瞬間、その場に不知火炎の姿はなく、既に相手の懐にいる。

地面からの高速飛行で一瞬のうちに精錬された刀で突き刺す。それが不知火炎の畏だ。

初見ではほとんどのものが完璧にかわすことはできないのだ。

氷虎もそのうちの一人でその場を動かずにいた。

いや、違う。

動けなかったのではなく動かなかったのだ。

「氷炎断・集」

勝負は喫した。

模擬戦のあと、相変わらず奴良組は賑やかしく宴会を行っていた。

そんななか、氷虎とぬらりひょんは2人静かに屋敷の縁側で酒を飲んでいた。

「不知火炎……なかなかのやつだったな」

「そうじゃのう。お前があんなに熱くなってたぐらいじゃからな。」

「ああ、俺は気に入ったぞ。奴良組に欲しい逸材だろ」

ずいぶんご機嫌な氷虎は酒瓶の酒を全て飲み干した。

「おつ、なんじゃ、氷虎。不知火炎のこと好きになったのか？」

「バツ、そんなわけないだろ。」

「ハハハ、冗談だ。まあ、たしかに、欲しいな。今度あの赤河童に言ってみるか。」

とぬらりひょんが東北の地で出会った戦闘集団を思い出す。

すると、宴会場から繋がる戸が開いた。

「ここにいたんですね、ぬらりひょんさんと氷虎さん！お酒、とおつまみを持ってきましたよ。」

「おお、不知火炎も飲んでけよ。」

少々酔っている氷虎が不知火に酒を促す。

「ありがとうございます！」

そんな2人の姿を見ながらぬらりひょんは、

「（若い世代か……いや、ワシもまだまだ若い。）」

などと思っているのであった。

く過去編く 打ち解け（後書き）

部活動で少し怪我をしてしまって執筆が遅れてしまいました。  
こんな調子ですがこれからも読んでもらえれば嬉しいです

く過去編く 京（前書き）

またまた遅れてしまいました

く過去編く 京

京

赤子を連れた一人の女性が夜の道を必死に走っていた。

しかし、ガン！という鈍い音を発し女性は何かにぶつかった。

そこには何もないはずなのに、だ。

「……え？進めない！？」

そう思い足をみると魚のようなものが足に絡み付いている。

いつのまに現れたのかわからない、その瞬間回りには大量の妖怪がひしめいていた。

「ぎゃー！」

女性から甲高い悲鳴が出る。

「や、やめて……、せめて……この子だけでも」

恐怖のあまり言葉を震わせながら必死に懇願する。

それに、狼のような姿をした妖怪が答える。

「そう言うわけにはいかないんだよ。俺たちが特に欲しいのはその赤子の肝だ。赤子の肝は希少だから、食えば力が得られる！それも今の何百倍とも言われているんだ！」

「た…助けて」

その狼のような妖怪が女性と赤子に襲いかかる。

そのとき！

一筋の太刀によって妖怪が切り捨てられた。

それをやったのは長い髪で右目が隠れている奴良組幹部の牛鬼だ

「擦眼山の牛鬼だー！」

そして、牛鬼の後ろには血気盛んな百鬼の妖怪が控えていた。

その百鬼夜行を率いるのは奴良組総大将ぬらりひょん

「奴良組だあー！」

突然現れた奴良組に逃げ惑う京妖怪たち。

ここ百年で急激に力を伸ばしてきた奴良組の名は京妖怪にも届いていた。

そんな成長を遂げた奴良組を畏れるのも無理はない。

「はは。やはりお前が一番の出しゃばりか。よこせ、えりまきにする」

とぬらりひょんは牛鬼がきつた妖怪をもらう。

そして、決着はすぐについた。

大体の妖怪たちは死に、残りの少数は仲間のことなど気にせず走っていた。

「おー、終わったか」

今更、前に出てくる氷虎

「お前なにやってたんだ？」

「後ろからお前らの戦いを見てたんだよ」

とぬらりひょんの問いに答える氷虎だが、

「違うな、氷虎。お前はまだ古巣で戦うことに抵抗があるんだろう」

「……………」

牛鬼に真っ向からの否定される、なにも言い返せなくなる。  
つまり、事実なのだ。

「え！？氷虎さんって京妖怪だったんですか！？」

そこに、近くを歩いていた不知火炎が興味津々に話に加わる。

「言ってなかったのか？」

「別に言う必要もなかったし」

「じゃあ、氷虎さん！お願いがあるのですけどいいですか？」

「ん、なんだ？」

「京の街はこの国一番と聞いてます。できれば一緒に散策しませんか」

「地理を知っている俺に案内して欲しいってことか……まあ、いいけど」

「ありがとうございます！」

約束を取り付けた不知火炎は嬉しそうに歩いていく。

「ふう、懐かしいな……」

一方、氷虎は久しぶりの故郷を懐かしむかのようにゆっくり歩いていった。

慶長年間…太閤秀吉の死後、霸権を握った徳川家は全国の大名に陣触を發し大阪城を包囲。

来るべき戦に備え、豊臣側は食いつめた浪人を大量に雇ったため京には立身出世をねらう男たちで溢れていた。古来より妖たちの中心であった京には野望に燃える若い妖たちもまた霸権を目指し終結していた。

しかし、何分京の妖は他の妖よりレベルが数段違う。そんな中で上へのしあがるにはなんと言っても力が必要だった。

逆に力弱き京妖怪も焦っていた。

地方から集まる妖には力を持つものもいる。そのために京妖怪たちも力を求めていた。

そんな、力を求める妖怪たちは『生き肝信仰』というものをしていた。

『生き肝信仰』とは古くは中国の三蔵法師の生き肝（内蔵のこと）を妖怪たちが狙った話があるように赤子・巫女・皇女のように、より尊い命には妖の力を増幅させる力があると妖たちは信じ、それを求めたことを言う。

そんな『生き肝信仰』が行われているため、特に夜になると妖怪たちが街を徘徊し人間を襲っていた。

そんな中、京に入った奴良組は『生き肝信仰』などには興味はなく、

夜に徘徊している妖怪狩りをしながら京での生活をしていた。

だが、毎夜しているわけではない。むしろ、たまにしかそんなことしておらず酒をのみ、宴会ばかりしている。

奴良組が京に入って数日が経ったある日。

日も落ちてきた頃、氷虎と不知火炎は京の街を見て回っていた。

「この道って清水寺への道ですよね」

「お、よく覚えてたな」

「はい、でも清水寺って昨日行きましたよね」

2人は今日だけではなくあの約束をした翌日から京の散策を行っていた。

不知火炎が言った通り二人は昨日の昼間に名所の一つの清水寺にすでに行っている。

「言っただけどあれは昼の清水だ。夜に見る清水からの景色もい

いもんだからな。」

「それは楽しみです。行きましょう!」

ということで二人は清水寺へ向かっている。

「そういえば氷虎さん」

「ん、なんだ?」

不知火炎の声に街を懐かしみながら眺めている氷虎が答える。

「ここ毎夜、総大将ってどこに行ってるんですか?」

率直にストレートに質問する。

そして、不知火炎の言う通り京に入った初日以外の全ての日に夜になると出掛けている。

しかも、一人でだ。

不知火炎はこれがものすごく気になっているが今まで聞こうとしても相手は総大将だし他の者に聞いても、わからないという回答しか返ってこなかった。

「それは俺も気になっている。飲みに行くなら誰かを連れていくだろうしいつも決まって同じ方向に行くから毎回目的地は同じだと思うけど……」

「そうですね……、もしかしたらキレイな妖怪がいたから夜這いにいつてるんじゃないですか?」

さすがに本気ではなく冗談で言っている不知火炎だが……

「ありえるな」

「え!？」

「あいつの決断力と行動力はすごい。噂で聞いたことがあるんだけど京一番の美女で不思議な力を持っている人間の女がいるらしい。もしかしたら、その人のところに通っているのかもしれない」

「へえ、いいですね。総大将でも美人にはやっぱり惚れるんですね」

「いや、わかんないぞ。噂にある不思議な力を見に行ってる可能性もあるしな。」

「絶対惚れたんですよ!そんなに美しいなら絶対そうだよ!でも、いいなあ、私も美人になりたい」

まだ若いからか不知火炎はこういう恋愛話が好きなだろう。

「お前も結構綺麗な方じゃない?」

こんなことを言うが無論氷虎は不知火炎に気があるというわけではない。

先日の模擬戦で不知火炎のことを認めたが今のは単純にそう思ったから言っただけであった。

「本当ですか!?!嬉しいです、氷虎さん!」

「まあ、妖怪だから酷いのもたくさんいるしな。そう思ったら奴良組ってまだいいほうだよな。せつらとかお前もいるし」

その言葉に不知火炎は鋭く反応した。

「……氷虎さん、あのおばさんと私とどっちがきれいですか？」

真剣な眼差しの不知火炎に氷虎は腕を組ながら真剣に考える。

「んゝそうだな……悩む」

やはり氷虎はどちらかが好きというわけではなくあくまでもどちらが綺麗かと言う質問に単純に真剣に考えている。

氷虎とはそういう奴なのだ。

「（どちらがきれいにか……。どっちもキレイなんだけど……やっぱりここは！）」

「せつらかな。」

その瞬間不知火炎の思考が停止した。

数秒経った後、不知火炎の重い口が動きだした。

「……な……何ですか！」

「まあ、どっちもキレイなんだけど、せつらを選んだ理由としてはお前まだ若いだろ。だから、キレイはキレイでもなんか違うんだよな」

「なんですか、それー！もう氷虎さんなんて知らないです！ー」

と頬を膨らませながら怒る不知火炎に氷虎は、

「そんな理不尽な……」

自分は正直に思っていることを言っただけなのにと怒って先を行っている不知火炎を追いかけていくのであった。

「おい、待てって不知火炎！」

「ついてこなくていいです！氷虎さ、」

不知火炎の言葉が途切れた。  
理由は簡単だ。

通りに面している長屋の隙間から出てきた何かにぶつかったからだ。

「まったく、何やってんだよ……」

と不知火炎の元まで行き、

「すまないな、こいつおっちょこちょいなんで……って、お前ら！  
？」

「おいおい。氷虎じゃねえの。」

「羽衣狐様の元から逃げ出しておいでよく女連れてノコノコと帰ってこれたなあ」

不知火炎がぶつかったのは腰に刀を指している一見ただの浪人に見えるが妖怪である。

しかも、氷虎の知り合いだった京妖怪だ。

「氷虎さん、知り合いですか？」

「ああ、会いたくなかったけどな」

「そんなこと言うなよ、氷虎。俺たち昔は仲間だったじゃねえかよ」

「ちつ、今は違つだろ。ほら、行くぞ不知火炎」

と、京妖怪を避け清水寺へ向かおうとするが

「待てよ。久しぶりに会ったんだから話してこつぜ」

妖怪2人が立ちふさがる。

「話すことはないつて——」

斬！！

「氷虎さん！」

京妖怪が居合いの要領で氷虎に向けて抜刀した。

とつさに飛び下がったお陰で刀の先が氷虎の着物を少し斬っただけですんだ。

「なんのつもりだ……」

「なんのつもりってわかってるでしょ？お前は羽衣狐様と一度争って逃げたんだ。京妖怪の俺たちが殺らないわけねえだろうが！」

後ろに控える妖怪も抜刀し刀を構え、

「まあ、命はとらねえさ。動けなくなるまでやって、羽衣狐様に差し出すのよ。そうすれば俺たちの株も上がるってもんだ！」

「……………」

黙る氷虎

しかし、その目はしっかりと京妖怪を捉えている。

「ん？まさかビビって声もでないのか？」

「いや、お前らの言っていることがよくわからなくなてな」

「そのままの意味だぞ！？」

「違う……、言葉の意味とかの話じゃない。お前らが俺に勝つことを前提に話してるのがおかしいって言ってるんだ。俺の畏を忘れたのか？」

「忘れてないさ……。だが、この十年間で俺たちは強くなった！！氷虎こそ俺たちの畏を忘れてないだろうな！」

「お前たちの畏か……」

氷虎は右足を京妖怪にむけて一步踏み出す。

「そんなの忘れたよ」

その言葉と共に轟音が響き氷断が放たれた。

一瞬の出来事に対応できず二人の京妖怪は畏れに飲み込まれ動きを封じられた。

「俺は奴良組の氷虎だ。……じゃあな」

氷虎は氷の刀を作り出し固まっている二人の京妖怪を切り捨てた。

その表情は悲しい顔をしていた、と不知火炎は感じた。

「氷虎さん……」

不知火炎は先ほどの嫉妬からの氷虎への怒りは消え、悲しげな表情をしている氷虎を心配していた。

彼女は氷虎の過去を京妖怪であったことしか知らない。

しかし、今の会話から氷虎の抱えている過去の傷の深さを知ってしまったのだ。

「どーしたんだ？」

数十秒前まで悲しげな顔をしていた氷虎だが、今は笑顔で不知火炎の方に振り向いた。

「早く行こーぜ。俺だつて清水からの夜の景色を久しぶりに見たんだ」

「あつ、はいっ！」

歩き出した氷虎に慌てて後を追う不知火炎

人間から見たら普通の青年たちにしか見えない。

だが一人は心に深い傷を持ち、もう一人はその青年を深く心配していた。

「本当に綺麗でしたね！ありがとうございます！！」

氷虎と不知火炎な二人はすっかり暗くなったなか、清水からの帰途についていた。

奴良組の京における拠点、洛西の島原に既に入っていたのであと少しで屋敷につくだらう。

「あとこの髪飾り。本当にもらってもいいんですか」

と不知火炎が手に持っている綺麗な装飾がされた髪飾りを見せながら言う。

これは清水からの帰り道にあった店で氷虎が買い、不知火炎にあげたものだ。

「いいんだって。俺があげたんだからありがたくもらっておいてくれよ」

「でも……」

氷虎が言うがまだ渋る不知火炎

「だから、いいって。それに、さっき理由はわからないけどお前を怒らしただろ。それのお詫びって思ってもらってもいいから」

「あっ！そう言えばそういえば、そのこと忘れてました！まだ、怒ってますよ！」

「……………じゃあ、つけてやるよ、ほら」

不知火炎の言葉は無視して手から半ば強引に髪飾りを取り、つけようとする。

「む、無視しないでくださいよ」

といいながらも不知火炎は素直に従い髪飾りをつけてもらう

「お。似合ってる！すごく似合ってるぞ！」

「……ありがとうございます。………でっ、でもまだ話しは終わってませんよ」

「さあ、帰ろう。早く帰らないとみんなが心配するからな」

「あつ、また無視しましたね！って待つてくださいよ」

「おっ、あれはぬらりひょん………って誰だ、あれ？」

またまた、不知火炎の言葉が無視し歩いていると前方から誰かを抱えて、歩くぬらりひょんを発見した。

「綺麗な方ですね！」

不知火炎に続き確かに綺麗だと内心思う氷虎であつたが真相が気になりぬらりひょんのもとへ駆け寄った。

「そいつは誰だ、ぬらりひょん？」

「お、氷虎に不知火炎か。こいつは瑛姫だ。京都一の絶世の美女だ」

「まさか、今まで毎夜通つてたのはその瑛姫のところか？」

「ああ、そうだ。」

「当たってましたね！私たちの推測」

「ハハハ……マジか」

予想はしてたものの本当にここまでするぬらりひょんにあきれぎみ

の苦笑をもらすがそこでだんまりだった瑛姫が口を開いた。

「あ、あの妖様。今まですれ違っていた人たちは私たちのことを気づかなかったのになぜ、このお二方は普通にお喋り出来るのですか？」

「それは、この二人がワシと同じ妖でワシの下僕だからだ」

「……そうなんですか。お二方とも私と同じようなお年に見えるのに」

「そうだな。実際、年は大差ないな。」

そこで、その会話に氷虎が割り込む。

「で、今日はなんで瑛姫を連れてきたんだ？」

「そうじゃのう……。理由としては瑛姫があまりにも窮屈な生活を送っていたから……」

「……妖様」

「と、ワシが瑛姫に惚れたからだ！」

「な………！」

その言葉を聞き驚く氷虎と

「やっぱりそうだったんですね！さすがです！総大将！！」

自分の予想が当たり大喜びする不知火炎だった。

く過去編く 京（後書き）

もうすぐテストだ・・・  
どうしようかな

過去編はもうすぐ終わると思います

く過去編く 開戦（前書き）

半年以上音沙汰なしで申し訳ありませんでした。

ここ半年、自分の身体に不都合があり長らく執筆が的ない状態でした。

最近になりようやく環境が整ってきたということで更新させていただきます。

く過去編く 開戦

瑛姫が初めて奴良組に来た日の翌日。

ぬらりひょんはその時、瑛姫に夫婦となれ、と言っていた。  
妖怪と人が交わると言うことは異端と呼べるものだ。堅物のカラス  
天狗は止めに入ったし雪女のせつらも突っかった。

そして、氷虎はというと……

「さけー」

今日も夕方から宴会に流れ込み、氷虎も飲んだり食ったりを繰り返していた。

「飲みすぎじゃねえか、氷虎？」

「んなこたねえよ。全然酔ってないし」

話しているのは狒々だ。そして、回りには奴良組幹部も勢揃いしている。

「そついやあ、総大将はどこに行ったんだ？」

キセルをくわえた一ツ目入道。

「牛鬼と不知火炎もどこかに言ったようだな」

まだ、他のものと変わらぬ身長がある鴉天狗。

「ぬらりひょんはまた瑛姫のところだ。牛鬼と不知火炎なら夜風に当たりに行った。不知火炎がもう酔っちまったみだいだからな」

「その組み合わせは珍しいんじゃないか？ お前が行けばよかっただろ」

「俺はもつと飲みたいんだよお」

「絶体酔ってるだろ、氷虎」

「間違いなく酔っているな」

うんうんと頷く周りの妖たちをよそに新たな酒瓶に手をつけようとしたとき――

「みんな、聞け！」

勢いよく戸が開いた途端、牛鬼が入ってきた。

「どうしたんだ、牛鬼。そんな興奮した顔をして」

「総大将は大阪城に行かれた」

「「「!?」」」

その言葉を聞いた瞬間、場が凍りついた。いや、これが当然の反応と言えるだろう。

大阪城に巢食う妖を知らぬ妖はいない。人を表舞台からも支配する唯一の存在、羽衣狐。その力は絶大なものだ。

発言をするものが一人もいないのを確認すると牛鬼が再度口を開く。

「お前たちはどうしたい？」

その問いにどういう意味を込められていたのかは牛鬼以外知るところではない。しかし、皆の思いは同じだった。

「もちろん、行くに決まってるだろう！」

「あたりまえだぜえ！」

「出入りだあ！」

狒々の掛け声の後にたくさんの声が響く。妖たちはすぐに支度をして、大広間を出ていった。ただ、一人を除き。

「お前はどつするんだ、氷虎。京妖怪との因縁をつけるか逃げるか」

「牛鬼。俺を誰だと思っているんだ？ 行くに決まってるだろ」

既に氷虎の酔いは完全に覚めている。

「そう言うと思っていたよ。そういえば、総大将に不知火炎もつい

ていったぞ」

「はぁ、大丈夫かよアイツは。まぁ、いいか。乗っていくかい、牛鬼？ 俺のもう一つの姿を見せてやるよ」

そう言った氷虎はみるみるうちに姿を変えていった。

大阪城城内で、今まさに瑛姫に危機が迫っていた。

より、貴き生き肝を狙う羽衣狐にとつては瑛姫たちのような特別な力を持った生き肝は重要な養分なのだ。

ここまでにも二人の異能を持つ姫が犠牲になった。

そして、羽衣狐の魔の手が瑛姫と涙が真珠になる苔姫に襲い掛かる。

「おそれることはない。瑛姫……そなたたちの血肉は妖怪千年の京の礎となるのだから」

淀君の姿をした狐の化け物が瑛姫を掴まえる。

「よだねよ。美しき姫……………」

顔が近付く。

瑛姫は死を覚悟した。

しかし――

一瞬のこと

――畏が迫った。

ぬらりひよんの刃が羽衣狐を襲った。しかし、それは他の京妖怪に阻まれてしまう。

「チ……」

そして、反撃。

全長五メートルはあるだろう鬼の妖が金棒でなぎ払う。

「何じゃ？ 侵入者か」

寸でのところでかわすぬらりひよんだがビリという音と共に着物が破れる。

「……ヤクザ者が」

その背中には仏と妖の入れ墨がほってあった。

「こいつはワシの女じゃ。わりいがつれて帰るぜ」

「私もいるぞー」

ぬらりひよんの後ろにはついてきた不知火炎が酔っぱらっている。

「なんと……。妖が人を助けに？ 異なことをする奴じゃ。血迷うたはぐれ鼠か何かか」

羽衣狐が言うようにそれは常識から外れたことだ。だが、それだからこぬらりひよんの後ろに百鬼がついてくるのだらう。

そこに、『ドン！』という音が鳴り響く。

天井の一部が崩れそこから何者かが侵入した。

「他の奴等を追い抜かしちまったな」

「しかし、驚いたな。お前のもう一つの姿には」

現れたのは掬目山の牛鬼と体が氷でできた平成の世でいう虎の形をしたものだ。

「なんだ……きたのか、牛鬼……と、そいつは」

全員の視線が氷の獣に集まる。ぬらりひよんと不知火炎は未知のものを見るような目だが京妖怪は違った。

「……なぜ、ここにいるか………氷虎！」

「「！？」」

そう。

その氷の獣は姿を変えた氷虎なのだ。その姿を知っているのは数は少ないが、京妖怪だけだ。

「お前が氷虎なのか……？」

「え！？ 本当ですか、氷虎さん？ アハハ」

あくまで真剣なぬらりひょんに対し不知火炎は現在でも酔っている。

「そうだぜ。俺のもう一つの姿だ」

というと、元の姿に戻ってしまった。

戻ったところで再度天井を突き破りたくさんの妖怪が入ってきた。  
ぬらりひょんの百鬼夜行だ。

「おめえらもか」

「入れ墨だけではさびしいでしょう」

「まあ、いい。今は……」

「瑛姫を取り戻す、だろ。俺たちが雑魚どもをやるからお前はあの狐の魂を取ってこい！」

羽衣狐の表情が歪む。

氷虎は羽衣狐に反逆し京を出たのだ。二人の間には浅からぬ因縁があるのだ。

ぬらりひょんは前へ進む。

「身のほど知らぬ鼠供が……誰か余興を見せてくれるものはおらぬか？」

羽衣狐の呼び掛けに応じたのは先ほどの鬼の妖怪。

進むぬらりひよんの前に立ちふさがる。

「我が名は凱郎……」

急に喋らなくなる。いや、喋れなくなったのだ。

「雑魚は失せな」

氷虎の畏に吞まれ動くことすら出来ずに氷の刀で一閃された。  
その間にもぬらりひよんは進んでいく。

『いやっほー、出入りじゃあー』

『続け、つづけー』

続々と奴良組の妖怪が二人のあとに続いていく。  
しかし、さすが京妖怪。畏れることなくむかい撃つ。

始まった……ここに、奴良組と京妖怪の最初の戦いが始まった。

く過去編く 流れ行く

進むぬらりひよんに部下を引き連れ、首から十字架を下げているし  
ようけらが迫る。

だが、それをぬらりひよんは無視をする。

「させるかぁー！」

向かい撃つは木魚達磨。

他所でも妖怪同士の戦闘が始まっている。

二刀で迫るは鬼の妖怪、鬼堂丸には大猿妖怪の狒々。

頭に包帯を巻いた狂骨には仕込み刀を持ったからす天狗。

顔半分が卒塔婆で覆われている茨木童子にはせつらと不知火炎。

鞍馬山の犬天狗の相手は顔見知りの牛鬼がつとめる。

「擦眼山の牛鬼ではないか……元氣そうじゃのう」

ニコリと笑う犬天狗。  
しかし――

「ワシらに弓引くとは神童と呼ばれた牛若丸も只の阿呆になったよ  
うだな」

それに牛鬼は答えない。

「氷虎がいることだけが唯一の救いだな。あのような身の程知らず  
の大将には勿体無いわ」

「確かに……うちの大將が進む道は獣道……」

牛鬼の畏が爆発的に膨れ上がる。

「だが、それだからこそ面白い!!」

畏を纏った刀を振るった。

そして、氷虎は……

ぬらりひょんと羽衣狐の鬨を見ていた。

いや、それは鬨いとは言えないかもしれない。

羽衣狐の尾は一方的にぬらりひょんを痛め付ける。

羽衣狐に刃が届くことはおろか、近づけもしなかった。

「瑛姫ええええー!」

叫ぶ

しかし、届かない

氷虎はそんな、ぬらりひょんをまっすぐ見つめていた。

「おい、氷虎。なに、突っ立っているんだよ！」

鬼堂丸たちには及ばないもののそれなりの実力を持つ京妖怪たちが氷虎の後ろにやって来る。

「羽衣狐様から逃げたおいて、こんなちっばけな大将についたのがお前の運の尽きだったな」

「……………」

京妖怪が畏を放つ。

「そして、俺らに殺られるんだよなあ！」

畏を纏った複数の刀が氷虎を襲う。

だが、届かない。

妖怪同士の闘いは畏で決まる。

「お前らこそ、そんなちっばけな畏をぶら下げてくんじゃねえよ！」

氷虎の畏が他を飲み込む。

「俺はぬらりひよんの畏に惚れたんだ。だから、アイツのもとについた。たった、それだけだ」

飲まれた妖怪はもう動くことはない。

氷虎の畏をぬらりひよんと羽衣狐も感じていた。

「さすが、憎たらしき奴よのう。氷虎と二人でかかれば余にも傷をつけたかもしれぬのに」

「はっ……。あいつなら一人でもお前を倒せるだろうよ」

羽衣狐が不快な顔をする。

「それなのに、ワシについてきてくれている。ワシを信じてみんなはついてきてくれている」

「それなら早く諦めた方がよい。時間が経つと、死んでしまうぞ。まあ、生きて返してやるつもりは無いが」

「……あいつらだけじゃねえ。ワシもあいつらを信じている。じゃねえと、誰も百鬼を背負えはしねえ！」

再びぬらりひよんが斬りかかる。

「……無駄じゃよ」

尾が腹を挟る。

やはり届かない。

「芸がないのう……一方向的に向かってくるだけではつまらん」

尾が乱舞する。

「お前の惚れた女を頂くぞ」

ぬらりひよんの体から血が垂れる。人間なら既に立っていられないだろう。

「妖様！ なぜ、こんな無茶を！？」

瑛姫が羽衣狐に囚われながらも必死に叫ぶ。

「私は……妖様がわかりません！！ こんなになるまで……男の人は皆そうなのですか！？」

「カワイイことを言うのう瑛姫。いいかえ？ 世の中は人でも妖でも『カシコイ男』は大勢いるのだ……男をしらんな」

よろめきながらもぬらりひよんが口を開ける。

「瑛姫……ワシはお前の目に……今どう映ってる？ やはりそいつが言うようにバカに映るか」

瑛姫は首を激しく横に振った。

「あんたのことを考えると……心が綻ぶんじゃ……」

ゆっくりと体が起きてくる。

「例えるなら『桜』。美しく、清らかで、儂げで、見るもののこころをやわらげる。あんたがそばにおるだけで、きつとワシのまわりは華やぐ。そんな未来が見えるんじゃ」

力を込め、刀を握り締める。

「なのに、あんたは……不幸な顔をしてた。ワシがあんたを幸せにする」

その時――

「あんたに溺れて見失うところじゃった。そろそろ返してもらっぞ、羽衣狐」

――ぬらりひよんの畏が復活する――

「ここからが妖の……本来の戦じゃ」

――畏が畏を喰らう。

ぬらりひよんが前に進むが尾は動かない。

そして、距離が縮まった。

バシィ！！

寸でのところで、尾が刀を弾き飛ばした。

しかし、ぬらりひょんは腰に差した小太刀を再度振るった。

「同じことを！！」

——祢々斬丸。

花開院家十三代目当主秀元が作った退魔刀。

その刃は滑るように尾を裂き羽衣狐の顔を切り裂いた。

羽衣狐は明らかな動揺を示している。顔を斬られたのもあるが、それ以上に……

「ぬけてゆくうううう！！」

切り口から生き肝で集めた力が抜け、天井を突き抜けていった。

「もどりやああ！ 何年かけて集めたと思うとるう！！」

それを追い掛け、羽衣狐も天井の上に向かった。

ぬらりひょんは、

「瑛姫ー！！」

羽衣狐の手から解放された瑛姫を探す。

「総大将！　ここは俺達にまかせろ！！　あんたは奴のとどめを刺しにいけ！」

「牛鬼……！　まかせたぞ……！」

ゆっくりと、そして覇氣のこもった声でそう言つと階上へと上がつていった。

「まて……！」

「行かせんぞ……！」

鬼堂丸やしょうけらが追おうとする。  
しかし、前には進めなかった。

眼前に巨大な氷の壁が立ち塞がったのだ。

「氷虎め……！」

そのとおり、それを作り上げたのは彼らと元同属の妖怪氷虎。

「俺は奴良組の一員氷虎だ。俺の大将がもうすぐ、狐の首をとってくるからおとなしく待ってるんだな」

羽衣狐との因縁なんて俺にはどうだっていい。どうせ、今ごろ俺の  
大将が全部片付けてくれている。

京を抜けた時から孤独だった俺に牛鬼が手を差し伸べてくれた。そ  
れで、奴良組に出逢えた。

あいつらと一緒にいると毎日が楽しくて、今このときらそれはずっ  
と続くんだ。

いづれ、俺にも子供ができてそいつともこの奴良組で楽しくやって  
いきたいと思っている。

一つ気掛かりなのは羽衣狐だ。奴は転生妖怪だから復活して、俺た  
ちの敵になるかもしれない。

でも、まあ俺はまだまだ現役だし、この奴良組なやっていけるだろ  
うな。

俺たちがダメだったら次の世代に任せよう。

そうだなあ。四百年後ぐらいには子供が欲しいかな。

……時代は戻る

ゝ過去編ゝ 流れ行く（後書き）

これで、過去編は終了です。次回からは京編に突入です。

## 出発前

「気持ちいい。このままどこかへ流れて行きたいなあ」

俺こと奴良サイキとリクオは河童を連れて川に来ていた。

陰陽師である花開院ゆらが京で大妖怪羽衣狐が復活したとの報を聞き、帰郷した。

それが、俺も京に行くことを決めた理由。花開院を助けたいというものもあるけど、一番の理由は俺の親の復讐のため。詳しくは知らないけど、俺の親はその羽衣狐に殺されたらしい………というか、そんな記憶が微かに残っている。

「気になるんですかい？ あの子のこと」

ぼーっとしているリクオが気になったのか、川で泳いでいる河童が聞く。

「……京都で一体何が起こってるんだろう？」

花開院さんのお兄さんはやつらが動き出したって……」

リクオはどうするんだろうな……。

「サイキはどう思う？ あっ、サイキが京都に行く理由ってなにか

関係あるのかな？」

さすが、鋭いな。

さて……正直に言うべきか……。

「二人とも、家に行ったらここだって聞いてね!!」

「きつ、清継くん!？」

いきなり、現れたの俺たちの同級生の清十字怪奇探偵団五人だ。

「ゆらくん、京に帰ってしまったんだって!？ まったく夏休みだというのに京都だなんて……ねえ？」

なんだ……みんなも知ってるのか。

「実家なんだからしょうがないでしょ」

「さつ、みんな集まったよ。話つて？」

俺たちを探してここまで来たんだから、なにか話があったのは当たり前か……。

でも、これって清十字団の活動だろうからなんか嫌な予感しかない……。

「そう……ゆらくんは京都にいる。京都といえば……歴史と妖怪。そして、夏休みといえば自由研究だよな？」

やっぱりか。

「そうだ。京都に行こう!!」

「言いたかったただけだろ、そのセリフ！」

と突っ込まれているけど、これは止めるべきなんだろうか。

「よし、行こう。どうせ、みんな暇なんだろう？」

「いや……暇だけどさあ……ねえ？」

「うん。なんだかねえ」

なんか、話が進んでるよ。

「ボクはおじいちゃんに相談してからにするよ」

なにか、考えたあとそう言って去っていくリクオ。じいちゃんに相談するって何でだ？

まさか……いや、まさかねえ。

「それで、サイキ君もおじいさんに相談するのかい？」

だめだ……みんな行く気になってるし、今さらやめておけとも言える空気じゃない。

……仕方ないか。

「行くよ。リクオのことはまた、今度伝えるから日にち決まったら教えくれ」

京都じゃ羽衣狐が復活して妖怪の動きも活発化してそうだからこいつら守るって意味でも一緒に行こう。

「そうかい。じゃあ、なるべく早く連絡してくれたまえよ」

取り合えず、屋敷に戻ってリクオを探す。相談するって言うてたし、じいちゃんの所にいつてみるか。

ここからなら、直接庭から回った方が早いな。

ドボオオン

と水に何かが落ちた音がする。

これってじいちゃんの部屋の前の池の……。

ってあれは……………。

目の前にはじいちゃんと池に沈むリクオ。

「そこで、頭を冷やせリクオ。今のお前じゃあ京へは死に行くよ

うなものじゃあ……」

リクオの考えてたことってただ、旅行に行くだけじゃないんだ。妖怪として、京に行くんだ。

「四国を倒して天狗か？ てめえの力じゃ下っ端にもやられるぞ」

ザパアアッ

「何しやがる……くそじじい。やってみねえとわかんねえだろーが」

「ほう……サイキか、ちょうどいい。リクオの相手をしてやれ」

え？

「いや、でも、リクオとは杯を交わしたんだけど」

「今はかまわん。リクオの甘い考えを叩きのめしてやれ」

どうしていいかわからずリクオをみる。

「いいぜ、サイキ。今からは兄弟喧嘩だ。行くぜえ！」

今のリクオじゃ確かに京妖怪とは渡り合うことは出来ないだろう。

やるしか……ないか。

妖怪化し跳び下がって刃を避ける。

その次の瞬間、リクオの姿が消える。

これがぬらりひよんの畏だ。

でも、リクオには悪いけどこの程度の畏なら……

「すまん……氷炎断!!」

リクオの畏を完全に断ち切った。俺の前でリクオは動けないでいる。じいちゃんの方を見るとゆっくり頷き口を開いた。

「今のお前じゃ京都に行ってもどーしようもない。わかつたらねてろ」

リクオは気を失っている。確かに今のままじゃ京に行っても何も出ずに死んでしまうかもしれない。

下僕として、兄弟としてリクオを死なせるわけにはいかない。ここは、やっぱりリクオに強くなってもらうしかない。

「じいちゃん。リクオを遠野に行かせてみるのはどう？俺みたいにあそこで修行して鬼憑を身に付ければ京妖怪とも闘えるはずだよ」「そうじゃのう。ワシも少しリクオに過保護過ぎたのかもしれないのう。では、奴等に来てもらうとするか」

来てもらうということはあの二人か……

それから二日間リクオは目を覚まさない。

つららやみんなにはだいたいのことを説明してわかってもらった。

それで、さつき清継が日程を言いに来た。

京都に行くのは来週。一応、つららも青も清十字団の一員という  
とでついてくることになっている。

とうとうだな。

京都……羽衣狐……両親のこと……。

わからないことはたくさんあるから……。

それを知るために力はつけたつもりだ。

全ては京都で……。

「さあて、旅の準備でもしようかな!」



## 京（前書き）

通院するために今日は学校を早退できたのでいつもより書けました。  
病名は謎のまま……！

## 京

京都

九坂神社

「京都って神社おおいなあ」

「そうですねえ」

「今のところ羽衣狐一派の気配はしませんぜえ」

清十字団の旅行で俺達は京都に来ている。清継たちは少し先に九坂神社の敷地内に入っていて、俺とついてきたつららと青はゆっくりと祇園四条通りを歩いていた。

「今ごろリクオ様はどうしてるんですかねえ」

「遠野ですよ。3Gとかよばれてますしね」

まあ、確かに極寒、極強ではあるけど極悪ではないだろうなあ。いや、変な奴らは多いけど。

「リクオなら大丈夫だろ。炊事洗濯は嫌だろうけど、俺にへし折られたプライドがあるから絶対強くなってくるだろ」

「それですよ、それ！　なんで、サイキ様とリクオ様が戦つことになつてたんですか！？」

それは、じいちゃんがやれって……。

「あれは回りがやれって言うから！」

「まあまあ、サイキ様。それで、この後はどうするんですか？　お友だちを守るためだけに来たんじゃないんでしょう？」

そうだな……取り合えずあいつらは守らないといけないけど、京妖怪も探さなきゃいけないし……どうしよう。

と九坂神社の敷地内に入った時、

「サイキ君！？」

「花開院！？」

奥のほうから花開院が走ってきた。後ろにはカナがくっついていてる。

「この娘たのむー！！」

間をおかず、カナを青に預け振り返る。

「ほんとに来たんか、サイキ君！？」

「だから行くつつつたじゃねえか。それより、なんだよこの状況は！？」

妖怪が迫ってくる。こいつらが京妖怪か………って鳥居と巻が捕まってるし。  
なにやってるんだよ！

「我が式紙廉貞よ……我が身のために力となり闇を滅せよ！！」

やるか。

妖怪の体にかわる。

「氷鞭！」

「黄泉葬送水泡銃！」

氷の鞭で凍った妖怪どもが花開院の攻撃で滅される。

「何で、こんな……堂々と人を襲ってんの？」

「いくら夜といっても……花開院、やっぱり」

「……」

花開院は口を開かない。

……なんだ？

「ゆらちゃん！？ どうなったの？」

「カナ、まだ目開けるなよ」

急いで、人の姿に戻る。

「ぬおお、ゆらくん！？　ちょうど今からお邪魔しようと思ってたところなんだ！！」

騒がしいのも戻ってきた。どうすんだよ、これから……。

「何でみんなおんねん……まずいで……今京都に来るなんてのは」

やっぱり――

京都は妖におかされた街になりつつある。

花開院本家

ってなんで俺が陰陽師の総本山にいるんだよっ！  
いいのか？

清継たちについてきたらいつの間にか来てたし、花開院も全然止めなかったしどうなってんだよ！？

「本当かい！？ 花開院家のトップ3が三人もやられたの！？」

「……………わからん。全ては『結界』の中で起こったことや。でも義兄ちゃんらは見つからんし『第3の封印』もとかれた。妖はほとんど洛中まで入り込めるようになってる。危険なんや」

「そ、それって具体的にどうなるんだい？」

「今はまだ妖は夜に活動している程度や。だから、花開院家が警告を出して夜には神社仏閣に近づかんようにしてもらってる所や」

「そこまで、きてるのか。」

「それでもホンマにあと二つの封印が解かれれば……………忒條城に入れたら……………取り返しのつかないことになる。これは予想やけど……………」

花開院は少し間を置いてから、

「洛中はおそらく全てが闇にのまれる。そうなればやがて、京都中……………いや、日本中に妖が跋扈するようになるかもしれん！！」

それはさせない。

「どこ行くの？ ゆらちゃん」

「まさか……………」

花開院が立ち上がり部屋を出ていこうとする。

「相剋寺。今夜あたり……来るみたいなんや」

「なんで、逃げないの!？」

「……逃げた人もおるよ。自分の命を守る為にな。でも私らは花開院家の陰陽師や」

俺は奴良組の一員。

リクオの下僕。

人にあだなす妖怪は許さない。

「敵に背を向けて、逃げたらあかんねん!!」

仁義に外れた奴等………背後にいる羽衣狐諸とも俺が倒す。

花開院は部屋から出ていった。

よし!

「つらら、青。じゃんけんしてくれ」

「「じゃんけんですか」」

「そう。今から、俺も相剋寺に行くから勝った奴が俺と一緒に。負けた奴が居残りでいいだろ？」

「ええ。それはいいんですけど……」

「はい。なぜ、相剋寺に行かれるのですか？」

「……リクオが言っただろう。人にあだなす妖怪は許さない。ちょうど、羽衣狐が出てくるんだ。いっちょ、暴れてくるよ」

「そういうことなら、負けないわよ、青！」

「俺だって負けねえよ！」

「「ジャンケン——」」

「サイキ様！？」

「おいおい、これはどういうことだよ……」

てっきり、結界でもはって守衛に回っているのかと思ってたのにもう乱戦状態かよ。

「とにかく、倒すぞ。敵は京妖怪だ」

「はい！」

妖怪の姿になり、炎鞭と氷鞭を装備し京妖怪が集まる場に乗り込んでいく。

先制攻撃だ！

「燃えろお！」

炎鞭で貫き、燃え尽きる。

「なんだ、おめえ？」

一人がやられたことによつて、他の京妖怪が俺達に気付く。また、他の妖怪が陰陽師に攻撃を仕掛ける。

「やらせません！ 風声鶴麗」

氷の息吹で凍てつかす。

「妖のくせになぜ、陰陽師の味方をする！？」

「人にあだなす妖怪はゆるさねえ」

「ああ？ お前、どの妖怪だ？」

こんな小者が京妖怪かよ……。

「浮世絵町仁侠一家奴良組だ！！」

「……奴良組だと。四百年前の恨み……。かかれえー！」

京妖怪が集団になって襲ってくる。手には刀のような物を持っているが関係ない。

振るわれた刀をサッと避け、相手の腹に冷気の塊を押し付け、固まらせる。

敵はまだまだ押し寄せる。

再度、氷鞭と炎鞭を用意し、

「氷炎演舞」

氷鞭と炎鞭を縦横無尽に振り回し、回りの妖怪を蹴散らす。

つらはは――

辺りを見渡す

――大丈夫か。畏で京妖怪を凍らせている。

そういえば、ゆらは……………。

轟！！

なんだ今の！？

こっちから……………大きな畏も幾つか感じる。

見つけた！

花開院と竜二と知らない陰陽師。奥には昔の公家みたいな格好のと  
でかい骸骨の妖怪に……………アイツは！？

「サイキ君、なんで！？」

花開院を無視して横を通りすぎる。

「おい、お前！」

漆黒の髪に目とセーラー服で身を包む女。

だけど、その圧倒的な存在感と畏は今まで遭遇した妖怪とは段違い  
のものだ。

もしかしたら……………コイツが……………。

「……………お主」

俺を見て、そう呟く女。

「髪の色が違うが……………氷虎の子か！？」

やはり、こいつが……………！

「……………そうだ。氷虎と不知火炎の息子でぬらりひよんの養子。妖怪

氷炎のサイキだ」

「へえ、すごいなあ。あの子らの息子でぬらりひよんの養子……  
…やなんてな」

父さんや母さん、じいちゃんを知っている？

「どちらも……見たくない顔じゃ」

武者震いがする。

こいつが両親の仇っ！

「茨木童子、しょうけら……両方消え失せろ！！」

二体の妖怪が刀を構え向かってくる。さっきの京妖怪どもとは段違  
いの畏を放っている。

身構える。

やってやる！

が

煙幕！？

『花開院の子孫どもよ！ 退け！！ 勝ち目はない』

『サイキ様どこにおられますか！？』

たくさんの声が聞こえる。花開院家の人たちは退くみたいだけど、俺は……………

「羽衣狐！俺はお前を倒すぞ！！」

逃げない、絶対に逃げてたまるか！

たった一人の闘い

煙幕が晴れた。

——羽衣狐は！？

……いない？

陰陽師はともかく、京妖怪どもの姿もない。

どこに行きやがったんだよ。妖気はそこら中に散漫しているからよくわからないし……。

「サイキ様！」

「つららか」

氷の薙刀を持ったつららが俺のもとに来た。

「何があつたのですか？ いきなり煙幕が出てきたと思えば、陰陽師も退いていきますし」

「それは変な陰陽師が指示したんだろうけど、そのうちに京妖怪までどこかに行っちゃった」

「それでは今からどうしましょう?」

どうするもなにも……

「探すぞ、つらら! お前はあつちを頼む」

つららは返事をしてさつき来た方を再度探しにいった。

走る——走る——走る——

どこまで走っても見渡す限りの場所にはいない。

もう相剋寺にはいないのか?

.....

いや、待てよ。

花開院は封印とか言ってたよな。たしか、四百年前から続く八つの封印。

それが、ここにあるのか。

じゃあ屋内か!

あまり、見つからなそうなところで妖気が比較的集まっているところはない?

あそこ！

他の建物より質素に作られているから違いないと思う。

よし！

「お前は……」

後ろから声がした。

つららでも竜二たちでもない。初めて聞く声。

「誰だ……」

「お前は……氷虎か！？ いや、若すぎる……息子か」

「父さんのことを知ってることはお前も京妖怪だな」

「……いかにも。私は鬼の頭領、鬼堂丸。裏切り者の息子、奴良組を見過ごすわけにはいかな」

鬼堂丸が畏を発動する。

こいつは……かなりの強い。

「フンッ！」

抜き去った刀で斬りかかってくる。

「チッ、速い」

とつさに炎鞭を使いはねのけるが

「剣戟梅の木！」

畏が飛び交う。

二本の刀が高速で迫ってくる。

「っぐ！」

ヤバイ

「『梅の木』は無限に広がる枝葉のごとき剣。貴様の手数では防げんぞー！」

まけられねえ……

これはただの敵討ちじゃない。奴良組の名前を背負って闘っているんだ。

迷うな……

俺の畏を見せつければいい！

「氷炎断……集！」

「ぬう！」

これなら……！

「なんとお」

轟！！

「わっ」

氷炎断集も破られた……。いや、鬼堂丸も膝をついてるからダメー  
ジは与えられたけど、致命傷ではない。

その時、さつき見つけた建物の扉が開いた。

「何をしておる、鬼堂丸。封印は解いた。残るは式條城のみじゃ」

「羽衣狐様、氷虎の息子がいたもので」

羽衣狐……。後ろには百鬼の面々と奴は……。！？

「氷虎の息子だとお。鬼堂丸と互角にやるとはなあ」

巨大な体に四本の腕。

その妖気は羽衣狐にも匹敵するほど。

「鬼堂丸。そいつは貰うぜ。久々の食事だ」

恐怖……………？

いや、これが奴の畏。

妖怪の戦闘は先に相手の畏に怯んだら負けだ。

「勝手にやれ、土蜘蛛。見たくもない顔じゃ。しっかり始末してお

「けよ」

「俺に命令するな羽衣狐。……こいつは俺の獲物だ。好きにやらせて貰うぜ」

京妖怪は去っていく。

こいつを倒さないと追えないってことか……。

「氷虎の息子なんだでってなあ。奴はおもしれえほどつよかったぜえ」

最初っから全力――

「なっ！」

「お前はどんなんだあ！？」

奴の拳を避けられなかった。

「氷炎だ――」

ウソだろ！？

「炎べっ――」

攻撃がつ！

「ひよっ！」

できない……。――

体が動かない……  
違いすぎる……。

「サイキ様！」

……つららか。こんな姿じゃ、格好もつかない。

「なんだ……他にもいたのか」

待て……よ。つららには……手をだすな……。

「次はおめーだ」

「サイキ様の……サイキ様のカタキ！ 風声鶴麗……！」

土蜘蛛こ拳が凍りつく。

だが――

バキィン！！

――瞬で碎け散る。

「つららっ」

拳がつららを捉えた。

吹き飛ばされたつららが俺の足下に転がる。

「氷虎の息子だと思って期待したが……足りねえな」

甘えてたのかもしれない。つららも俺もリクオと杯を交わして……  
いわば立場は同じなのにこれまでと変わらず俺を慕ってくれて……。

だから、俺もかわらず頼ってしまった。

俺のせいで……仲間を……つららを……！

「……許さねえ」

「あ？」

「潰す！」

全力の……怒りと畏を込めて！

「氷炎断！！」

まっすぐに

奴に向かって

俺の畏を

全てぶつける！！



## 意外な助っ人

父さんと母さん……？

あれ？ 体が小さな俺もいる。

これは……夢か。

それにしても、父さんの背中は大きいなあ。

強くてかつこいい父さんにきれいで優しい母さん。

二人とも俺の尊敬する偉大な大妖怪だ。

散歩でもしている風景かな。

あれ？

俺の手にはいつの間にかボロボロの刀がある。これって魔王の小槌！？

どうして、俺が持っているんだ。

お、おい……何構えているんだよ。

何やっているんだよ、俺！

どうして、父さんに刃を向けているんだよ!!

待てよっ

ダメだろっ

やめろっ、やめろって!

「はっ!」

今のって昔の記憶なのか……?

俺が父さんと母さんを殺すはずがない!

ちくしょうっ。何がどうなっているんだよ。

「ここは……?」

物置のような場所だけど、部屋の外は少し騒がしいな。

そう言えば、姿も人間のものに戻っている。

「……いつ!」

なんか、ボロボロだよな。土蜘蛛に負けて、つららも連れ去られて。最後の氷炎断も訳もわからずやった結果でもう一回と言われても無

理だ。

たった、三日で何ができるって言うんだよ……。

スウ……と静かに戸が開いた。

入ってきたのは花開院とさっき見掛けた、公家のような男。

「目覚ましたんか！？ まったく……妖怪の回復力にはあきれは……」

「花開院……ここは？」

「ここは花開院本家のうちの部屋や」

なんだ。物置じゃなかったのか。

「今、なんか失礼なこと考えたやろ」

なぜ、わかる。

陰陽師って人の心でも読むのかよ。

「で、君はどうしてあんなところでボロボロになって倒れていたのかな？」

「なんで、言わなきゃいけないんだよ。それより、お前は誰だよ  
いくら陰陽師でも今の時代にこんな格好をする奴なんていないはずだ。」

「そう言えば自己紹介がまだやったな。ボクは花開院家十三代目当主秀元や。このゆらちゃんの式神として呼び出されたんや」

式神で昔の当主を呼び出すなんて出来るのかよ……。

「ボクは言ったよ？ 次は君の番や」

「……俺は妖怪氷虎と不知火炎の息子の妖怪氷炎の奴良サイキだ」

俺の言葉を聞いて秀元が驚く。

「ちょっとまってくれ、サイキ君。サイキ君は養子だから苗字がリクオ君と同じで今言った妖怪に捨てられたってことなんやな？」

前にそんなことも言ってたな。

「養子の件は本当だけど、俺は捨てられてない。俺の両親は殺されたんだよ……羽衣狐に」

夢のせいかな少ない淀んでしまう。

「氷虎くんと不知火炎ちゃんが！？」

なんで、秀元が愛称で呼んでるんだ？  
まさか……

「父さんと母さんのことを知ってるのか！？」

「知ってるで。会ったのは一回きりやったけど元気のいい子達やっ

たから記憶に残ってるわ」

「でも、なんで陰陽師のあんたと父さんたちが会っているんだ？」

まさか、滅するためとかか？

「まあ、四百年前の話やけど奴良組は羽衣狐一派とやり合った。そこにボクも居合わせたんや」

「そつか……………じゃあ、俺はそろそろ行くよ」

「ちょ、そんな体でどこ行くねん!？」

取り合えず何かしなくちゃいけない。

「敵討ちか？」

「……………さつき土蜘蛛とやり合った。結果は見ての通りだったけど三日後にまたやろうと言っていた」

全て話すことにした。

何ができるのかわからないけど何かするしかないんだ。

「その時に仲間を人質にとられた。俺は強くならなくちゃいけないんだよ……………少しでも」

「土蜘蛛は強いで？」

そんなのわかっている。

「奴を超えなきゃ羽衣狐には届かない」

気を失っている間に着せてもらっていた布を羽織り部屋を出ていく。土蜘蛛とやったときに下はともかく上半身に来ていたものはボロボロになっている。

戸を閉める直前に花開院の声が聞こえた気がした。

花開院の屋敷を飛び出してきたものの、どうするあてもないな……。

街に溢れている京妖怪を相手にとろうとしてもさすがにこの時間ではほとんどいない。

青に手伝ってもらうのが一番良さそうだけど今更、花開院の屋敷に戻れっこない。

とりあえず、何かするにしても街中じゃ無理だ。

人気の少ないところに移動しよう。

早歩きで街を抜けていく。早朝とはいえ上半身には布を一枚羽織っただけだし、土蜘蛛にやられた傷も多々ある。人の目を避けたくない

っ  
てしまっ  
う。

「よお」

突然、前から声をかけられる。  
誰だ？

京都に知り合いなんていない。しかも、フードのようなもので顔も見えにくくなっている。

一つわかるのは男の声だと言うことだけだ。

京妖怪の可能性も低くない。

どうする？ 無視するか……。

「お前その傷……。京妖怪にやられちゃったのかよ！？ 情けねえなあ」

やっぱり、妖怪。

でも、この話し方は俺の周りじゃあいつだよな。

「うるせえ。それより、なんで京都に来てるんだよ一つ目」

奴良組の幹部で古参の一人。リクオのことを認めないからあんまり好きなやつじゃないんだけど。

「総大将に言われて来たんだよ。あと、お前に会いにな」

「俺にだ！？ 何気持ち悪いこと言ってるんだ！」

「ああ！ 俺だって氷虎の子供じゃなきゃこんなことするかよ。奴には貸しもあるが借りもある」

そう言えば一つ目が現役で出入りにも参加していた頃から父さんも奴良組にいたんだよな。

「わかったけど、俺に何の用事があるんだよ」

「用事というよりはお前の親の話をしにきた」

父さんと母さんの話だって？

それは聞きたいけど今は時間がない。

「それなら、この闘いが終わってからにしてくれ。俺には時間がないんだ」

早く強くなってつららを取り戻さないといけない。

「死ぬよりましなんじゃねえのか。話を聞いた限りじゃ、今のお前だと羽衣狐には勝てないだろうな」

「うっせえ！ だから、今から三日間修行して強くなるんだよっ」

「一人でやったところで三日じゃ何も出来ねえよ。今のお前じゃ俺の畏さえも断ち切れねえ」

何を、と言い返そうとしたが出来なかった。

初めて感じる一つ目の畏に抵抗することが出来なかった。

「その成じゃ、どうせボコボコにやられたんだろ？ それなら、教

えてやるよ。お前が受け継いだ畏についてを……。ついてこい！」  
キセルを加えた、一つ目を俺はこのとき初めてかつこいいと思ってしまった。

歩くこと三十分ほどで人気のない山道まで来ていた。

「ここは？」

「知らん。適当に人気な無いところに来ただけだ」

まあ、一つ目が京都の地理に詳しいとは思えない。

「さつきも言ったが、お前には親である氷虎と不知火炎の畏について話す。俺ができるのは話すことと、ちょっと相手をしてやるだけだ。あとは、お前の力次第だ」

「わかった」

俺の受け継いだ、畏がどんなものか聞いて、そこから自分の技にしていけということだな。

そういうことなら、一人だけでガムシヤラにやるよりいいだろう。

「じゃあ、まず不知火炎のほうだ。あいつは超攻撃型の畏だ。鋭い炎剣と目にも止まらない速さで飛ぶ翼を持っている。今のお前の鞭

は元々氷虎の技だが、それを磨けば鞭をも切り裂く剣になる」

「うん」

「そんな素直だと気持ちわりいぞ」

うつせ。

早く続けろよ。

「で氷虎の氷断だが、お前はこういう感じで放ってる？」

どういう感じ……？

「あれって、畏をもって畏を断ち切るっていうものだろ」

「まあ、実際そうなんだが。でも、考えてみる。自分より大きな畏を持った相手だとまったく意味を成さない。逆に吞まれるだけだ」

土蜘蛛との闘いが思い出される。

あの時は攻撃する暇なんて一つも無かったけど通用しないだろうな。その前にやった鬼堂丸にも押し勝ってなかったし。

「氷虎から聞いたんだが、あれはただ自分の畏をぶつけるものじゃない。相手の畏を利用して自分の力へ変換するものらしい。だから、氷虎は強く誰にも負けなかった」

相手の力を自分の力に……？

そんなこと……

「どうやって!？」

「それは知らねえよ。ちつとは自分で考えろっ」

そんなこと言ってもまったく見当がつかない。

「まあ、これはどんな妖怪でも言える事だが………まずは敵の畏  
を見極めろ。ガムシヤラに向かっても吞まれるだけだぜ」

とりあえず、実戦あるのみか！

「話ありがとよ。特訓も付き合ってくれらんだろ？」

「たく……。ガキのお守りは柄じゃねえんだがな」

何だよ。

なかなかいいやつじゃねえか。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1191n/>

---

ぬらりひよんの孫 氷炎

2011年10月6日19時04分発行